

A.6.8.0.
1238

祕

ヒトラー 總統 著
後篇 マイン・カンプ
(ナチスの運動) (其の二)

外務省情報部

第一編 長

昭和十五年十月

情
196

40
40
4

15.11.15

調一0122

0421

緒言

本書マイン・カムプの翻譯に着手して以來既刊のもの四冊、本輯と合せて全部五冊、原書前後兩篇七百八十一頁の翻譯は之を以て大尾となつた。
譯文各冊附するところの索引は同僚板倉勝忠君の作成せるものである。譯書も亦編輯から校正に至るまで悉く同君の手を煩はした。今漸く本稿の成るに際し、謹んで同君の助力に對し深く謝意を表す。

昭和十五年九月十二日

譯者

調一0122

0422

目次

緒言

第五章 ナチスの政綱は修正を許さざるの巻

一 精神的テロ

二 ナチスの政綱は修正を許さず

三 カトリック教會の信條

四 國民運動はナチスが元祖

第六章 舌の力、雄辯の巻

一 ヴェルサイユ條約の曝露

二 ナチスは輿論に迎合せず

三 プレスト・リトースク條約の闡明

四 舌の長と筆の短

五 演説の「こゝ」

六 革命と舌の力	三三
七 ロイド・ジョージの演説	三六
八 演説會と黨の團結	三九
第七章 赤色戰線突破の卷	三九
一 既成政黨の演説會	四〇
二 勞働者の妨害	四一
三 新聞の攻撃	四二
四 警察を頼まず	四三
五 警備團の編成	四四
六 ハーゲンクロイツの問題	四五
七 クローネ・サーカスの大演説會	四六
八 勞働者のなぐり込み	四七

第八章 大同團結を非とするの卷	四七
一 ナチスの優先權	四七
二 人間的な悲劇	四八

三 オーストリとプロイセンの對立	八三
四 人間の嫉妬	八四
五 ユリウス・シトライヘル	八五
第九章 突撃隊の卷	八五
一 國家存立の三要素	八六
二 國民の三つの層	八七
三 ドイツ革命の内情	八八
四 既成政黨と防護團	八九
五 テロにはテロで	九〇
六 突撃隊と防護團	九一
七 突撃隊の三つの方針	九二
八 秘密結社を排す	九三
九 突撃隊の本質及活動	九四
一〇 コーブルグの大活劇	九五

第十章 聯邦分權主義の卷	九五
--------------	----

一 南北ドイツの對立	三六
二 戰時會社の横暴	四〇
三 クルト・アイスネルの陰謀	四二
四 ナチスのプロシヤ擁護論	四五
五 ナチスのアンチ・セミチズム	四七
六 宗派的對立	五三
七 中央集權は勢である	五五
八 ヴェルサイユ條約と中央集權	五七
第十一章 黨部と宣傳班の卷	五七
一 闘士と學者	五七
二 黨員と共鳴者	五九
三 黨勢擴張と宣傳	六〇
四 黨の組織の改造	六五
五 新聞經營部の獨立	六五

第十二章 勞働組合の卷	六四
一 勞働組合は缺くべからざるもの乎	六四
二 ナチスの理想とする勞働組合	六六
三 ナチス・ドイツの勞資協調	六九
四 ナチス勞働組合の可否	七〇
五 マルキシスト勞働組合の攪亂	七四
跋	七九
索引	七九

第五章 ナチスの政綱は修正を許さざるの巻

一、精神的テロ

以上私はナチスの理想とする民族國家の大觀を叙した。而かもこの國家たるやその狀貌を知つただけでは實現されない。民族國家の奈何なるものであるかを知ると共に、之を我等の間に實現させる方法を講究しなければならぬ。之が難しいのだ。既成政黨はいつまでも今日のだらしない態度を改めるところがないから彼等に對して自發的に覺醒を望むのは困難だ。現在の政黨といふものは幹部にジョーが輻を利かして居るものが多い。ジョーは世界の各國を亡ぼし地上の覇者たらんとしてゐるのだ。ドイツのブルジョアと稱せらるる者、プロレタリアと呼ばるる者は共にジョーの陰謀を知らないわけでもあるまいが、意氣地が無い爲めジョーと手を切つて勇敢に戦ふことが出来ずジョーに丸められて喘いで居るばかりだ。ジョーはその間の呼吸を呑み込んで世界制覇の運動に拍車をかけて居る。然ればジョーに左右されて居る政黨は必然的にジョーの手足となりて働かざるを得ず、アリアン族の將來などを考へる餘裕がない。

然れば民族國家を實現せんとするものは既成政黨その他の現存勢力に頼ることなく、自力で理想に邁進せんとする強い力を探さねばならぬ。

ナチスの理想を實現するは一朝一夕のことでない。之れには舉黨一致の惡戦苦闘が必要だ。それ故に弱いものは之れに堪へられない。ナチス革命の困難はナチスの國家觀を明らかにすることなく、ナチス國家の實現を阻止せんとするジューの勢力を叩きつぶすことにある。凡ての革命は之を妨害する邪魔物の打破に骨が折れるのだ。凡そ革命が起れば社會の各層に亘り保守的分子は團結して新運動の擡頭を抑へんとする。之れ古今東西軌を一にするといつても過言でない。

革命には二つの方面がある。革命の理想を實現せんとする努力がその一である。之れは革命の積極的方面といふべきである。革命は理想實現に務むると共に反對分子を屈伏せしめることが必要である。之れがその二つであつて革命の消極的方面ともいふべきものである。ところで總ての革命運動は積極的方面に力を注ぐと共に消極的方面をも疎かにしてはならぬ。

革命運動は理想に邁進すると共に敵に對していつも攻勢に出ることを忘れてはならないのだ。我等と同じく民族主義を標榜する政黨のうちで次のやうなことを自慢にして居るものがある。曰く我等は自らの理想實現に専念すべく、他人を攻撃するやうなことを爲してはならぬと。斯の如きは世間を知らず歴史を知らず、頭のわるい、時代遅れの古物とでもいふべき連中だ。

マルキシズムに於て建設的方面がある。積極的方面がある。間違つてはゐるが、兎に角ユダヤ人のマルキシズムには世界的金權政治の樹立といふ理想がある。ジューの運動にも積極消極の兩方面がある。ところで、こゝ七十年來ジューの専ら力を傾注せるは積極的方面よりも寧ろ消極的方面にあつた。マルキシストは理想の宣傳よりも寧ろ反對勢力の打破に努めて來た跡がある。

彼等は今や多年の目的を達してドイツを共和國にしたけれども、共和政府建設に至るまでの彼等の努力は専ら帝制ドイツの打倒に注がれた。之はマルキシズムたらずとも當然のことだ。いくら新しい政治上の理想を擧げて見たところで、只だそれだけで人々が承知するものでは決してない。人間は本來こそく者だ。又こそくならずとも、己れに都合の善い間は過激な變動を嫌がり、現状維持を欲する。此の如く現状維持に執着する者に對して革新の理想を説いて見たとて耳に入るものではない。どうしても力で聞かせるの他はない。唯だ高踏的に己等の理想を實現することにさへ専念すれば善い。反對するものは反對するに任かせて置けといふことになれば畢竟彼も善い、此れもわるくないといふことになつて、それが善いのか區別がつかなくなる。然りながら世の中に眞理は二つない。あれも善ければ、これも善いといふのは眞剣の信條でない。眞理は唯一無二であつて、一つが本當なら一つは嘘、一つが嘘なら一つは本當で兩方とも眞理だといふことはない。ナチスの信念が本當のものなら、他黨のそれはにせ物であるべきだ。異端の存立を許すべきでない。

試みに宗教のことを考へて見給へ。キリスト教だつて教を廣めるには先づ異端を征伐することが必要であつた。キリスト教徒は決して異端をそのまゝにして置かなかつた。人は之を偏執といふであらう。併しキリスト教の成功はこの偏執にあつた。

人或は難じてかく言ふものがあらう。キリスト教徒の異教排斥はユダヤ人的であり、アリアン人たる我等の執りて模範とすべきことではないと。尤も千萬なことである。言ふまでもなくユダヤ人の偏執は惡むべく排斥すべきものである。ジューの偏執は昔も今も溢りなく當代のジューやマルキシストの偏執も畢竟ユダヤ民族なる爲めであるが、ジューがそれ程我慢偏執の強いものだとして好ましくとか好ましくないとか言ふやうな呑氣なことではなく、我等とても何を措いてもいかにして偏狭なマルキシストを退治すべきやを考へねばならぬことになる。ところで偏狭な者と戦ふにはこちらにも偏狭でアナチツクになるの他はない。唯だちからの理想信念が相手のやうな有害なものでなく、純真にして活潑なものたるを要する。

己れの信仰を唯一絶対のものとし、他宗の信仰を排斥して、信徒に研究をさへ禁ずるのは極言すれば精神的テロ行爲である。キリスト教の流布と共に精神的テロが此の世の中に幅を利かすやうになり今日でも依然として我等の周圍に行はれて居る。それはわるいに相違ないが、併し精神的テロに打ち勝つには精神的テロを以てするより他に方法はない。我等の理想を押し立てんとせば、先づ我等に敵

對する者を攻撃し、之を倒さねばならぬ。敵が倒れさへすればこちらの理想は自ら實現される。戦に臨んで困難なことを言つて居られぬ。抑も苟合妥協は既成政黨のことだ。民族國家の信念に生きるナチスは妥協を知らない。反對黨との對立を認めるのは既成政黨である。ナチスは凡そ反對黨なるものの對立を容認せぬ。

既成政黨と雖も始めは同じく他の政黨を押しつけて己れだけで天下を支配せんとする氣魄を持つて居たのである。その上今日ではさうではないが始めは政黨としての信念らしいものも持つて居たのだところが今日ではその信念も、氣魄もなくなり、集まつて来る者が懦弱で闘志のない人間ばかりになり、政黨の使命は他黨との妥協に依り一つでも多く大臣の椅子を自黨の手に收め、出来るだけ永くそれに啗りついて居ることを考へ、政黨の信念も他黨を叩き潰して理想を實現せんとする氣魄を無くして了つたのだ。

凡そ人間の信念なるものは一あつて二なきものである。既に二なきものであれば、そこに信念の對立などがあるべきわけではない。政治に於ても、相手の政黨がわるかつたら、それを叩き潰すのが本當だ。己れの善しとしない政黨と妥協するが如きことは志ある者のなさざるところである。

此の如きは信念に忠なる政黨にありては殆んど自明のことであるが、妥協を排して進まんとすれば一時、四面楚歌の苦境に立つこと、之れ亦豫め覺悟を要する。反對黨を克服し、味方の旗印を振りか

六
ざして進むは容易でない。之には國民の中最も氣力ある者を選び、之を集めて強固な戰闘的團體に鍛へ上げる必要がある。而してその團體をして活潑な働きをなさしめる爲にはその政綱も運動の精神がすぐに判るやうな簡單なものでなければならぬ。無論之れは集まつて来る者の頭の程度に由ることである。ナチスは一度定めた政綱を風向次第で改めるやうなことを斷じてせぬ。次に我が黨の士は深いナチスの哲學まで究め盡して居なければならぬといふことはない。信念が大切なんだ。
細かいことは知らなくても立憲の精神といふやうなものを掴みさへすれば善い。要は狭くともそれに徹底するにある。これで行けばどこへ行つても敗けることはないとの自信を持つことが何よりも必要なのだ。

戰さだつて同じことだ。兵卒は大將の作戰まで悉く知つて居なければならぬといふことはない。兵士として必要なことは大將を信じて必勝の意氣に燃えることだ。それで十分なのだ。我がナチスの間には於ても黨員は先づ忠實な兵士であれば善いのだ。兵が悉く大將になつたらその軍隊は役に立たぬ。政治運動でも頭の善い者ばかり集まつて騒いで居てはものにならぬ。政治運動でも大將より兵士が必要なのだ。大將ばかりでは八ヶ間敷いばかりで黨規の維持が出来ぬ。いかなる種類なるとを問はず、凡そ團體運動となれば、少數の者が上に居て指導し、下に居る者が上を信じてついて行くといふこと

七
になる。一の中隊でも二百人の人間が悉く將校であるのが善いか、十人だけが將校で百九十人が兵士であるのが善いかと云へば、兵士が多くて將校の少ないものが善い。

將校ばかりのものは各自が大將になるから善くない。政黨の組織だつて同じことだ。

ドイツの社會民主黨が黨として今日の大を致したのはここに目をつけた爲である。軍隊では服従の規律を叩き込むことが第一になつて居る。社會民主黨は黨員を集むるに當り努めて一度軍隊に居て規律に慣れたものをひき込みそれを更に社會民主黨の厳格な規律で鍛へ上げることにしたものである。而して黨の組織も亦軍隊式で黨員は將校と兵卒といつたやうなものに分れて居り、平黨員は兵卒で、インテリのジューが幹部將校、労働組合の幹部が下士といつたやうなことになつて居る。社會民主黨は無教育な黨員の多いのも此の如き事情に由るのだ。既成政黨はそれを不思議なことやうに言つて居るが、安んぞ知らん社會民主黨の大をなした所以は寧ろ多くの無教育者を包容して居る點にあるのだ。蓋し既成政黨では船頭が多くていつも山へ船を乗り上げるやうなことはかりやつて居るが、社會民主黨では上にあつて頭を働かせる者を成るべく少くし、他は悉く幹部の命に由つて動く平黨員である。平黨員の中には前にも述べた如く軍隊に居たものが多いから、軍隊に居て將校に對してなして居たと同じやうに、黨員になつても幹部に絶対服従をやるから黨の規律がうまく保たれる。然るに既成政黨には第一人間といふものが判らないのだから、社會民主黨の強いのはインテリの少い爲である

ことを悟らず、インテリの集つて居る政黨は教育のない者の多い政黨よりも善く、内閣を組織するにしてもインテリの政黨でなければ資格のないものやうにいつて居る。然りながら本來政黨の強味は頭の善い者が多くて各自が天狗になつて居ることなく、幹部を信頼して絶対服従を恥とせざる黨員の多いところにある。言ひ換へれば政黨は上下の規律が厳しくなければ駄目なんだ。戦闘に臨んでも兩軍對峙の場合、どちらが勝つかと云へば、大將ばかりの軍隊は負け、大將は一人で他は悉く手足となつて働く兵である方が勝つ。之も判りきつたことだが既成政黨にはこんな自明な道理さへ判らないのだ。

戦さは軍の規律が大切だ。ナチスの運動に於ても第一に考ふべきは黨の規律だ。

然れば我が黨に於ても黨の組織は之を軍隊的にすべしと言を俟たず、從て又黨の政綱も理想に偏せず、多數黨員に判り易いものでなければならぬ。黨の究極の理想は深遠なものであつても黨員に判からせる爲めには六ヶ敷いことを並べてはならぬ。理想は奈以に高遠でも大衆の理解がなければ實現されないのだ。ナチスの政綱が簡明を主とするは之が爲だ。

我等ナチスの抱懷する民族主義は珍らしいものでなく、どこにもそこがつて居るのであつて、唯だ國家がそれを自覺しないまでのことだ。それ故に之をはつきりさせる爲め我等はナチス思想の中から根本的なものを抽出し、それを大衆に判知し易くしようといふのである。こゝに大衆といふのは主

として労働者のことを言ふのだから、要するにナチスの政綱はドイツの労働階級を目標とした通俗なものたるを要すといふことになる。

かくてナチスの政綱は二十五ヶ條の項目に壓縮された。之等の項目は大衆にナチスの趣意を傳ふるを目的とするものである。教會には教會の信條がある。ナチスの政綱はナチスの信條であつて、一は之に依りて同志を集め、一は之に依りて同志の團結を保たんとするのである。

二、ナチスの政綱は修正を許さず

政綱の選擇については是非とも考へて置かねばならぬことが一つある。ナチスの現政綱は黨の根本信念に基いたものであること言ふまでもないが裏にも述べた如く、我等の政綱は大衆の理解し易きことを主として組み立てたものであるから、多少の手加減が加はり、論理的に完全なものであるとは言へない。從つて黨内でも今後時日を経るに従ひあるものは削り、あるところは加へようといふ問題が起つて来るに相違ない。則ち政綱の修正なんだ。ところで私が思ふに政黨として一度定めた政綱を途中で修正する程、悪いことはないのだ。何となれば政黨は政黨の信條であり、信條なるものは絶対に信仰せられるところに力があるものだ。信條に批判が加へられるやうになれば、黨は動搖せざるを得ない。加之政綱修正が一度問題となると、紛議百出、それでゐてうまく纏まつたものが出来るかと云ふ

と、さうでなく統一のとれた善いものが出来ずして徒らに論争の種子を党内にまいたといふに過ぎないことが多い。若しどうしても政綱を修正しなければならぬと言ふ者があつたら、政綱の形式が纏まつて黨の纏りがつかなくなるのが良いか、政綱の形式が纏まつて居なくても、黨に内紛のないのが善いかを、篇と考へねばなるまい。考へれば馬鹿でない限り前者がわるくて、後者の善いことに氣がつくであらう。

政綱の修正は多くの場合形式にとどまるものであつて、多く問題とするに足らないやうなものだが人間は馬鹿なもので政綱を修正して善いことになる、いつの間にか之をいぢり廻はさうとする者が現はれ、そんなのが文字の末に就て論議して居るうちに、本來の目的を忘れ、外部に對して闘ふことを止め内輪で無用の論争を繰り返し、そればかりで日を送ることになる。これも政綱の修正に伴ふ一つの危険だ。

政黨の綱領は大體筋が通つて居るへすれば、その後多少事情に適せぬものが出来ても直したりせず其の儘存置するのが善いのだ。今迄絶対に信ぜられて來たものを中途から直すと黨員の信念が動搖して善くない。殊に未だ目的を達せず一意闘ひを續けて居る間は政綱に手を觸れてはならぬ。何となれば絶対の真理だと思へばこそ身を挺して闘ふ力も出て來るのだ。闘ひの最中に政綱を度々變へられたのでは、それまでついで來た熱心な同志でも自信を失つて闘はなくなる虞も多分にある。

政綱の生命は形式にあるのではなく、内なる精神にある。黨の精神を損じまいとすれば黨に内訌が生じたり動搖があつてはならぬ。政綱の修正は黨の分裂を招き黨員の闘志を鈍らせるものである。

三、カトリック教の信條

こゝでも我等はカトリック教會のやり方に學ぶべきものがある。同教派の信條中には當今の科學に矛盾するものが少からずある。それでもカトリック教會では一字だつて教會の信條に手を觸れようとは爲ない。人は一にも二にも科學といふけれども科學上の學說だつて不變のものでなく絶えず動搖して居るのだ。どちらが本當だか判つたものでない。それは兎も角としてカトリック教會では時代がどう變つても、時代に依つて信條を修正して行くといふやうなことは斷じてなく、昔の儘のドグマを今日も尙ほ側目もふらずにその儘固く守つて渝らない。カトリックの強味は此にある。又それでこそ信仰といふものでもあるのだ。カトリックの坊さんは之を知つて居るから非科學的と云はれても平氣だ斷じて教義を改めない。而してカトリックは益々盛んになるばかりだ。これからも世相は限りなく變つて行かう。此の間にありて終始その教義を改めざるカトリックは北斗の如きものである。恐らくはカトリックは今後益々強い信者を吸収することにならう。

それ故に苟くもナチスの勝利を衷心より希望する者は第一にナチスは奮闘的政黨たること第二にナ

ナチスの政綱は確乎不動にして修正を許さざるものであることを心に銘して忘れてはならぬ。政綱は一度善しとして決定せる後は時流に迎合して筆を加へてはならぬ。少くともナチスが天下をとるまでは修正を企ててはならぬ。ナチスの政綱と雖も完全なりとは言へない。政綱のうちでも或るものは不備であり、あるものは疑のたれる物もあらう。然りながら未だ天下をとらざるうちに修正を企つるが如きことあらば、偶々以て黨の團結を破るばかりで、百害あつて一利もない。若し徒らにいぢり廻して居たら、今日一條を改め明日一條を改め、明後日は更に復た一條を改めて底止するところを知らぬことにならう。黨員は深く此に思を致さねばならぬ。

ドイツ民族社會労働黨則ちナチスは黨の政綱として二十五ヶ條の項目を採用した。之は不變不動なものである。現在の黨員も今後黨員となるものも苟くもナチスに加盟する者は政綱をいぢり廻はすことを止めて一意政綱の實現をはかるべきである。何となれば若し我等が今日政綱の修正にのみ心を用ゐるやうなことがあれば、次のゼネレーションも亦我等と同じく事ある毎に修正を企て、無用の詮議に精力を消耗して、黨本來の使命が留守となるであらう。蓋し政綱の生命は文字の末にあるのではなく、精神にあること度々述べた通りである。

ナチスがドイツ労働黨といふ黨名を選び、理窟の多いインテリよりも理窟のない労働者をねらつたのもこゝに見るところがあつた爲であり、政綱の通俗なものの爲であり、而して又黨の今日勢力を

得來つた理由もこゝにあるのだ。ナチスは實際的な政黨たるを要する。ナチス黨の黨員は頭のある少數の幹部について來れば善いのだ。

ナチスは實行的な政黨であり、その組織も亦實際的である。之れ則ちナチスの活氣ある所以であつて之れでなければナチスの勝利はない。ナチスは國民的思想運動の代表者であり、ナチス以外に國民的思想を代表する政黨はない。ナチスは國民思想の粹で、國民思想の粹はナチスである。ナチス黨員は此のプライドを失つてはならぬ。従つて國民的思想に共鳴する者はナチスに來り投ずべく、ナチス以外の黨に依りて國民的思想の達成を謀らんとするは徒勞である。

人或は難じて曰はん、ナチスが國民的思想の專賣をやるのは怪しからぬと。之れに對して我等は次の如く答へん。曰く、然り、我等は國民的思想運動を聲嘶して居る。併し又國民的思想の實現に全力を傾注して居るものはナチス以外にない。

今日國民的な言葉は廣く用ゐられて居る。然りながらそれを口にする者のうちに、實際國民を生かす力のあるものは一つもない。何となれば、世上に行はるゝ國民的思想なるものはつゞりして居ない。當今世上に喧傳される國民的思想なるものは必ずしも間違ひでない。中には正しいものもあるけれども、又矛盾撞着のものも多く、渾然と纏つて生命のあるものは他に一つもない。又多少纏まつて居ても力がない。國民的思想に統一した形體を與へ、之を代表する者はナチスばかりである。

四、國民運動はナチスが元祖

昨今國民的な名稱を冠する團體が雨後の筍の如くに簇生する。所謂大政黨と稱する者まで近頃は盛んに國民的といふ言葉を使つて得意になつて居る。併しながら之れ等も畢竟ナチスの運動に刺戟せられた結果で、ナチスの運動がなかつたら、彼等と雖も今尙ほ國民的な言葉を知らなかつたであらう。國民的と言つてもそんな言葉は彼等に判らなかつたであらう。ナチスの出る迄は政黨首領のうちで、國民的といふ言葉の意味を知つて居たものはなかつたやうだ。蓋し國民的な言葉に纏つた内容を與へたのはナチスである。ナチスが一度此の言葉に生命を與へてから國民的といふ字が人々の口に喧傳されるやうになつたのだ。他の政黨が今になつて國民的といふ言葉を看板に掲げるやうになつたのはナチス黨の成功に刺戟されたのだ。

既成政黨の行動は唯だ選舉と黨勢の擴張とに懸つて居る。昨今彼等が國民的といふ字を口にすることは黨員をナチスに持つて行かれるのを防ぐ爲に過ぎない。それ故に口に國民的といふ言葉を使つて居てもそれはほんたうに裝飾的な内容のない空虚なものである。抑も國民的といふ字は既成政黨でも今日黨の標語として盛んに使用するけれども彼等が之を標語として用ゐるやうになつたのは僅か二年前からのことであつて、國民的と云ふと三年前までは迫害を加へたものである。四、五年前までは皆か

ら憎まれたものである。六年前には馬鹿と罵られ、七年前には嘲笑され、八年前には國民的と云つても誰もその意味さへ知らなかつたものだ。それを今になつて俄かに己等の發明の如く政黨が競ふて此の言葉を用ゐるやうになつたのはナチスの勢力に驚き、愚圖々として居ては黨員をナチスにとられる虞が生じて來た爲めに外ならぬ。陋態憐むべしだ。

斯くて今日では既成政黨でも國民的といふ言葉を使いながら、ドイツ國民の何をなすべきかに就て毫も知るところがない。之れ又彼等の國民的運動が借り物たる證據だ。

單り既成政黨ばかりでなく、今日では國民的といつて騒いで居る者が他にも少からずある。此の人は似而非國民主義者である。而て盛んに彼等だけの取り止めのない計劃をもち廻つて居るが之れ亦困つたものである。

言ふところ悉くわくはないが、多くは一部のものの頑冥な思想であつて、國民の大衆運動にはなり得ないものである。彼等は或は己の頭から、或は讀んだ書物の中から己の氣に入つたものを拾ひ集めて國民主義の政綱といつたやうなものを作り上げ、八方奔走して宣傳に努めて居るが、眞の國民運動にとりては、眞向から向つて來るマルキシストより似而非國民主義者の方が厄介であり又危険である。こんなのが紛れこむと、黨内にごたごたが起つて始末がわるい。彼等はいろ／＼のことを持込むで來るだらうが、我が同志は誘惑に耳を傾けてはならぬ。

第六章 舌の力、雄辯の巻

一、ヴェルサイユ條約の曝露

ナチスが第一回の大演説會を開催したのは一九二〇年二月の廿四日、場所はホーフブローイハウスの大廣間であつた。その大會が終ると間もなく我等は直ちに次の會の準備にとりかゝつた。ミュンヘンくらの町で一と月に一回宛演説會を開いてそれで聴衆が繁いて行かれるかどうかは疑はしい。況んや二週間に一度宛開いたら尙更聴衆はやつて來ないに定まつて居る。然るに我等は今や一週間に一度宛開かうと言ふのだ。私には來てさへくれれば聴かせるだけの自信はあつたけれども、扱て果して聴衆が來るかどうか。それが唯一の心配であつた。

ホーフブローイハウスの廣間は此の時から我等にとりて殆んど神聖な意味を持つやうになつた。毎週一回宛開く。會場は度を重ねるに従ひ、聴衆は次第に多くなつて行つた。演題は曰く戦争責任、曰く講和條約、その他苟も國民を警醒するに足るものは何でも演題にされた。併しながらそのうちでも私が最も力を用ゐたものは講和條約のことであつた。

今日では到るところで盛んに論議されて居て何人も不思議としないが、その當時にありてはプロレタリアの集まつて居るところで公然とヴェルサイユ條約を攻撃することは共和政府に對する叛逆と同一視せられたものである。又復辟派とまで罵られなくても、反動派として指彈せられたものである。それ故に私が演壇に起つてヴェルサイユ條約を攻撃すると、聴衆の中からプレスト・リトースク條約はどうした。プレスト・リトースク條約! といふ彌次が盛んにとんだものだ。世のなかにこんなわからない民衆がどこにあらう。私は猛り立つて嘲罵を浴せかける聴衆を見て、自分自身が壁に頭を叩きつけて死に度い程にも思つた。ヴェルサイユ條約は屈辱の講和であり、國民を深にして突つ放す追はぎのやうな條約だ。ドイツ國民はそれに氣がつかない。之もマルキシストと聯合國の惡宣傳に誤られて居る爲であると思へば是非ないことだとも考へられた。マルキシストや聯合國が國民を惑はして居るとすれば、その惑を解き、正しき認識を與へる必要がある。然るに所謂他の國民主義者と言ふ者が、一人と雖も身を挺してその任に當るものがなく、敵側の惡宣傳を袖手傍觀してなすべき術を知らないのだ。世に之れ程の怠慢がまたとあらうか。惟ふに國民主義者と雖もヴェルサイユ條約の非を知らないわけがない。彼等も顔を合はすれば必ずヴェルサイユ條約を惡く言つて居たに相違ない。然しながらそれは同志の間から然らざれば欣んで聴いてくれる者だけで、狼のやうな反對派のなかへ飛込んで行つて自説を主張する程の勇氣ある者はないのだ。尤も行かない方が幸で狼のなかへ入つたら、

自説を主張するところが狼と共に吠へるくらゐものであらう。

ところで私はドイツ國民の覺醒を促すには、ヴェルサイユ條約の不都合なことを暴露するのが第一の要務であると考えた。又、それからの経過を見ても、ヴェルサイユ條約の暴露が後のナチスの運動に力を添へたことは明かである。それでも尙ほその頃は、ヴェルサイユ條約はデモクラシーの勝利として、一部國民に歓迎されて居た時であるから、之れに向つて公然反撃を加へるのは容易の業でなかつた。唯だ頼むところは我等の撓まざる奮闘だ。奮闘さへ續ければ、いつか國民の眼も醒めようといふものだ。

當時既に私は次の主張を持つて居た。則ち苟くもナチスの根本方針に關する限り、人氣に觸らうと、憎まれやうと、戦を挑まれやうと、敢然として主張を維持しなければならぬといふのである。ナチスは輿論の玩具でなくして、輿論の指導者でなければならぬ、大衆の奴隸でなくして、大衆の主人でなくてはならぬ。

二、ナチスは輿論に迎合せず

基礎の未だ強固ならざる新黨にとりては多くの場合に次のやうな誘惑がある。それは他でもない。反對派の主張のうちで民衆が欣んでつゝいて行くやうなものと、それを自黨の政綱中にとり入れ

て民衆の心を得んとすることである。殊にそれがいくらか自黨の主張に似たものがあるとき誘惑は一層強い。而かもそんな心持で探したら反對派の主張のうちになつて似たものはいくらでもある。事實に於て我黨でも一再ならず、輿論なるものに捲込まれようとしたことがあつた。輿論に引きずられて人氣に投ぜんとしたのである。而も私はその都度死力を盡して喰止めた。丁度新聞が南チロル問題ととり上げて伊太利攻撃を開始した時である。八方ふさがりのドイツとしては今日イタリアより外に味方とすべきものはないのだ。ジューは此の邊のことを知つて居るから力を極めて獨伊の離間に努めたものだ。南チロル問題をやかましく新聞に書き立て始めたのは獨伊を離間せんとするジューの陰謀であつたのだ。而かも無智な國民はそれに雷同したのでからチロル問題で輿論に反對するのは極めて不利なことであつた。それ故に既成政黨や愛國的志士と稱する人々まで連りに悲憤慷慨を装ひ盛んにムッソーニを攻撃した。ムッソーニのイタリアはジューの陰謀を覆し國民主義の大看板をかざして勇敢に戦つて居る唯一の國家である。ドイツとしてはこちらから進んで接近こそすれ之を敵とするのは以ての外である。然るに怯懦なるドイツの政治家は國民の輿論とさへ言へば一も二もなく迎合すべきものと心得てゐるのは誤りの甚しきものである。彼等に曰はせたら彼等だけの言拔けはあらうが、畢竟世を欺き自らを欺く言拔けであつて、既成政黨及一部の志士なるものがチロル問題で、イタリアを盛んに攻撃したのは俗論に反對する勇氣がなかつたのだ。

私としてはどうしてもナチスを此の反伊運動に捲込まれさせ度くなかつた。私は鐵腕を以て邁る仲間を抑へて、運動に加擔させなかつた。當時ドイツの國內では焰のやうな反伊運動が燃上がつて居たのである。その間に立ちてイタリーの排すべきでなく反つて親しむべきものであることを疾呼するのである。然りながら古來の偉人傑士なるものは此の如き場合、衆論に反對して殺されたものが少くないのだ。彼等の偉いところはこゝにあるのであつて、豪傑の士は知己を百年の後にまつたの覺悟あるべく、一時の人氣を見て進退を左右にしてはならぬ。

ナチスは靜かに後世歴史の批判を俟たんとするものだ。俗人の喝采に喜憂するものでない。人々よ惡るるなかれ。艱難克服の後には勝利の榮光がある。國家改造の意氣に燃ゆるナチスは現代人の人氣などを目的としてはならぬ。一世の罵倒を受けても頓着することなく、善しと信ずるところに向つて繰進せねばならぬ。

古來の豪傑は事をなさんとすると、いつでも始めに世を擧げての反對に遭遇したものだ。天才の意
見は俗論とは正反對なものが多いからだ。世に立つて事を成さんとする者はいつでも俗論の反對を受
ける覺悟を要する。

我等ナチスの主張が容易に世間から認められぬものであることは、始めて運動に乗り出した時より既に私には明かであつた。當時私が演壇に立つて話すると私の話すことが聴衆にのみ込めなかつた。

私の考へて居ることと聴衆の考へて居ることが、いつもあべこべになつて居たのだ。そんな場合でも二時間も喋つて居れば、二三千の聴衆は夢から醒めたやうな顔をして、私の説に耳を傾けるやうになつたものだ。

その後演説を重ねて居るうちにふと私に氣のついたことがある。それは敵の武器を以て敵を攻撃することである。私の演説を妨害する者の言ふことはいつもさまつて居る。彼等が私の演説を邪魔に来るときは豫め申合せて彌次の文句まで用意して來たのだ。そこで私が演説を始めると彼等は教へ込まれたまゝの彌次を飛ばすのであるが、それがなか／＼巧みなものでプロバガンダの統一といふ點では敵ながらも天晴なものであつた。始めは判らなかつたが間もなく彼等の彌次は上の者から教へ込まれて來るのであることが判つたから、私も研究して彌次を封ずる工夫をなした。それが所謂敵の武器を以て敵を撃つといふ作戰になつたのだ。

三、プレスト・リトースク條約の闡明

抑も敵の武器を執つて敵を伐つといふのは、敵が彌次の論據とするところのものを奪ひ、それで對手を攻撃するのである。端的に云へば演說會に來て彌次が言はうとするところを機先を制してこちらで封じて了ふのである。共產黨員の彌次はいつもきまつて居たから私はナチスの主義を説く前に、先

私の主張を反駁するに用ゐるであらうところの相手の反論をこちらから持ち出して一々之を辯駁し、而て後本論に入ることにしたのだ。蓋し彼等は多く無智な労働者でその彌次といふものも彼等の頭から出たものでなく、幹部の入れ智恵に過ぎないのだから、こちらが先廻りして彼等の頼みにして居る彌次の論據を、一々反駁して行くと虚を突かれた形で狼狽すると共に、惡意のある者でない限りは、いつとはなしに私の演説に耳を傾けるやうになるのである。

私が始めて人の前で講演を行つたのは家に居た時のことであつて、その時の題目が抑もヴェルサイユ條約といふのであり、その後もヴェルサイユ條約で通したが、敵の武器で敵を伐つといふやうになつてからはヴェルサイユ條約だけでなく、之にブレスト・リトースク條約をつけ加へて、ヴェルサイユ條約とブレスト・リトースク條約と云ふ題目を選ぶことにした。ヴェルサイユ條約だけでは駄目だといふことは、私が始めて此の問題で講演を行つた時から氣のついて居たことではあるが、共產黨の彌次がいつもブレスト・リトースク條約にあることが判つてからは、ヴェルサイユ條約と共にブレスト・リトースク條約の暴露に力を用ゐることになつたのだ。當時労働者の多數はドイツのロシアに課したブレスト・リトースク條約はこの上もない苛酷なものだと考へて居たのだ。之は無論巧みな共和黨の宣傳に依るものであるが、國民はそんなことは知らず、云はるゝが儘にブレスト・リトースク條約はドイツの欺瞞であり、ヴェルサイユ條約の苛酷なもの畢竟ブレスト・リトースク條約に對する聯

合國側の報復に過ぎないと考へるに至つた。此の如き事情で、當時はうつかりヴェルサイユ條約をわるいふと皆から怒られたもので、巨額の賠償金の如きものも無理だといふ者より、ドイツが巨額の賠償金を拂ふのは當然だと言ふ者が、ドイツ人のなかに多かつたのだ。情ないことだが、嘘でない、事實そんな時があつたのだ。そんなこともあつたから私は一層ブレスト・リトースク條約の真相を明らかに盡すやうになつたのだが、それが非常に善かつたと見えて、今迄ヴェルサイユ條約の攻撃にのみ力を用ゐて居た間は大した反響はなかつたが、ブレスト・リトースク條約をも説くに至つて、俄かに成績が善くなつた。私は兩條約をとりて逐條比較對照し、ブレスト・リトースク條約が極めて寛大であり、ヴェルサイユ條約の極めて苛酷なことを説明するに努めた。當時ナチスの演説會と云へば大抵二千人位の集りで、時には三千五六百人の多きところもあつたが、私がじゅん／＼と説くと始めは憎惡の目を以て私を注視して居た聴衆も、三時間後には雪崩をうつて私の前へ押し寄せて來て私に握手を求め、今始めてヴェルサイユ條約の慘虐なことが判つたと云つて扼腕するのであつた。

當時私が最も力を入れた演説の題目が二つあつた。一つは世界戦争の真相といふのであつて、一つは今云つたヴェルサイユとブレスト・リトースク條約といふのであつた。私は此の二つの問題について聴衆の納得の行くまで幾度もいろ／＼の形で之を繰り返した。その結果ブレスト・リトースクとヴェルサイユの兩條約のみならず、世界戦争の真相も次第に理解されることになり、それを機會にナチ

ス運動に投じて來た者も少からずあつた。

四、舌の長と筆の短

ナチスの演説大會は此の外にも私にとりて善いことがあつた。それは會を重ねる毎に私はいつのまにか大衆相手の辯士となりまして、演説の口調も滑かに、ゼスチュアも巧みになつて數千人の聴衆を容れる大きな會場でも、演説をやつて骨が折れなくなつたことである。之も一つのまうけものだ。今日ではヴェルサイユ條約に對する國家の輿論も殆んど一變した。既成政黨は之を以て恰かも自分の達の手柄のやうに吹聴して居るけれども、以前は一部少數の小さな集りを除き、ヴェルサイユ條約の不都合を公然と批難する政黨は一つもなかつたものだ。偶々國民主義を標榜する政治家があり、ヴェルサイユ條約の廢棄を口にする者があつても、それは同志の者の集つて居るところに限られ、反對者の前でも憚らず之を公言する者はなかつた。然りながら仲間のうちで話合つて居るだけでは何の役にも立たぬ。そんな連中が今頃になつてヴェルサイユ條約に對する輿論を一變させたのは俺達の方だなどと威張つて居るのは片腹痛いことだ。

演説會を開催すると共に私はパンフレットをも利用してヴェルサイユ條約の真相を明らかにするに努めた。私はヴェルサイユ、ブレスト・リトースク兩條約を對照して前者の非人道的なものであるこ

とを明かにしたパンフレットを配つた。之は以前軍で教官として働いて居た時に造つたもので當時も既に非常に廣く讀まれ、部數も多く刷つたものである。今度はその残りを取り寄せて黨で利用することになつたのだ。之も成績は頗る善かつた。それから演説會と云へばいつもパンフレットや新聞を演説の始まる前に聴衆席の机の上に配布して置くことにしたが、私の主力を用ゐたのはやつぱり書いたものでなくて話される言葉則ち演説であつた。蓋し聴衆の心をつかむのは演説を措いて他にない。古來同天の大運動は何れも舌の力に依るものであつて、筆の力に依るものでないことは既に本書の前篇に於ても述べて置いた。當時私の此の説をとり上げて問題とした新聞があり、盛んに喰つてかつたが、演説は駄目だといふ反對者の多くは自由主義者とか既成政黨とかの人々であつた。之れは當然のことであつて一般にインテリと稱せられる徒は演説に依つて人を動かす力がなく、専ら筆を動かしてそれで足れりとする人々であるから、舌の力は筆に勝るといふ私の説を欣ばないのは無理のないことだとも言へよう。同時にこの人々に大衆の心をつかむ力のない理由も此にある。

演説にはいろ／＼都合の良いことがある。壇に立ち會場を見渡して演説をして居ると、己れの言つて居ること、がどれだけ理解されて居るか、又どう言つたら善いか、どう言つたらわるいかといふやうなことが直ぐに聴衆の顔色で判り、自ら演説にも工夫が出來て、へ々な事を言はなくなる。筆を執つて居るものにはそんな機會がない。目の前に聴衆を置いて言つて居るのでないから、書くことが空

疎になり、讀者に縁のないやうなものになり易い。辯論に優れたものは概して書くことも巧いが、書くことの巧い者は特別の練習をなさざる限り、辯論も巧いといふわけに行かない。これも筆の人には讀者の心理を読む機会が少い爲であらう。

加之大衆なるものは、本来なまけものであつて、いつまでも古いことを考へて居り、己れの氣に入らぬことを書いた書物などは、決して自分から進んで讀まうとはしない。讀むとしても己れの氣に入つたものでなければ讀まぬ。これが折角書物を世の中へ出して肝腎の讀ませ度い者が讀まずに、讀まなくても好い同臭味のものにのみ讀まれる所以である。宣傳ビラとか或は又立看板になると少し趣が違ひ、短くて直ぐに判るから、反對派のものでも一應は目をとめる。繪畫になると更に良く、フィルムになつて來ると、誰でも思はず知らずひきつけられる。繪やフィルムは頭を使ふ必要がない。觀てさへ居れば可い。讀むと言つても字幕を讀むくらゐの勞に過ぎない。民衆が面倒な本を讀まずして映畫やボンチに奔るのは之が爲めである。頭を使ふのがあつてくうなのだ。書物だと欠伸しながらも終りまで讀まなければ判らないが、映畫は書物に長たらしき書いてあることを一瞬間に雜作なく目の前に見せてくれる。

書物だと書いたとて誰の手に渡るか判らない。而て誰の手に渡つても書かれたものは同一であつて讀者に依つて内容が變るといふやうな融通が利かない。インテリに讀ませるものはインテリ向に又ブ

ロレタリヤ向のものは始めからプロレタリヤ向に書いたら、書いたものでも演説に近い効果を擧げられるけれども畢竟筆の力は舌に及ばぬ。こゝに一人の辯士があるとする。論ずるところは書物に書いてあるところと同じものであつても巧みな演説家なら、その時その時の傍聴者の心に訴へるやう、臨機應變にやると、よくしたもので不思議にも適當な言葉が意を用ゐずして舌の上につて來、脱線すれば傍聴者が黙つて居ないから己にもさう氣がついて直すやうになる。而して前にも述べたやうに、己の言ふことが判るか知ら、口調がはや過ぎはせぬか知ら、最後に話の趣意が徹底したかどうか知ら、凡そそれらのことは少しく注意さへ爲て居れば聴衆の顔色でわけなく讀みとれる。若し言ふことがわからないやうなら、誰にでも判るやうに調子を低くして六ヶ敷いことを避ける。聴衆が跟いて來られないやうなら語調を緩め、聴衆に呑み込めないやうなら趣好をかへ、他のやさしい例を引いて幾度でも繰返し説明し、或は又その場の模様次第で殊更に反對派の彌次をとらへて辯駁を加へ、敵の廻はし者に兜を脱がせるやうなことも出来る。演説だといふやうな融通が利く。

世の中には間違つた考を持つて居る者が少くない。困つたことであるが、中でも厄介なのは先入の偏見で固まつて居る連中だ。理窟があるのでなく、感情だけなのだ、所謂喰はずぎらひで、こちらの言ふことを聞かうとせず、頭から反對して居るのだから、それを改めさせるのは容易でない。學說上の謬見なら學問で説破することが出来るけれども、感情から來る反對はどうにもしやうがない。と

ところがそんな頑固な人間でも、書物で讀むのでなく演説を聴いてゐるうちに、不圖今迄の誤りに氣のつくやうなことが屢々ある。これなども演説だけが持つ魔力であつて、筆にはそんな力がない。

當今右派の新聞のうちにも數百萬の發行部數を有し、廣く國民に讀まれて居るものがある。それにも係らず、大衆は右翼へ行かずして左へばかり寄つて行くのも新聞だけでは効果のない證據だ。その上右系の新聞は迂闊で世間が判らぬと來てゐる。右派の新聞は今日洪水のやうに氾濫して居る。書籍も年々出版される。それでも右派の新聞と云へば油を塗つた皮革が水を弾くやうに、労働階級は受けつけない。之は書くものの内容が間違つて居る爲であらうが、假令間違つて居なくても書くものだけでは民衆を引きつけることは出来ない。況んやその書くものが既に民衆の頭にピンと來ないものなるに於てをやだ。

ドイツ・ナショナル黨系のベルリン某新聞は余の辯論第一主義説を駁して言つた。マルキシズムの勢力を得たのは筆の力である。殊にマルクスの資本論はマルキシスト今日の勢を致すに與つて力あるものではなかつたかと。凡そ世の中に之れ程見當違ひの見方はない。マルキシズムが大衆の間に勢力を扶殖し來つたのは資本論の廣く讀まれた爲でなくて、マルキシストの宣傳に由るものであつて、その宣傳は専ら辯論演説の力に由るものだ。數十萬のドイツ労働者のうち、マルクスの資本論を讀んで居る者は百人とは居るまい。マルキシストの中でも讀んで居るものは少數インテリとジューだけで労働

者である平黨員は讀んで居ないのだ。資本論は世界制覇の陰謀に奔走するジューの爲めに書き下ろされたものである。資本論は赤の幹部の爲めに書かれたもので、一般黨員の爲めに書かれたものでないから、平黨員は名を聞いて居ても殆んど讀んで居ない。平黨員や一般大衆を動かすものは資本論でなくて別に他の手段が講ぜられて居る。

それは則ち新聞の利用だ。こゝにマルキシスト陣營の新聞と右派新聞との相違がある。蓋し左派新聞社の記者は多くプロ黨の辯士を兼ねて居るが、右派の新聞記者は筆ばかりで演説の出來る者がない。社會民主黨の新聞社では舌の人間が新聞を書いて居るのに反し、右系新聞社の記者は演説ざらひで經驗もないから、演説させると大衆の前に立つただけでも人いきりに當てられて口も利けなくなるといふ意氣地なさだ。こんなことでは書くものだつて大衆の頭にピンと來るわけがない。

マルキシズムが數百萬の労働者を獲得したのは文書の力でなくて、上は黨の幹部から、下は労働組合員に至るまで數十萬の者が心を合せて街頭宣傳に努めた爲であり、此は辯論の力である。社會民主黨の人々は居酒屋のやうなところでも労働者相手に卓の上に立つて演説をやる。彼等が労働者の心理をつかむことに巧みなものこの爲だ。次は集團的の示威運動である。個人としての労働者は見る影もない果敢ない存在である。その果敢ない存在でも幾々として數里にも亘る示威運動の長い列に加はるとき、俄かに己れまで大きくなつたやうに感ずる。彼等は考へる。なんとといふ勢だ、この凄じい長蛇

三〇
の列の口から吐き出される炎は、いつか我等の仇敵である資本家階級を呪ひ落し、我等の憧れである、プロレタリアの獨裁政治をもたらさずには居るまいと。頼るところなき労働者はそんなことを考へ、争うてマルクス側の陣營へ移つて行くのだ。

労働者が社会民主黨の新聞を欣んで讀むやうになるのも、こんな場合が多いので彼等の中には示威運動に加はつてから、社民黨の新聞を讀むやうになつたと言ふ者が少くないのだ。ところでその新聞なるものが之れ亦書くといふよりも演説を爲て居るのだ。右派の新聞社だつて學者もあり、教授もあり、達者な記者もあるが、どれもこれも演説が下手で、書くことは毎日缺かさないうが演説などは滅多にやらない。それだけに記事にも力がない。マルキシストの社では人々皆辯論の士であつて、記者と言つても筆より舌に力を用ゐてゐるのが多い。マルキシスト系新聞の記事が、それ自身演説である所以だ。

右系の新聞でもこの頃は大方ジュー系の新聞のまねをするものが多くなつた。それらを別とし、民衆の目を覺まさせることに腐心する右系新聞が、心ばかりで毫も大衆を引きつける力のないのは、主として右のやうな理由に基くのだが、演説もらしくではないのだ。

五、演説の「こゝ」

凡そ演説にはいろ／＼のこゝがある。例へば同じく演説をするにしても、演説は時間に大きな關係がある。題目が同一で、辯士が同一で、會場が同一であつても午前十時に開いたのと、午後三時に開いたのと、夕方に開いたのでは、すっかり違つた成績が出る。未だ慣れない時であつたから、今から考へれば無理もないが私は嘗て午前中に演説會を開いて失敗した記憶がある。聯合國の暴壓といふ題でミュンヘンのキンドルケラーで演説會を開いたときのことだ。此の會場は當時ミュンヘンでは一番大きな場所であつた。駆け出しのナチスがそんなところで演説會を開くのは、非常な冒険であつたから、同志や一般聴衆になるべく多く來てもらはうと思ひ、便宜を計つた積でその日は日曜であつたから開會の時間を午前十時と定めたのである。ところでそれが全然失敗に終つた。會場は幸ひ満員の盛況であつたが、どことなく會場がさえない。人氣が引立たない。聴衆もさうだが辯士の私もとりつゝ嶋がなかつた。演説は平常より拙かつたとは思はぬが、成績は殆んど零で不満な心持で會場を去つたが、私としては善い経験になつた。その後も三度午前中に開いたがいつも成績は善くなかつた。

之は決して不思議なことでない。試みに演劇を見給へ。同一の出しもので、同一の舞臺でも午後三時に見たのと、夜八時に見たのでは印象が違ふ。芝居はやつぱり夜見るべきものだ。キネマだつて同じことだ。芝居は晝と夜とでは役者の氣の入れ方が違ふといふかも知れないが、キネマは夜だつて晝だつて同じものである。それであり乍ら觀客の印象の異なるのは全く時間の關係に依るのである。

時が人の心に作用するのだ。單り時ばかりでなく場所も大に關係する、同じくパルシファルといつても、バイロイトと他の場所とでやつたのでは全然趣が變つて来る。

人間は畢竟時と場所とに左右せられるものである。それ故に演説會を催すにしても反對派の者が多く押し寄せて居る集會では特に之等の點を考へて工天を凝らす必要がある。凡そ朝や日中は人間の心がしつかりして居るから違つた思想が外から入つて来ようとしても、防ぎとめて入れない。それが夜だと心が疲れて弱つて居るから、違つた思想が外から入つて来ようとする、わけもなく受入れて防ぎとめようとする。外から来るものに敗けて了ふのだ。反對派の詰めかけて居る會場は對立せる二つの思想の闘争場である。此の闘争に勝を制するには日が高くて、敵が氣の張り切つてゐる時は不可ない。そんなときは外部から動かさうとしても容易に動かされないからだ。こちらの主張をうまく受け入れさせる爲には、對手の氣の緩んだ時を窺はねばならぬ。それなら成功する。演説會はいつも、夜にするのはその爲めだ。演説と云つてもらくちやない。開會の時間や場所にまでかく氣を配らねばならぬのだ。

カトリック教會の會堂の内部は、いつも薄暗くて中に燈明がかゝげられ、香煙が縷々とたなびいてどことなく崇嚴な氣にうたれる。これなども物を借りて信者の心を動かす宗教の手段である。カトリックの坊さんは時や場所が人を動かすことを最も善く心得て居るのだ。

六、革命と舌の力

妨害者の多い演説會は、イデオロギの白兵戦だからやる方でも骨が折れる。その代り辯士も工夫をしていろ／＼演説の「こづ」といふやうなものを會得する。演説會に時と場所との關係を無視してならぬことの判かつたのも、演壇での經驗に由るものである。筆の人にはそんな機會が少い。世の中には己と同じ思想の人間もあれば、反對の思想を持つて居るものもある。筆は己と志を同うするものを鼓舞し、志を同じうする同志を他に移らないやうに引きとめることは出来やうが、己に反對な者を引張つてくる事が出来ない。歴史上の大變革でも書いたものの力で出来上がったものはない。革命があればそれにつれて書いたものも出るが、書いたものから革命が生れるのではない。

人は曰ふ、フランス革命は書物から生れたものである。書いたものも馬鹿に出来ないと。併しそれは嘘だ、信じてはならぬ。フランス革命は一部の煽動政治家が當時塗炭の苦みにあつたフランスの大衆を煽動して暴動を起させたので、全歐を擧げて戦慄する程の騒ぎとなつたのである。フランスの哲學者や書いたものから生れたのでは斷じてない。近代の最大革命と呼べる、ロシアのボルシェヴィキだつて同じことだ。ロシア革命の成功はレニンの著書の影響でなく、之も煽動政治家の舌の力に由るものである。

ロシアには文盲の者が多い。文盲の輩がカール・マルクスの本を読んで共産革命に参加するなどといふことは考へられない。ロシアに革命の起つたのは世界革命の陰謀團が、今日革命を起せば明日からでも地上に天國が現出するやうなことを言つてだまし、無智な國民がそれにうまく乗せられた爲に他ならぬ。

フランスやロシアばかりでない。世の中の革命何れも然らざるはなく今後とても亦然りであらう。

七、ロイド・ジョージの演説

ドイツのインテリは言ふ、舌の人は筆の人より頭がわるい。之れ亦世間知らずの愚論である。私の演説第一主義に對し批難を加へた新聞のあつたことは前にも述べた。その新聞は世の所謂雄辯家なる者の演説は印刷したものを見るとがっかりすると書いた。まだ戦地に居たときのことだが私の見た他の新聞にも同じやうなことが書いてあつた。それはロイド・ジョージの演説をこき下ろしたものであつた。ロイド・ジョージはその時軍需大臣であつた。件の新聞にはロイド・ジョージともあらうものがこゝになつたらぬ、月並なことを言つて居て善いのかと書いてあつた。ロイド・ジョージの演説はその後合本となつて世に出た。私は早速それを讀んだが實にうまいものだと思ふと共に、ドイツの新聞記者の頭のないのがなまけなくなつた。ロイド・ジョージは有數なデマゴグだ。民衆の心をつかむ

こゝに於て彼れ程巧みな男はない。ロイド・ジョージの演説は民衆心理を理解した偉大なデマゴグの最大傑作である。ドイツの新聞記者などに値打の判らう筈はない。惟ふに、日刊の新聞記者は自分の讀んだ印象で價值判斷をなして居るのが、ロイド・ジョージのねらひはインテリでなくて大衆にあるのだ。彼は英國の下層階級に廣く呼びかけて居るのだ。かくしてみると、彼の演説は最も良く成功せるものである。蓋し民衆の心理に通ずること頗る深きものでなければこんな演説は出来るものではない。これ單り私の臆説でなくて當時の英國國民は彼の演説に由つて鼓舞せられること多かつたのだ。

ロイド・ジョージに比較すると、我がベートマン・ホルウエヒの演説は他愛のないものであつた。目で讀んだところは立派に相違ないが、畢竟國民の氣持がちつともわかつて居ないのだ。彼には國民に呼びかける能力などは少しもなかつたのだ。それにも係らずドイツの新聞ではベートマン・ホルウエヒの演説が立派で、ロイド・ジョージの演説は不味いと言ふのだ。ロイド・ジョージの演説は大衆を目當てにやつたものであるから、學問で化石して居るやうな頭のインテリにはつまらぬかもしれず、ベートマン・ホルウエヒの演説は上品だからインテリに受けが善いのであらうが、ロイド・ジョージは平易な言葉を以て國民の言はんと欲するところを代つて言つてくれるから大衆は悦ぶ。ロイド・ジョージの演説の淺薄なりとせらるゝ所以は則ち役者がベートマン・ホルウエヒより一枚上なる所以である。用ゐる言葉が通俗で言ひ廻しがうまく引例はくだけたもので誰にでも良くわかる。此が則ち彼

の曲者たる所以だ。政治家の演説は大學教授の受けがわるくても善い。大衆に受け入れられれば成功なんだ。而て辯士の優劣も亦その標準に依つて定めらるべきものだ。

三六

八、演説會と黨の團結

我がナチス黨が今日既に政界に重きをなし、内外の敵から目の上のこぶとせられるまでに勢を得て來たのは、インテリでなく民衆を對象として演説宣傳に力を用ゐ來つた賜物である。

文書宣傳も大切に相違ないが、今のところナチスでも書いたものは將來幹部たるべきものに讀ませるくらゐのもので、マルキシストの大衆獲得には文書宣傳は効果が無い。恐らくは社會民主黨員や共產黨員で、ナチスの書物やパンフレットを買つて研究するやうな者は殆んど一人も居るまい。新聞にしたところで、社會民主黨か共產黨の新聞なら讀まうが、ナチスの新聞などは決して手にしないであらう。假に讀んだとしても一枚ぐらゐの新聞ではナチスの主張が全部わかるわけもなからう。月極の購讀ならいくらか善からうが一銭の錢さへあるそかに使へない勞働者に、研究の爲だからナチスの新聞も讀めと云つて勧める者もなからうぢやないか。マルキシスト大衆のなかでナチスの新聞を購讀しようといふやうな特志家は萬に一もあるまい。ナチスの新聞を讀むのはナチスの黨員になつてからのことだ。それも黨の機關新聞として黨の運動狀況を知る爲に過ぎぬ。

宣傳ビラは新聞に比していくらか善い。殊にそれが時事問題をとらへ、無代で配布される場合には、誰でも讀んでみ、一應は注意するけれども、それに依つて直ちにナチスの運動に参加してくるやうなことはない。大衆を引入れる爲には注意を喚起するばかりでなく、幾度も繰返してこちらの主張を深く對手の頭のなかへ叩き込む必要がある。而かもそれにはやつぱり書いたものでなく大勢集まる演説會に加くものはない。

マルキシストの勞働者で、同僚と分れてナチス運動に投じて來るものは黨に來ても始めはなじみがなく、動もすればひとりぼつちでたよりなく感ずることがある。そんなときに黨の演説會でも開かれて仲間と一緒になつて働くと、いつのまにか自分でも力強く感ずるやうになる。かくて演説會は新黨員を鼓舞し力と與ふる爲めにも必要缺くべからざるものである。同じ兵でも獨りで氣おくれのする場合でも、中隊とか或は大隊とかの中に雜つて仲間の者と勵まし合ふときは、今迄知られなかつた勇氣が出て恐ろしい突撃でも平氣でやれるやうになる。黨員は相寄る機會を多く持たねばならぬ。

集會は黨員に力と與へると共に黨の團結を固くし、團體精神を強くさせる。蓋し始めて黨員になつたものは會社に居るものでも、工場のもので周囲から少からぬ迫害を受ける。そんな場合に自分は一人でない、多くの仲間が己の背後に居るのだといふ慰安がなければ淋しくてやつて行けない。而かも此の慰安を與へてくれるものは同志と顔なじみになることで、それにも演説會などが最も善いのだ。

三七

三九
獨居して動もすれば意氣の消沈しうな新米の黨員が小さな職場から、或は又大きな工場から出て来て、ナチスの演説會場へ来て三、四千の同志が氣勢を擧げて居るのを目のあたりに見ると、それまで尙ほ心の隅に残つて居たマルキシズムへの執着なども、いつか消え去つてナチスの勝利を確信するやうになる。群衆心理の力は強いものだ。かくて来る時には尙ほ足の重かつた者も、會場を去る時は俺もナチスの黨員だといふ確信を以て歸つて行く。

ナチスはどこまでも舌の宣傳を忘れてはならぬ。インテリや有産階級の者が何と言つてもそれに耳を傾ける必要がない。ドイツの有産階級は物識りだが、祖國を救ふ力がない。祖國を救ふ能はざるのみならず、彼等自身の階級の破滅をも救ふことが出来ないではないか。恐ろしく惨憺だ。出来ないことは一つもない。知らぬことも一つもないが、マルキシズムだけは今だに持てあまして居る。

有産階級やインテリは概ね演説は駄目だ、役に立たぬといふ。舌の力は筆の力に及ばぬといふのだ。然りながらそれは畢竟彼等の演説が拙いからである。

第七章 赤色戦線突破の巻

一、既成政黨の演説會

私は一九一九、二〇、二一の三年にわたつて、既成政黨の所謂演説會なるものを聴きに往つたものだ。私は青年の頃に肝油を飲まされて困つたことがある。肝油は飲んだ方が善い、飲めば身體に善いといふことだが恐ろしく不味くて飲みにくい。既成政黨の演説を聴いて居ると、丁度肝油を飲ませて居るやうな思ふ。國民の頭に網をつけて會場へ引つばつて来て、演説のすむまで入口の戸を閉めて一人も外へ出さぬやうにし、すんだら出してやる。そんなことを二、三百年も續けて居たら或はいくらか效能があるかも知れないが、それでは國民がたまらぬ。その位ならドイツ人たることを御免蒙りたいと言ふ者が出よう。當今頭の確かな人間なら、惡魔が神の水を恐れるやうに既成政黨の演説會を厭がるのは少しも不思議でない。

既成政黨の辯士は、所謂國民主義の闘士たるべき人々である。私はその闘士を目のあたり見るに及んで、彼等が演説は駄目だと云つて居る所以がすぐに判つた。當時私の聴きに往つた演説會はいろいろあつた。民主黨の演説會にも行けば、ドイツ國民黨の演説會にも行き、ドイツ國權黨の演説會にも

行けば、バイエルン國民黨即ちバイエルン中央黨の演説會にも行つた。之等の演説會に行つて第一に目につくことは聴衆が一世にまとまつて居ることである。演説會に来て居る聴衆は、殆んど味方のもので、全體の空氣がだらけきつて居り、未曾有の革新に面して居る國民の大會といふよりも、寧ろ欠伸まじりのカルタ會といふやうな感じであつた。辯士の演説が亦會場の空氣にふさはしいものであつた。辯士はいづれも傍聴者から騒がれることのないやうにとそればかり氣にして居るやうであつた。辯士の多くは演説と云つても新聞の論説みたやうなものや、學術上の論文のやうなものを朗讀するのであつた。則ち彼等の演説の多くは朗讀演説であつて、荒い言葉は使はず、ところ／＼に氣の抜けたやうなウィットを挟むのであるが、その度毎に坐長は御義理に笑つて見せる。それもから／＼と高く聲を出して笑ふのでなく、威儀を損せざるやうに笑顔を示すくらゐなんだ。

辯士も辯士であるが、坐長といふのが亦だらしのない代物だ。

ミュンヘンのワグナザールの演説會であつた。ライプツツヒ會戰の記念演説會であつた。演説と言ふのか朗讀と言ふのか知らないが、演壇に立つて居るのは何々大學の教授といふ勿體ぶつた老紳士であつた。座長は正面に座を占め、左に一人、右に一人、真ん中に一人陪席のやうな者が陣取つて、何れも背廣服といふでたちだから、何のことはない、會場は死刑の宣告を下す法廷のやうであつた。兒童の洗禮をやる儀場のやうであるともいへよう。何れにしても、政談演説會といふよりも御とむら

ひといつた方が適當であつた。而て件の老紳士の演説なるものは印刷にして讀んだら善いのかも知れないが、演説としては慘澹たるものであつた。ものの三、四十分も経たないうちに會場は寢入つて了ひ、開ゆるものとは出て行く聴衆の足音と、次第に多くなる會場の欠伸ばかりであつた。好奇心からか、或は又命ぜられて聴きに來たのか、私の前に三人の勞働者が腰をかけて居た。三人は時々目で話をして居たが、我慢が出来なくなつたと見え、臂でつき合をしたかと思ふと、靜かに起つて出て往つた。出て行つたが故意に邪魔をしようといふ風は少しも目につかなかつた。又、そんな必要もなかつた。やがて演説も終り頃になると、辯士の聲はなさないやうにかすれて來た。演説が終ると座長は起つてY教授の只今の御演説は極めて結構な演説であつて、皆様も定めし御満足であつたらうと思ふ。それ故に此の上立會演説などを開いて、折角の氣分を損ふやうなことはし度くない。それよりも皆さんの起立を願つて萬歳を三唱し、ドイツユランドの國歌でも合唱し度いと思ひますと云つて聴衆を起立させた。

聴衆は聲を合せて歌つた。併しそれは他愛のないものであつた。假りに他愛のないものでないにしたところが、既成政黨がこんな歌を心から歌つたところでそれが何になるか。

演説會が散會となると、或る者はビーヤホールに駆けつけ、或る者はカフェーへ飛込み、他の者は街を歩いて行つた。

彼等は何等の感銘をも受けなかつたものの如く、會場を素通りしたと同じことであつた。ドイツ國權黨の演説會がこんな見戯に類するやうなもので善いのかと言ひたくなる。

既成政黨の演説會はいつも無事平穩で政府でも欣んで居た。穩かな會だからである。これがさうでなくて、興奮した聴衆が會がはねて外へ出ると、ビーヤホールやカフェーなどへ飛込まずに、直ちに四列縱隊を作つて街頭を行進し、示威運動にでも出るやうなことがあれば、第一に警官が困るであらうし、内務大臣だつて知らぬ顔をして居るわけにも行かぬ。元氣なナチスの集會は厄介だが、既成政黨の演説會は骨が折れなくて善い。

二、労働者の妨害

ナチスの演説會に至りては決して穩かなものでなかつた。會場は黨員よりも反對の妨害者が多く、二つの異つたイデオロギイが激しく闘はされ散會の時が近づくと、靜かに國歌を合唱して終になるといふやうなことなく、聴衆は興奮して火の玉のやうになつて居る。

ナチスの演説會では始めから會場の取締に力を入れた。抑も我がナチスの演説なるものは既成政黨の演説のやうに生溫いものでなく、内容も調子も反對黨を刺戟し激發せずには措かないものであつた。反對黨の者が多數入り込んで居る會場で彼等を怒らせるやうなことを言ふのだから、騒ぐのは當

然であつて、手向ひせず居たらこちらがどんな目にあつたか判らない。ナチスの演説會と言へばマルキシスト労働者は群をなして來た。押し寄せて來た。そのなかには社民黨の主立つた奴が混つて居て煽動をやるのだ。労働者の面上は來るときから殺氣立つて居た。今夜こそはナチスの息の根をとめようと言ふのだ。

マルキシストの労働者としては腹の立つ理由が少からずあつた。

ナチスは赤い立札を用ゐた。之れが先づ労働者が怒つて押し寄せて來た一つの原因である。赤はボルシェヴィキ獨占の色である。それ故に他の方面でも我等が立札に赤を用ゐたのを見ると少からず驚いた。ドイツ國權黨は我等をマルキシズムの別派であると言ひ出した。さうでない顔をして居るがナチスは畢竟マルキシストだ。さうでなくともソシアリストだと言つて指彈した。彼等には今でもマルキシズムとソシアリズムとの區別が解らないのだ。既成政黨の演説會では聴衆に呼び掛ける時には紳士並に淑女と言ふ。然るに我等の演説會では同胞の男女といふ言葉で呼びかけ、黨員同志の間では仲間と呼んだ。こんなことも我等を赤と間違はせた一つの理由となつたのだ。

笑止千萬な事だ。それ故に既成政黨から何と云はれようと我等は頓着しなかつた。

ナチスの立札に赤色を用ゐたのは出鱈目でなくて深い謀があつたのだ。我等が左翼の獨占である赤色を用ゐれば労働者は必ず怒るに相違なく、怒つたら妨害に來るに相違ない。我等としては妨害であ

らうと何であらうと、労働者が演説會へやつて来てさへ呉れば、演説を聞かせる機會が出来るのだ。
ナチスが赤い立札を立てたのは、左派の労働者をあひき寄せる手段であつた。

此の時に當り左派幹部のナチスに對する態度はしどろもどろであつた。始めは黨員がナチスの演説會に行くことを禁じたものである。而して労働者も大體その禁令に服して居た。

ところがその禁令もいつか緩んで、労働者の中一人行き二人行き、ナチスの演説會に行くものが次第に多くなつて、それに共鳴する者が出て来るに及び、マルキシストの幹部は漸く不安を感じ、今度はテロを以てナチスを一舉に片付けようとするやうになつた。

彼等はナチスを以て復讐運動を目的とするものとなし、我等を呼んで反動派となし労働者に向つてナチスを叩潰せと命じた。彼等はナチスの演説會があつたら、大勢で出掛けて、ナチスの者にプロレタリアの拳骨を喰はせてやれと言つた。マルキシストの方針がかういふ風に變つて來ると、今まで來なかつた労働者が俄かに多く來ることになり、ナチスの演説會と云へば開會時間の三、四十分前から會場がマルキシストの労働者で一ぱいになるやうになつた。こんな労働者に詰めかけられて居る會場は火藥の樽を會場の真ん中に入れて置くと同じであつた。今にも爆發しさうなんだが、それが幸に爆發しなかつたんだから可笑しい。彼等は來る時は敵であるが歸る時は既に味方になつて居た。味方にならざるまでも考へるやうになつて居た。マルキジズムにも疑を抱くやうになつて居た。私が三時間

も演壇に立つて喋つて居るうちに、敵も味方も一團となつて熱狂するのであつた。かうなると會場に居るマルキシストの煽動者がいくら合図をしても、聴衆は起らない。かくてナチスをテロで叩き潰さうと云ふ左派幹部の計劃も駄目になつた。

労働者を成るべく多くナチスの演説會へ行かせるといふ方針には、左党内でも始めから異論があつた。それ等の者はナチスの演説會へ労働者をやるのは危険だと言つて反對したのだ。そこでテロ戦術が黨員の軟化で甘く行かないことがわかると今度は又方針が變り、一部の反對説に立ち戻り、マルキシストの労働者はナチスの演説會へ行つてはならぬことになつた。

かくてそれから暫らくは労働者も來なくなつたが、やがてもとの通りにマルキシスト労働者でナチスの演説會へ來る者が又々多くなつた。左黨の内では再び強硬説が起つた。もう一度大舉して出かけて行きナチスの演説會を滅茶々々にした方が善いといふのである。ところがそれもうまく行かない。二度、三度乃至七、八度同じことをやつて見てもミイラ取りがミイラになつて、ナチスをやつつけに行く労働者が、向ふへ行くとナチスになつて了つて、行く時は邪魔しに行つたものが、歸る時にはナチスになつて居たりする。さうなると又逆戻りでナチスの演説へ行くなといふことになり、幹部の態度は猫の目のやうに變つて定見がなかつた。

三、新聞の攻撃

ナチスの演説會に對する左翼幹部の態度がしどろもどろであつた如く、新聞でも方針が常に動搖した。赤の新聞は始めは我等の演説會について何にも書かなかつた。彼等は默殺主義をとつたのだ。併しそれでも押し通せずナチスの勢力が次第に強くなつて來ると、今度は連日にナチス攻撃の記事を掲げることになつた。彼等はいかなる日でもナチスのわる口を書かぬ日がなくなつた。然りながら世の中は不思議なもので、新聞が盛んにわるく書き立てると反つて好奇心を刺戟し、今まで無關心で居た者までナチスに注意するやうになつた。彼等思へらく、マルキシストの新聞のいふ程ナチスがつまらぬものなら、問題にしないのが善い。つまらぬと言ひながら問題にして居るところを見ると、どこかに痛いところがあるに相違ない。そんなことを言つて一部の者は新聞がわるく言へば言ふ程、ナチスに興味を持つて來た。かくて左翼の新聞も亦默殺主義でも駄目だし、又さんぶ中傷でもナチス黨の擴大を阻止することが出来なかつた。

四、警察を頼まず

右の如き周囲の情勢に對し私は次のやうに吐を極めて居た。人が罵らうが、笑はうが頓着するに及

ばぬ。泥坊と言はうが、善生といはうが構はぬ。何んでも善い。少しでもナチスの存在が世間の問題にさへなればそれで善いのだ。勞働者だつて今直ぐにナチスにならなくても善い。ナチスとはどんなものかそれを考へてくれるやうになるだけでも善いのだ。ナチスが如何なるものであるか、又その目ざすところの何であるかはそのうちジューの新聞にだつていふ程書かねばならぬ時が來よう。

マルキシストはかくて屢々我等の演説會を妨害に來たけれども、一度も直接行動に出て亂暴を働いたことはなかつた。それには前に言つたやうな原因もあるが、亂暴を働かせる氣持でやつて來た主謀者が對手の手強いを見て、尻込をなし部下だけを中へ入れて己は外で形勢を觀望するといふやうなことをした爲でもある。ナチスの演説會が亂暴を免がれた一つの原因はこんなところにもあるのだが、マルキシスト幹部などは卑怯極まる者だ。

加之ナチス側には、マルキシストの消息は手にとるやうに聞えて來た。仲間の者をスパイに入れて置いたからでもあるが、左派の奴等は御喋りが多くて、聞きもしないのに向ふからいろ／＼のことを喋るからである。ドイツ人は一體お喋りで困る。牝鶏は卵を産む前に一と騒ぎやつて鳴き立てるが、ドイツ人も何か企てがあると物にならぬ前から騒ぎ立てる癖がある。そんなことで赤の方でナチスの演説會を襲撃するやうなことがあると、實行されぬうちすぐこちらへ洩れて來るから我が方では直ちに對應の準備が出來、やつて來る頃にはあべこべに鼻をあかしてやつたことも屢々であつた。

演説會場の治安をナチスの仲間同志で維持することになったのも丁度此の頃である。無論警察へ頼めば善いのだが、警察へ頼んで警官が来ることになる、面倒がつて少しでも會場が物騒になりかけると、直ちに閉會させるからである。それでは演説會を開いたとて役に立たぬ。

警察には又怪しからぬ慣習があつた。例へばマルキシストが脅かし半分に、今度ナチスの演説會を叩き潰すんだといふやうなことを言つて廻ると、警察は叩き潰しに行くマルキシストを檢束せず、まだ演説會を開きもしないナチスを呼び出し演説會を開くなどといふのだ。亂暴な話だが彼等は反つてそれを得意にした。

然りながらこんなことをすればいつもならず者が得をして、大人しい者が泣きね入りといふことになる。警官は治安維持の名の下にならずもの肩を持ち、ならずものを怒らせるのは怒らせるものがわるいといふのだ。とんだ理窟もあつたものだ。

ナチスが其の某の處で演説會を開き、労働者がそれを妨害する計劃があるといふ噂を聞き込むと警察は物騒な労働者を檢束せず、いつも、きまつて我等のところへ演説會を開いてはならぬといふ通牒を寄越したものだ。治安第一で事勿れ主義の警察ではそれも止むを得ないのであらうが、馬鹿々々しいことだ。

併しそれだけでない。我等が警察の力を借らない理由がもう一つある。凡そ警官に保護されてやつ

と開いて居るやうな演説會は始めから弱くて力がない。抑も大衆を動かすには、氣力が第一である。警官の力にたよつて氣焰を擧げて居るやうな演説會に、大衆を興奮させる氣力のないことは言ふまでもない。

女の心を掴むものは卑怯な男でなくて強い男だ。國民大衆の心を得んとする政黨は強い政黨でなければならぬ。政黨が警官の保護を求めるやうでは始めから國民から馬鹿にされるし、警察に保護されるやうな政黨は、大衆から厭な目でみられることも考へねばならぬ。

以上數々の理由があつて、ナチスの演説會ではどんな物騒なことがあつても、警官に保護は斷じて求めず、會場整理は仲間の者が之に當り、マルキシストがテロでやつてくれればこちらもテロで應酬することに方針をさめた。

五、警備團の編成

會場の治安維持に就て我等は次の二項目を採用した。

一、聴衆の心理を洞察して會場をリードすること

二、會場の治安維持の爲め警備團を組織すること

かくてナチスの演説會があれば黨員が會場を支配して他のものにグウの音も出さなくなつた。演

五〇
説の妨害をする奴があれば、飛んで行つて直ぐにつまみ出したものだ。ナチスは對手の多少を問はなかつた。對手が四、五百人居て味方が十二三人に過ぎないときでも勇敢にブツカツて行つた。ミュンヘン以外のところでは我々の十五、六人に對し敵は五百、六百、多いときは七、八百人も詰めかけて居た。そんな時でも妨害する奴があれば飛んで行つて外へ引きず出した。終にはマルキシストの方でも生命知らずのナチスの態度に恐れをなして、手出しをしなくなつた。

小は大に及ばず、寡は衆に敵しないから、こんな場合闘へば多いものが勝ち十四、五人ばかりのナチスは畢竟打ちのめされるに極まつて居るのだが、敵は以前にも二三倍の多勢で反つてやつつけられた恐ろしい経験もあつて、向ふから取り組んで来る勇氣をなくして居つたのだ。

一方我等は既成政黨の演説とマルキシストの演説とを雙方研究し、得るところが少くなかつた。

マルキシストの演説會では會場の取締りがうまく届いて居て、既成政黨員などに妨害させるやうなことは斷じてなかつた。加之その頃の演説會と云へば殆んど赤の占有物でもあるかの如く考へられ、既成政黨などで演説會を開くとプロレタリアに挑戦するものだと言つて百方妨害したものである。殊に演説會でも赤の頭領を攻撃するやうなものであると壓迫が一通りでなく、赤の新聞は筆を揃へてプロレタリアを挑發するやうな演説會を開かせる法があるものかと言つて、當局に肉迫し要求を貫徹する迄、筆を納めなかつたものだ。警察の役人が之れ亦馬鹿者ばかりで赤の新聞から脅かされると直

ちに降参して、赤の言ふがまゝになつて了ふ。警察で背かないと、新聞はいつまでも攻撃を續け、會場を襲撃してプロレタリアの太い拳で有産階級の奴等の頭を張り飛ばせなどといふやうなことを書き立てて労働者を煽動するのであつた。

既成政黨の演説會のみぢめなことは知らぬものがない。既成政黨の演説會では、やる者の苦勞が一通りでない。開くと決めて置いても左派の脅迫があると、用意した會でもやめにした。又開會時間を午後八時とさめて置いても、定刻に開いたことは殆んどなく、大抵九時頃になつた。左派の妨害が恐くて容易に開けられないのだ。それでも漸く會を開くと、司會者は演壇に上り、「今晚は反對派の人も澤山見えて居るが、極めて結構なことで、私始め一同甚だ喜んで居ります。意見の異なるものは離れてにらみ合つて居るより、寄り合つて話をしてみた方が互の心も解り、意志の疎通も出来るといふものである。私どもは決してこちらの考を皆さんに強制しようと思ふ心持はない。人の心の異なるは尙その面の如しとやらで、誰にでもこちらと同じ考を持つてといふのは第一無理である。それ故に私は皆さんにこちらの考になりなさいといはない。その代りに諸君の方でも妨害せずに私達のいふことを終迄聴いて頂きたい。それに今夜の辯士の演説は長くないのですから、どうか騒がずに最後までやらせるやうにしてもらひ度いものです。抑も演説會場で國民が敵味方になつて争ふのはドイツの内輪割れをさらけ出すやうなもので、外國に對しても醜態です云々」司會者はこんなことを言つて先づ哀

訴嘆願するのである。

然りながら左派の者はこんな挨拶に耳を傾けよう筈がない。司會者が降りて代つて辯士が壇に立つと八方から彌次がとび、辯士は一言二と言いやべつたばかりでもう立往生だ。見て居られない程氣の毒な状態だ。それでも無事に降壇の出来るのは善い方で、中にはマルキシストから引きずり下されたりする者さへある。

マルキシストはこんな風に右翼政黨の演説會を荒らして居たのだから、ナチスの演説會に來ても始めは横柄に構へ、中には大きな聲を擧げて今日こそやつつけてやらうぜなどと肩を聳かしてくるものもあつたが、そんなのは直ぐ會場の前で追拂つた。

マルキシストは先づこんなことで度膽を抜かれるが、會場に這入つて見るとナチスの司會者が之れ亦既成政黨の司會者のやうに弱くはない。彼は聴衆に向つて「靜かに聽いて下さい」などと弱いことを言はない。又演説會は互に意見を交換する爲めだなどとも言はない。會場はナチスの演説をやる場所であり、司會者は會場の主人公である。心得違ふ者があつて演説の邪魔をすれば容赦なくつまみ出すまでのことだといふ態度である。討論も時間があれば、やつても善いが、無ければやらぬ。やるもやらぬもこちらの都合次第で、聴衆の指圖は受けぬ。之れが我黨の司會者の態度なんだ。

かくて辯士はさつさと壇に上り演説を始める。かうなるとマルキシストは様子が違ふので益々もち

もぢするばかりだ。

既成政黨の演説會では黨の長老に當る者が會場の整理に任じたものである。若い者だと言ふことを聞かないが、年寄だと普通のものなら年寄の顔を立てて靜かになるからといふのだが、それは昔のこととで今時のマルキシストの若者は年寄だとして尊敬するやうなことがないばかりか、却て馬鹿にして平氣だ。ナチスでは會場整理の爲めに特に警備團を作つた。大抵は若い元氣者で一部は私と共に嘗て隊に居たことのある所謂兵隊上りであつた。又一部は新入の若い黨員であつた。目にて目をつぐなひ、齒にて齒を償ふ。テロはテロで對手になるの他はない。

之が私の警備團を作つた一つの理由である。世のなかには弱い者が敗けて強い者が勝を占める。怯懦では何事も出来ぬ。之が私が警備團を作り腕で行かうとした第二の理由である。ナチスの理想は高遠である。之を護る爲めには自らの血を流すことを避けてはならぬ。之が警備團を作り身を以て黨を守らせようとした第三の理由である。私は彼等にこんなことを言つて勵ました。無理が通れば理窟が引つ込む。理窟が通らなければ腕で行くの他に途がない。而て守らんとするものは先づ攻めよ。警備團は理窟屋の集りであつてはならぬ。いつも一團となつて敵にぶつかる火の球のやうなものでなければならぬと。

若者はこんな力強い言葉を待ち焦れて居た。彼等は既成政黨の意氣地なさ、不甲斐なさに他黨のこ

とながら愛想をつかして居たのだ。

私はこの有様を見て、今更の如く感じたことがある。それは他でもない、ドイツで赤の革命の成功したのは、ドイツの指導階級に人がなかつた爲に他ならぬといふことだ。ドイツだとて國を守る強い若者は當時と雖も存在した。唯之を率ゐるものがなかつたのだ。私は警備團を頼みて言つた。企ては善くても實現する力の伴はぬものは駄目だ。平和の女神だつて、軍神の側を離れられない。離れると危険だ。平和の事業だつて、之を遂行するには腕力が要ると。私がこんなことを説くと、青年の眼はいつも輝いた。

警備團の若者は演説會を妨害に来る者があると、熊蜂の群のやうになつて襲つて行つた。對手が優勢であらうと、無からうと、そんなことには頓着しなかつた。ナチスは祖國復興の大運動だから、假令その爲めに血を流しても悔なしとしたのだ。

警備團は一九二〇年の夏に至つて形態が整ひ、一九二一年の春には團員を百人宛の組に分ち、それが又集つて別々のグループを組織することになった。

當時私達は、依然ミュンヘンのホーフブローハウスを會場にして居たが、時々ホーフブローハウスよりも、もつと廣い所を選んだこともあつた。一九二〇年から二十一年にかけては、ビュルゲル・ブライハウスやキンドルケラーで大規模な演説會を開いたことが度々あつた。その頃ナチスの演説會

と云へば、開會前にもう満員となり、警官が押しかける群衆を制止するに大苦となる程になつて居た。

六、ハーケンクロイツの問題

警備團の編成に關聯して黨の重要な問題が一つ解決された。ナチスにはそれまで黨の徽章がなかつた。黨旗も無論なかつた。荷も徽章や旗は黨のシンボルである。それが無いとなると、將來になつても都合のわるいことばかりだ。第一ナチスは團結の固いことを外部に表示する必要がある。又マルキシストのインタナショナルに對抗し、一方にナチス運動の精神を表示するものがなければならぬ。徽章や黨旗はその爲めにどうしても必要だ。

政黨の徽章や黨旗のやうなものに民衆が非常な關心を持つものであることは、以前から既に私に氣がついて居た。時は戦後のことだが、ベルリンの宮城前からルストガルテンにかけてマルキシストの素晴らしく大きな示威運動の行はれたことがあつた。その行列が又大したものので、見渡す限り旗の海であつた。旗は悉く赤一色なのだ。腕章は悉く赤一色であり、花輪も亦赤一色であつた。之れに參加せる労働者は無慮十二萬と註せられ、恐ろしい氣勢を以て進んで來ると何人も思はず知らず巻き込まれさうに感じた。私はその時始めて民衆がわけもなく赤になつて行くのを無理はないと思つた。

既成政黨には独自の主張がないから、独自の黨旗なるものもない。彼等は所謂愛國者を以て自ら任じ、舊ドイツの國旗を今でも持ち廻つて居る。舊ドイツの旗が既成政黨に特別の縁故のあるものなら、それでも善い。併し事實はさうでない。

舊ドイツの國旗は有産階級の手で造られたものでなく、軍隊の中から生れたものであるから、黒白紅の旗は舊ドイツの國旗ではあるが、有産階級の黨旗にはなり得ない筈だ。

既成政黨の黨旗として稍意味あるものを求めたら、それはオーストリアのドイツ黨の旗であつた。ドイツ黨は今でも一八四八年革命當時の旗を用ゐて居る。それは黒、紅、黄の三色旗で今では共和國の國旗となつて居る。大したものではないが、それでも有産革命を表現せんとして居るところにいくらかの意義がある。但しこゝで忘れてならぬことはその黒、紅、黄の旗に對しても社會民主黨、キリスト教社會黨及び中央黨は昔はひどく嫌つて居たものだ。彼等が舊ドイツの黒、白、紅の國旗を排斥して居たやうに、嘗ては猛烈にドイツ黨の黒、紅、黄をも排斥して居たものだ。それにも係らず革命政府が今日之を國旗として使ふやうになつたのは、一八四八年の革命運動は、シュールが裏に居て絲を引いた關係があるからだ。

かくて一九二〇年まではマルキシストのそれに對抗すべき意味のある黨旗を持つて居る政黨はドイツには一つもなかつたと云つても善いのだ。何となれば既成政黨は革命後になつても共和國の新國旗

を用ゐることを肯んじなかつたけれども、それは畢竟共和國の國旗を用ゐないといふばかりで、黨の運動を表象すべき黨独自の旗がないのだ。之は彼等に何等の政策も經綸もない證據であつて、既成政黨が漫然として今尚舊ドイツの國旗を掲げて平氣で居る所以も此にある。

舊ドイツは既にマルキシズムの爲めに打倒されたのである。然れば今やマルキシストと新たな闘を開始せんとするに當り、マルキシストに打倒された舊ドイツの國旗をその僭用ゐるのは考へ物だ。舊ドイツの國旗程美しい旗はない。ドイツ人の多くは此の旗の下に花々しい戦を戦つたのだ。懐かしく貴いのは當然であるが、打倒マルキシズム運動の旗としてはふさはしくない。

私自身は舊ドイツの國旗の亡くなつたのは國民にとり悲しむべきことでなく反つてもつけの幸ひであつたと信ずる。共和國ドイツが新國旗の下でやることは我等にとり風馬牛不關焉だ。舊ドイツの國旗は萬世に輝くべき譽の國旗である。その國旗が共和國ドイツに引繼がれて汚されるやうなことがあつてはならぬ。共和國ドイツが舊國旗を廢棄したのは此の上もなき舊國旗の幸運であつた。現在の共和國ドイツは國を賣り國民を賣つたものだ。舊ドイツの名譽ある國旗は共和國の旗にされてはならぬ。

共和國ドイツは共和國ドイツのぼろを下げて居た方が善いのだ。榮ある過去のドイツの國旗が彼等に盗用されてたまらない。既成政黨は今でも黒、白、紅を共和國ドイツの國旗にしようとして居るが共和國ドイツに舊ドイツの國旗を用ゐさせようといふのは善くない。舊ドイツの國旗は舊ドイツの帝國と共に

去つたのだ。

加之舊ドイツの國旗は光榮あるものだが、私には一つの物足らぬ感じがある。それは舊ドイツがマルキシズムの爲にわけもなく潰れて行つたことだ。ナチスはそんな意氣地のない舊ドイツを墓場から呼び起すことでなく、全く形態の異つた新興ドイツを建設せんとするのだ。私が舊ドイツ國旗に執着を持つ必要なしとするのはその爲だ。

ナチスはマルキシズム打倒を目標とするものであるから、ナチスの黨旗も亦その意味を偶したもの
でなければならぬ。

然らばどんな黨旗を作るか。之れが我等の熱心な討議の課題となつた。之に就て各方面から各種の案が提出されたけれども扱てほんたうに適當なものが容易に見つからない。ナチスの黨旗はナチスの運動を表象したものでなければならぬこと勿論である。それと共に他にもいろいろ考へべきことがある。大衆對手の運動に従事する者にとりてはつまらぬことでも些細な點にまで氣を配る必要がある。大衆を引きつけるには黨の徽章や旗の色にも心を用ゐる必要があるのだ。

ナチス黨旗の色を定めるに當つては各方面から各種の提案が出た。或る者は白にしようと言つた。之れには多くの賛成者があつた。一般に右翼諸黨ではインタナショナルの赤に對して何事にも白を用ゐる傾向があつた。既成政黨は舊ドイツの復興を唯一の目的とするものであつて、志が小さい。ナチ

ス黨の内では黨旗を白にしようといふ人々のあるのは、右翼諸黨と歩調を合はせようといふところから來て居るのだが、私は第一右翼諸黨と事を共にするのが厭であつたばかりでなく、白い色には興奮がない。白の色は純潔を生命とする處女會などの運動には適當であらうけれども元氣の善い革命運動色ではない。白の説はこんな理由で否決された。

次は黒色である。黒は現代を表象するところがあるけれども、ナチス運動の意義を表示するものがないのみならず、この色にも同じく人心を鼓舞する力がない。

青白は色としては美しいが、本來聯邦の旗の色である。聯邦分権制度はドイツ人の地方割據主義から産れたものであり、我等のとらざるところであるから、青、白の色も氣が進まない。同様に黒、白も不適當だ。

黒、赤、黄は始めから問題にならず、舊國旗の黒、白、紅は色の調和としては比類のない善いものだが、これ又裏に述べたやうにそのまゝナチスの黨旗にはなり得ない。

然りながら黒、白、紅は舊ドイツの國旗であり色の調和が善いばかりがなく、世界大戰には之を押し立てて戦つた思出もあつて、舊ドイツには不満はあるが私としてはどうかしてその一部を生かして我等の黨旗の中に保存したいものだと思つた。之に就てもいろ／＼案が出た。そのうち最も多數であつたのは舊國旗の中に卍を染め出さうといふのであつた。私はそれに賛成でなかつたが、黨首たる立

場に頼み自分の意氣地を云はず暫く他の人々から案の出るのを待つて居たが、丁度その時タルンベ
ルグの齒科醫であつた人から一つの案が提出された。之れは私の考へて居るものにも近く、悪くはな
かつたが、白地に鬚のある卍を染め出して居るだけはどうしても面白くなかつた。そのうち私は工夫
を凝らして漸く満足の出来る旗を考へ出した。それは赤地の真ん中に白の丸を作り、そこに、黒の卍
を染め出すのである。旗の大きさと白の丸と卍の大きさの釣り合がとれること勿論である。圖案が出
來上つて見ると、之れが一番私の氣に入り畢竟それが今日用ゐるナチスの黨旗となつた。

警備團員の腕章も同じ理由で赤地に白の丸を染出し中に卍を現はしたものに決定された。案が出来
他の黨員の徽章も亦同じく赤地に白の丸を染め出し、中に卍を表はしたものになつた。案が出来
とミュンヘンのかざり屋のフュースといふ男が見本を造つて來てくれ、一同之れに賛成し、黨員は爾
來所定の徽章をつけることになつた。

かくてナチスの黨旗は一九二〇年の夏初めて街頭に掲げられた。黨旗は新進氣鋭の我黨に最も適
しい旗と思はれた。黨が若くて新しさが如く、黨旗も亦若々しくて清新であつた。政黨の旗は多くあ
るがこんな清新なナチスの旗は未だ嘗て人の目眩せざるものであつた。ナチスの黨旗は燃えさかる松
火のやうに光を放つた。此の旗を最初に持つて來てくれたのは一人の婦人黨員で、その婦人は自分で
造つたのだがそれが本部へ持込まれた時は皆小供のやうに欣んだものである。それから二、三ヶ月も

経たないうちにミュンヘンの町だけで六本ばかりの黨旗が出来、警備團はそれをかざして景氣よく活
動した。

かくて出来上つた旗はナチスのシンボルとして最も適當なものであつた。旗は舊ドイツの歴史にも
縁のあるものであり、同時に善くナチス・ドイツの新精神を最も善く表現せるものであつた。即ち我
黨は國民社會主義黨であつて、黨旗の赤は社會主義の色を、白は國民主義を、卍は反ユダヤ主義と共
にアリアン民族の文化的使命を表象して居るのである。

警備團はその後二年を経過するうちに數千人の多きに上り、それと共に團の形も整つて來た。此の
警備團が即ち、今日の突撃隊と云はるゝものとなつたのだ。突撃隊は黨旗の他に別に隊旗を備へるこ
とになり、之れも亦私が工夫して圖案を作り、同じく黨員であるかざり屋のガールがそれに由つて造
り上げてくれた。突撃隊の隊旗は爾來突撃隊の生命となつて居る。

七、クローネ・サーカスの大演説會

話がかはつて一九二〇年に入り、ナチスの演説會は愈々活氣を呈し、一週間に二度演説を開いたこ
とも度々であつた。ナチスの立札の前は人だかりとなり、町で一番大きなところを借りても、會場は
いつも満員の盛況で、マルキシストまで轉向してナチスの闘士になるといふ勢で、今はナチスと云へ

ばミュンヘンの廣い町でも知らぬ者がなく、ナチスの政綱も知らぬものは無くなった。かうなると黨員も日を遂うて急速に増加するばかり、今まで一瞥も與へられなかつた我が黨も一九二〇年の冬から翌年の春へかけて一躍ミュンヘンでは押しも押されぬ有力な政黨の一となつて居た。

當時の政談演説と云へば前にも度々述べた如くマルキシストの集會の他に演説會らしいものは殆んどなかつたものだ。殊に右翼黨員の演説會などは偶々あつても不景氣極まるものであつた。これに反し我が黨の演説會はどこで開いても素破らしいものになつた。ミュンヘンのキンドルケラーと云へば、大きな建物で僅に五千人の聴衆が收容出来る。ナチスの演説會ではそこがいつも満員で聴衆がはみ出しさうになるのであつた。それだから私達もそれに勢を得てミュンヘンの町で大きな會場は一通り借りて見た。唯一つ今迄借りたことのないのはクローネ・サーカスばかりだ。こゝだけは非常に廣い場席だけに、流石の我等も氣がさして申込みなかつたのだ。

一九二一年一月下旬ドイツにとりてまたしても慨はしいことが起つた。まさにバリー協定に依り、ドイツは數百億マルクといふ馬鹿々々しい賠償を支拂ふことになつた。それが愈々ロンドン協定で本極りとなり容赦なく實施されることとなつたのだ。

之より曩き國民主義聯盟といふ右黨各派の大同團結がミュンヘンに出来て居た。ロンドン協定成立するや之に憤慨した該聯盟は政府に對して抗議の大運動を起すことになつた。ところが時は切迫して

居るに係らず、運動の準備が遅々として捗らず、一度定めたら直ぐにやれば善いのに愚圖々々して居て、ほつて置いたらいつやるのかわからぬ程のふしだらであつた。俺にはそれが自烈つ度くて仕やうがなかつた。始めはケーニヒスブラッツでやるやうな話であつたが、赤の連中になぐり込められるといふので、それが惡さにその方は止めになつた。次に場所をフェルドヘルンハレにしようといふことになつたが、之れも取止めになり、散々考へ廻した擧句、漸くのことではキンドルケラーで演説會を開くことになつたが、聯盟の中でも熱の無いものがあつて、會場だけは定つたが開會の日取りがいつまで経つても決らなかつた。

そこで私は一九二一年二月一日の火曜日に堪らなくなつて聯盟の本部へねぢ込んで行つた。すると先方では水曜日にするといふから不承々々歸つて來ると何のことはないその日も駄目なんだ。再び出かけて行つて一體演説會を開くのかどうかと言つて手詰の談判に及ぶと今度は同じ水曜日も來週の水曜日だといふのだ。手頼りないことおびたらしい。流石の俺も我慢が出来なくなつた。かうなれば引込んで居られない。私は一か八かだと肚をきめて、他の政黨に關係なくナチスだけでやつてのけることに決め、タイプライターで十分間にビラをたゝかせ、同時に翌日會場を借りるやう、クローネ・サーカスに掛合つて話をつけさせた。

今から考へれば何でもないが、當時は之が向ふ見ずの大冒險であつた。ナルクス・クローネと云へ

ばミュンヘン第一の廣い席場であるから、演説會を開くと決めても蓋を開けてみて果して一ぱいになるかどうか疑はしいばかりでなく、赤のなぐり込みを受ける危険が少からずあつたのだ。

當時既に人数は多くなつたと云つても警備隊はまだ手薄であつたから、會場が廣いと勢ひ手が廻りかねる。會場になぐり込みのあつた際どうして善いか俺にも見當がつかない。又演説をやるにしても普通のところよりも廣いナルクス・クローネの方では骨が折れさうにも思はれた。ところが不思議なもので案ずるより進むがやういと云ふか聞いて見るとあべこべで私の懸念は總て杞憂で、狭いところより廣いところが警備隊にとりても演説者にとりても反つて便宜なことが判つた。

それにしても愈々開會となるまでは心配でたまらなかつた。若しもここで失敗したら、ナチスにとりて取り返しのつかぬ打撃になるのだ。第一それを覺悟しなければならぬ。會場の取締りがつかなく一度でもこゝでやられて閉口たれるやうなことがあれば、赤は固に乘つて俺達の會だと云へばそれから後もなぐり込みを續けるに相違ない。さうなれば奈何に元氣なナチスでも度々やられてはあじ氣がついて自然演説會を好まなくなる虞がある。ところで一度ぢけがついたら、もとの元氣は二度と出て來るものでない。私はそれを最も心配した。

其の日はどうやらピラは打つて了つたが、それを配るのにもう時間がない。之も出來るだけ早く配らねばならぬ。その上その日は折悪しく朝から雨降りであつた。ナチスの會と云へば、どんな劍劇が

六四

始まるかわからぬ物騒な會である。雨や雪を犯してそんなところへ足を踏み入れるよりうちに居て居た方が無事だ。太抵のものならそんなことを考へて出て來ないかも知れない。會場ががら空きだつたらどうしよう。私はそんなことも心配した。果して聴衆が來るか、どうか。當日になつても心配は募るばかりであつた。若し不首尾なことになると、大きな口を利用して來た聯盟の奴等に對しても顔向けがならないのだ。そこで復びその日も急いでピラの文句を黨員に口授し、直ぐに刷らせて午後から一般に配布させた。ピラは無論市民の來聴を勧誘したものである。

準備が出來ると俺は二臺のトラックを備ひ、車體を赤い布で包み、車の上にはナチスの旗を數本たて、一臺に十五六人から二十人の黨員をのせ、街上を乗り廻はし、車上からピラをまかせた。つまり之は晩に開かれる演説會の案内でもあれば、プロパガンダでもあるのだ。ミュンヘンの町ではこれまでトラックに旗などを立てて、ピラをまいたりしたものはマルキシスト以外にはなかつた。それ故にボデを赤で包みハーケンクロイツの旗をなびかせたナチスのトラックが勢善く町を奔ると、それにぶつかつたインテリは自失したやうな形で口をあいて見まもるばかりであつたが、都心を離れたところへ來ると勞働者は恐ろしい顔をして拳固を振り上げ、トラックにつかみかゝるやうな風をした。彼等から云へばナチスの示威運動はプロレタリアへの新たな挑戦としか思へなかつたのだ。それも穴がち無理ではない。トラックで乗り廻したり、大きな會場で公然大衆的の演説會を開いたりすることはそ

六五

れまでマルキシストにのみ事許されて、他の者にはやつてはならぬものとされて居たからだ。

その晩は愈々七時になつても会場はまだ淋しかった。俺は十分間に一度宛電話で会場の模様を問い合わせたが、内心頗る不安なのだ。と云ふのは他の会場では七時と云へばもう一ぱいになつてゐる時なんだから、不安にならずには居られないでないか。ところで考へて見ればそれは俺の間違であつた。俺はチルクス・クローネの場席の広いことを勘定に入れて居なかつたのだ。ホーフブローハウスあたりでは、千人も聴衆が入ればもう一ぱいだ、チルクス・クローネのやうな、廣い小屋では千人くらの人間が入つても、どこへ入つたかわからないのだ。果せるかなそれから十五分も経つともう会場の三分の二は埋まり、尙外には傍聴人が切符賣場に詰めかけて居るといふ威勢の善い電話があつた。俺はそれを聞いていそ／＼と本部を飛び出した。

会場へ着いたのは八時を二分過ぎて居たが外にはまだ群衆がうよ／＼して居た。多くの者は好奇心からであらうが、中には外で合図を待つて居る赤の連中も少からず居つた。

一年前にホーフブローハウスで始めての大演説會を開いた時は聴衆の多いのに有頂天になつたものだ。此の夜チルクス・クローネの会場へ入つた俺はその時にもまして大きな欣びを感じた。人の波をかきわけて中央高くしつらへられた演壇のところへ行くと、これはこれ程までに聴衆が詰めかけて居らうとは思はなかつた。廣い場内には數千人の傍聴人がすし詰めとなり馬の驅ける路筋まで人で一ぱいな

のだ。それまでに賣り切つた入場券が五千六百枚であつたから、それに無料入場の失業者や貧乏學生や警備團の者をも合せて勘定すると、當夜の入場者は無慮六千五百人を突破した。

演題は希望か没落かといふのであつた。電話で聞いてもこゝへ来るまで尙ほ一抹の不安をもつて居た俺も、今面のあたり会場の景氣を見ては欣のこみ上げて来るのを禁じ得なかつた。こんなにも多くの聴衆がナチスの演説を聴きに來てくれたのだ、ドイツもまだ捨てたものでないと俺は思つた。希望は遠くに求むるまでもなく既に俺の前にころがつて居る。

俺は演説を始めた。時間は前後約二時間半ばかりであつたが、始めてから三十分も経たないうちに之れなら占めたものだと思つた。俺と聴衆との氣分がしつくりと合つて來たのだ。やがて一時間も経つと、破れるやうな喝采が起つて演説が出來なくなり、二時間後には會場水を打つたやうに俺の演説に聞き入つた。俺も何とも言はれぬ嚴肅な氣持になつた。その後もこの会場では屢々そんなことがあつたが、恐らくは當夜の聴衆も覺えて居ることと思ふ。廣い会場は静まり返つて聞ゆるものとは聴衆のかすけき引く息吐く息の音ばかりであつた。やがて演説が終ると、熱狂した聴衆は總立ちになつてドイツランドの國歌を歌ひ出した。

閉會となると聴衆は雪崩をうつて中央の入口から出て行つた。聴衆が全部出て行くまでには二十分間もかゝつたらうと思ふ。壇上からその光景を眺めて俺は場内に一人の聴衆者も居なくなるのを見届

けてサーカスを出て家に歸つた。その時のうれしさは今思ひ出しても血の躍るを覚える。

ドイツの新聞は今迄ナチスの演説會と云へば問題にシなかつたものだ。ところがチルクス・クロネの當夜の演説會は書くまいとしても書かずに居られなかつたと思えて、翌日はどれもこれも當夜の記事を掲げた。之れだけでも當夜の盛況が察知し得られるであらう。唯だ不甲斐なくけちなのは右系新聞の態度で、寫真までのせ記事も書いたがどの主催とも云はず、國民主義演説會であつたといふだけでナチスのことは一行も書かなかつた。

チルクス・クロネの大演説會を峠としてナチスは今迄のみすぼらしいデモ政黨から、一躍、押しも押されぬ大政黨となつた。知る者も知らぬ者も今では何人もナチスを無視することが出来なくなつた。チルクス・クロネの演説會は此の如き成功を収めたのだ。それでも反對派では未だ目が醒めず、チルクス・クロネの盛況はまぐれ當りに過ぎないと言つて吹聴した。そんな奴等の口を塞ぐ爲めに、俺は立て続けに次の週も又同じところで演説會を開いた。ところが廣い場内は同じく聴衆が一ぱいであつた。次の週も又同じところで同じ演説會を開いた。之で前後三回チルクス・クロネはその度毎に満員の盛況で下から上まで會場は人で身動きがならぬ程であつた。

一九二一年は之を手始めとして俺達は益々演説會に力を注ぎ、一週一回では物足りないとなつて毎週二回宛開き夏から秋にかけては一週間に三回宛開いたことも度々であつた。會場は無論チルクス・

クロネで、チルクス・クロネもナチスの會と云へばいつでも満員札止めになつた。

八、労働者のなぐりこみ

ナチスの演説會が活況を續けるにつれて、マルキシストが不安を感じ出したのは無理もないことだ。これまで手を換へ品を換へて、どうにかしてナチスに演説會をやらせまいとした居たマルキシストはどうしてもいかぬと見るや、今度は愈々眞剣のテロで二度と俺達に演説會の出来ぬやうにしうといふので効かにその準備をなした。

當時ミュンヘンでエルハルト・アウエルなる社民黨の一代議士が兇漢に狙撃されたといふ奇怪なる事件があつた。アウエルは社會民主黨でも首領株であつて、社民黨側では兇漢に狙撃されて負傷したと言ひ觸らしたけれども、能く聞いて見ると暴漢があつて襲つたけれども、アウエルは「剛氣な男」で襲はれたが敗けて居らず、反對に對手をしたゝかな目に遭はせたので、數名の兇漢は警官の来る前にどこかへ逃げ去つて、今にその犯人がわからぬといふのである。奇々怪々な話だが社民黨の新聞はそれを種にその犯人が恰かもナチス黨員であつたかの如く毎日書き立て、ナチスは危険だから大さくならない中に叩き潰すべきだと云つて民衆を煽動した。

恰かもその時ナチスはホーフブローハウスで演説會を開くことになり、俺も演説をやることに決め

て居た。社民黨の新聞にナチス攻撃の記事の出たのは丁度演説會の開かれる。四、五日前のことで、社民黨は民衆を煽動して置いて、演説會の當日會場に亂入してナチスを一舉に叩き潰させようといふ魂膽であつたのだ。

それは一九二一年十一月四日の夜であつた。六時から七時の間であつたと思ふ。マルキシストはナチスの演説會になぐり込みをやる爲、あちらこちらの工場から黨員である職工の驅り出しをやつて居るとの報告だ。

此の報告がもつと早く手に入つたら善かつたのだが、丁度その日は俺達がシテルンエツカガツセの舊事務所から新事務所へ引越したばかりなので、新事務所と言つてもまだ誰も居ないし、外した電話がそのまゝになつて居て、新事務所へ切り換へてなかつた爲、幾度も外から仲間のものが電話をかけようまく通じなかつたのだ。

そんなことでマルキシスト撲り込みの報道を手にしたのは遅くなつてからのことであつたから、こちらでは對抗の準備をする時間がなく演説會場も警備隊も自然手薄にならざるを得なかつた。會場に来て居た警備隊は百人組と言つても名ばかりで人数は四十六人ばかりであつた。當時は警備隊も出来たばかりで、相互の連絡も十分とれてゐなかつたから、素破と云つても一時間のうちに加勢の團體をつれてくるといふやうなことも、事實出来なかつたし、その上その頃はナチスの演説會を開くと云ふ

と、いつでもなぐり込みの噂が傳はつて來るので、これまでとても、幾度そんな噂があつたか知れぬが、いつも噂ばかりのことが度々あつたので、半分高を括つた心持もあつて會場の警備はそのまゝにして置いたのだ。

マルキシストのなぐり込みが實際に行はれるものと知つたら、こちらでも萬端の準備をする筈であつたが、そんなことで赤のなぐり込みは俺達の方で存外氣にとめて居なかつた。

他方ホーフブローハウスはなぐり込みには都合の良いところであつた。これも亦俺達に氣をゆるませた一つの原因であつた。なぐり込みは狭いところより廣いところが便利だ。それ故にマルキシストが俺達の會に撲り込みをやるなら、ホーフブローハウスの狭いところより、チルクス・クローネの廣い場所を選ぶに相違ない。廣いところではへ行らないところを見ると、狭いところではやることはない。そんなことも考へて半ば自ら慰めて居たのだが、此の考方は當夜の騒ぎに依つて必ずしもさうでないことが判り、大に學問をした。突撃隊はその後隊の組織や、戦法にいろいろ工夫を加へられたが、そのなかには當夜の経験に基づくものが少からずあるのだ。

授て俺が會場へ着いたのは七時十五分過ぎであつた。見渡しただけで會場には不穩の空氣が漂つて居た。マルキシストがなぐり込みの考へで押し寄せて來て居ることはそれだけでも明かであつた。場内は人で二ばい。外では警官が群衆を制止して居る。マルキシストは逸早く入場したものと見えて、

七二
席に坐つて居るものは殆んどマルキシストの黨員ばかりで、ナチスのものは外に居ても這入れない有様であつた。ナチスの警備隊は會場の控室に待つて居た。俺はその室の扉を閉めさせ、四十五人が六人も居たかと思はれる隊員を身のまわりに集めて次のやうな訓示を與へた。曰く、今日こそ汝達は死を賭してナチスに忠誠を盡すべき日だ。俺達は屍となつて運び出されるまでは、何人もこの會場を一步も去つてはならぬ。俺も斷じて去らぬから、汝達も俺を捨て去つてはならぬ。若しも卑怯な振舞をする者があつたら、他人の手を借るまでもない、俺自らが己の手でそやつ腕章をもぎとり、徽章をはぎとるからさう思へ。それから更に語を次いで云つた。少しでも奴等が騒いで仕事を始めさうな氣配が見えたら、躊躇せず直ちにとんで行つてやつつけて終へ、愚圖々々して居てはならぬ。攻撃は最善の防禦だ、それを忘れてはならぬと。

團員はハイルを三唱した。その聲はいつものそれより荒くてかすれて居た。

斯くの如く誠めてから俺は控室を出て壇上に立ち、己れの黒い眼で場内をもう一度見廻した。マルキシストは穴のあくほど俺を見た。或者は憎らしさうに睨みつけて居り、更に或者はさげすみの色を顔に浮べて叱つ叱つと彌次をとばした。『今日こそやつつけるぞ!』どてつばらを要心しろ!』舌の根をとめてやるぞ!』等々、多勢を頼んだ敵は千萬の罵聲を俺一人に浴せるのであつた。

それでもどうかから俺は演説を始めた。ホーフブローハウスで演説をやる時きまつて俺は會場の

横側に立ち、ビール臺を演壇にすることにしていた。それが一番勝手が善いのだ。當夜も亦俺はいつもと同じやうにその場所に立つた。

俺のすぐ前の左手に控えて居るのは赤のてあひばかりであつた。何れも腕つ節の強い壯者ばかりで大部分はマフアイ工場とイザリヤ工場の職工であつた。演壇の下まで詰めかけて、連りにビールをとり寄せては、飲みほした空らのジョッキをひそかに臺の下に忍ばせるのである。物騒千萬な話だ。これで今夜の演説會が無事にすんだらそれこそ奇蹟だ。俺は心のうちでさう思つた。

かくて凡そ一時間半も喋つたかと思ふと、場内はいつか俺の演説につり込まれて來てゐたやうになつて出で行つたかと思ふと間もなく歸つて席についたり、暫らくもぢつとして居らぬ者もあつた。神經質のやうになつて職工に何やらさうやいて居るものも出て來た。場内は再び殺氣立つて來た。

勞働者は思ひ出したやうに再び盛んな彌次をとばし始めた。此の時止せば善かつたんだが、俺がその彌次をとりあげて應酬して居るうちに、ちよつと口がすべて自分で少し餘計なことを言つたと氣のついた時は、もう遅かつた。

二、三の怒聲罵聲があちこちに聞えたかと思ふと、一人の壯漢が突如として椅子の上に起ち上り、『自由! フライ・ハイト!』と怒鳴つた。之を合圖に勞働者は一齊に蜂の巣をつついたやうにあばれ出し

たのだ。

場内は見るとちに修羅の巷と化した。吠える、叫ぶ、つかみ合ふ。頭の上では手榴弾のやうに、ジョッキビンが無数にとぶ。ジョッキビンの壊れる音、椅子の足の折れる音、労働者の罵聲が雑音となつて、会場は天地もひっくり返るやうな活劇の舞臺となつた。

演壇に起つた儘動かずに此の光景を眺めて居た俺は、今更に黨員の健氣な働き振りを見て感激せざるを得なかつた。

これが既成政黨の集會であつたら、どうであらう。さだめし惨めなことになつて居たであらう。ところがナチスは決して摸られて引込んで居ない。

労働者の亂暴が始まると、我が警備團は一刻も躊躇することなく、真しぐらに聴衆の中へ突進して行つた。八人乃至十人宛一とかたまりとなり、狼の如く敵に襲ひかゝつた。敵は之に氣を吞まれて崩れかけたが、それにしても五分と経たないうちに、味方は一人として血だらけになつて居ないものはなかつた。味方の働きは目醒しいものであつた。黨員のマウリツエや、俺の今の秘書であるヘスなどはこの時の殊勲者なんだ。團員は己の痛手にも屈せず腰の立つ限り、例れては起き上り、齒を喰ひしはつてぶつかつて往つた。組討は二十分も續いた。敵は七、八百人も居たらうと思ふのに、僅か五十人にも足らぬ警備團と太刀打が出来ず、大部分は逸早く場外へ逃げ出し、左側の奥まつたところに陣

七四

取つて居た者だけが、踏みとまつて必死の抵抗を續けた。丁度その時だ。會場の入口から俺の立つて居る演壇へ二發のピストルがとんで來た。一發は恐ろしい音を立て、炸裂したが、そんなことに驚くやうでは仕方がない。戦場を往來した者には弾丸は慣れつこだ。俺はピストルの音を聞いて反つて胸がせい／＼した。

弾丸をうつたのは誰だか知らなかつたが、ピストルの音がしてから團員も勇氣百倍した。頑強に抵抗して居た一團の者も、やがて撃退されて一人の敵も場内に居られなくなつた。

當夜の活劇は始めから終り迄約二十五分間も續き、場内は爆弾でも落ちたやうに壊れたものが飛び散り、足も踏み入れられぬことになつた。俺達は傷ついた味方の者にほうたいを施し、一部のものは車でなければ動かせぬ程ヒドク傷いて居たけれども、兎に角俺達は之れで亂暴者を外へ追ひ出し、会場内を完全に支配することが出来た。騒ぎが治まると司會者席に居たヘルマン・エッセルは起つて嚴かに『これから演說會を續行します』と会場に宣し、俺も復び口を開いた。

やがて會が終つて歸途につかうとして居るときであつた。一人の警官が興奮しきつて駆け込んで來たかと思ふと、會場の入口から『演說會は解散だ』と怒鳴つた。會はもうすんで居るのだ。来るのなら、もつと早く來た方が善い。御苦勞様と云つてやりたくなつた。

此の夜俺達はいろ／＼と多くのことを學んだ。多分マルキシストの方でも得るところが少からずあ

七五

つたに相違ない。ナチス相手では迂闊なことが出来ないくらいは確かに判つたに相違ない。
少くともそれから一九三三年の秋までマルキシストの新聞も「プロレタリアの拳」などと強がり
言はなくなつた。

七六

第八章 大同團結を非とするの巻

一、ナチスの優先権

世の剛者と稱する者は獨りで居る時が一番強い。ナチスは他黨との提携を求めない。
前章の終りに於てドイツ右翼諸黨の聯盟のことを述べた。元來政黨の大同團結に於ては俺に以前か
ら意見がある。以下簡単にそれを述べることにする。

抑も政黨の大同團結といふのは目的を同する政黨が共同戦線を張つて敵に當ることである。世間
では共同の敵にうち向ふには互に離れて居るよりも、手を携へて一つになつた方が善いとされる。そ
れ故に多くの者は孤立であるより他黨と戦線提携をすることを欣ぶを常とする。分れて居れば弱い
一つになればどんな大きな働きでも出来るやうにと考へるからだ。抑もそれが大間違のもとだ。

大同團結論者は云ふ。團結に加はる政黨又は團體は本來主義主張を同するものだから、團結する
のが當然だと。俺だとしてそれに異論はない。併し此で考へねばならぬことは主義主張を同するもの
なら始めから一つであれば善いのに、一つにならず各別な黨を組織することである。理窟から云へば
主義が二つなら殊更に幾つもの派を立てる必要がない筈で、一つの政派だけで十分である。主義を

七七

七八
同するもの間に異つた政黨がいくつも出来るといふのは解し難いことでないか。そこにいろ／＼の事情がある。凡て大同團結に加はる政黨は主義を一にし、政綱が似て居ると云ふけれども、各派の政綱なるものは時を同うして生れて来たものでなく、黨の出来るのに前後があれば、政綱の決定に就ても、遅い早いがあるわけだ。換言すれば、同じやうな政綱の政黨が幾つあつても、その中には始めからそれを取り入れたものと、後から出て先に出来た政黨のそれを無断で借用してゐる者があるわけだ。則ち大同團結の名の下に集まる政黨團體がいくつあつても、そのなかには陳涉吳廣となつて眞先に運動を開始した政黨があるのであつて、優先權はその黨にある。それ故に道理から云へば、主義が同じであつたら、別に黨を立てるやうなことをしないで、始めから存在する政黨に加入すれば善いのだ。頭のわるい人間でない限り、それ程の理窟のわからぬ筈はないのだ。それが出来ないのは人間に私心があるからだ。

二、人間的な悲劇

抑も政綱を同うするものが一つになるべくしてならず、別々に異つた黨派を組織する原因が凡そ二つある。一つは人間の悲劇とも稱すべきものであり、一つは人間の弱點に基くものである。かくて同じやうな政黨が派を構へて争ふのは悲しむべきことだが、一方から觀れば之れあるが爲に志を同うする者の間にも競合の勢を生じ、弱き者が倒れて強い者が益々強くなるといふ利益もある。

右に挙げた二つの原因のうち所謂俺が人間の悲劇だといふのは、次のやうなことになるからだ。凡そ古來の革新運動なるものは幾百萬人の希望が凝つて一の勢力となつたものである。之等の希望のなかにはその時代かぎりのものもあれば、その時代ばかりでなく、幾百年以前から求めて居て幾百年以後になつても實現せられざるものもある。こんな熱烈なる希望はいつか達成せらるるものであつて、希望を抱きながら、それを達成し得ざる國民は爲す無きの國民である。苟くも有爲にして元氣な民族ならば外國の壓迫が加はつたり、國內が亂れたりして國民が救を求むる時は、天は必ず一人の偉人を降して外患を拂ひ、内亂を鎮め、國家を泰山の安きに置くに至るものだ。革新運動は此の如き偉人が國民を率ゐて民族的志望を達成せしめることを云ふのだ。

忝て國家も一朝内外多事の際となれば、我こそは救世済民のチャンピオンと名乗つて出る者が、一人や二人でなく、幾千人といふ多くの者が登場する。そこで雲の如く輩出する志士仁人のうちにも激しい競争が行はれ、革新の事業は畢竟最後に残つた一人の優れた者の手に依りて、成就されるのである。

宗教界の改革運動も之と同じことであつて、世人が舊い教義に疑を抱き、新しい教理を求めつゝ、求むるものが得られずして陰鬱な空氣の續くことがある。さうなると新宗教の提唱者が十人や十五人

ばかりでない、多くの者が一時に輩出し、或る者は豫言者を以て自ら任じ、或る者は専ら在來の完教を攻撃し、思ひ／＼の活動を開始する。

然りながら優勝劣敗、適者生存は自然界の鉄則である。此の如く多くの改革者が現はれても、本當に改革の目的を達するものはそのうちの唯だ一人のみであつて、それは言ふまでもなく、優勝劣敗の激しい競争を経て最後の榮冠をかち得た者である。古來英雄は立たずといふから、その人にあらざる者は始めから、己より優れた者の配下に馳せ参ずれば善いのだが、自から競争の場裏に身を置くものに在りてはそれが出来ない。競争者は何れも己れこそ改革者であると思つて居るから、互にとつて下らない。而して世間も亦斯うなつて來ると、どれがほんものの豫言者であるか、一時はその見分けがつかなくなつて來る。

此の如くにして宗教改革運動でも、いろ／＼の人間が出現していろ／＼の宗派を樹てるのだが、同じ色の政黨が派を立てて争ふのも同じことなんだ。

端的に云へば宗教界にしろ、政治の舞臺にしろ大改革を成し遂げる資格あるものは始めから一人に極まつて居るのだ。それを悟らずして平凡な者まで首領顔をしたがるのは身の程を知らざるものであつて、こゝに似而非改革者の悲劇がある。

かくて政界の革新運動にも宗教界の革新運動にも同一陣營のうちに異つた政黨、宗派が出現するの

は一見悲しむべきことであるが、之も畢竟は互に競争させて、最も優れた者に勝利を得させようといふ天意に依るものであること前にも述べた通りである。

蓋し多くの似たやうな政黨や、宗派が出來ると、どれがほんたうに選ばれたものであるか、それを外からだけで識別することは困難だ。言ふことを聞いて居ただけではどれが本物か識別がつかぬ。それを定めるには思ふまゝに競争させて、勝つたものを本物なりと決めるより外に途がないのだ。こんなところから觀て同じ系統の政黨や宗派が對立するのは少しも悲しむに足らぬ。對立せる政黨又は宗派が同じ政綱又は信條を有するものが、己等ばかりでなく他にも存在することを悟れば、怠けては居られぬ。無い智慧を絞つても工夫に工夫を加へて、互に敗けまいとする。而してそこに最も優者たるべきものが自ら生れて來る。

凡そ人文の進歩は政治宗教ばかりでなく、他の部門でも同じく此の如き相互の競争に依るものである。従つて同じ宗教のうちに、又同じ系統の政治運動のなかに異つた宗派や、異つた政黨が現はれ、互に排斥することは改革運動を促進するものであるとも云へる。政黨でも宗派でも必ずしも無理に合同する必要はない。

三、オーストリアとプロイセンの對立

今之を歴史の跡について見ても、同じドイツの統一についてもオーストリアとプロイセンとの間に永い對立が續いた。ハプスブルグ家とホーエンツォレルン家との確執と言つても善い。之は當然の勢であつて、その方が反つて善いのだが、當時多くの人々は兩者競争を止めて、須らく妥協すべきものであるとなした。然りながら若し兩國が論者の説に由つて姑息な妥協をなして居たら、どんなことになつては居たか判らない。横着なオーストリアはドイツをどこへ持つて行つたかわかるまい。

普と奥との戦争はドイツ國民の統一を念願とする幾百萬の志士をして、血涙を流さしめたものである。彼等は兩國の戦争を以て兄弟血で血を洗ふものとして慨いたのである。然りながらドイツの本當の統一出來たのは、全く普奥戦争に依つてである。ドイツ統一の出來たのは同じドイツのプロイセンが、同じドイツのオーストリアを叩きつぶした時に始まつたのであつて、隣りのフランスを撃つた所謂普佛戦争に依つてではない。ドイツの統一はケーニヒスグラッで出來たのでバリでない。パリの戦に依つてドイツの統一が生れたと見るのは短見者流のことだ。

斯くの如くにしてドイツ帝國も亦普奥の妥協に依つたものでなく、普奥の競争に由りて出現したものである。蓋し競争は自然界の鐵則である。人間の智慧は自然の鐵則に及ばぬ。若し人々の云ふこ

ろに従ひ、兩國が競争を止めて妥協して居たら、俺は決してドイツの統一はなかつたらうと思ふ。先入の偏見に囚はれ、強いて事實の前に目を閉づる者ならいざ知らず、苟も虛心坦懷の者なら、何人とも俺の言ふところが眞實であることを承認するであらう。自然は正直だ。誰か二百年前のドイツに於てホーエンツォレルンのプロイセンがドイツ統一の事業を成就し、オーストリアのハプスブルグが外に押し出されることを豫想したものがあらう。而して誰か二百年後の今日に於て、プロイセンの作つたドイツ帝國が、オーストリアの作つたであらうドイツ帝國と、比較にならぬ程優れたものであることを否定するものがあらう。若し妥協に由りてオーストリアなどを出しやばらせて置いたら、健全なドイツの統一はなかつたであらう。

普奥の争覇は數百年に亘つたけれども、覇權は畢竟プロイセンの手に歸した。プロイセンが始めから優れて居たからだ。優勝劣敗は過去に於て然りしが如く今日に於ても然り、明日に於ても然りで永久不變である。

然れば同志のものの競争は決して慨くべきでない。運動は友黨相互の競争に由りて促進される。

四、人間の嫉妬

党派対立の第二の原因は、今迄述べた所謂人間の悲劇的なものよりもつと根強いものである。それは人間の嫉妬と虚榮と而じて泥坊根性である。悲しむべきことだが之も事實だから、さうでないとは言はれない。

ここに一人の志士がある。國家の患難を憂ひその根本原因を探索して、根本の對策を立て聲を大にして同胞の注意を喚起するとせよ。始めの間は氣にもとめないが、それが一つの運動となり、漸く世間から何とか云はれるやうになると、嫉妬深いのが、もう黙つて見て居らぬ。何とかして邪魔をしようとする。雀はあれでなかなか狡猾なもので、見たところ罪のないやうな顔をして居ながら油斷のなだらぬ代物だ。一羽の仲間がふとパンのかけらでもうまう見つけて食べて居ると、氣にもとめないやうな風を装ひながら、隙を見て急に横合から攫つて行くのが居る。人間の世界も雀と同じことで他人の仕事が評判になると、その邪魔をする。然らざる者は横合から奪つて己れのものにしようとする。人間でもそんなのがいつもそこらにごろ／＼して居るのだ。

之等の中にはナチス黨が組織せられ、その政綱も發表せられて次第に世間の氣受が良くなつて來ると、直ぐにやつて來て我等もナチスの趣旨には賛成だと言つた者も少くない。それならば進んでナチ

ス黨員になるかと思ふとさうでなく、ナチスに加入しないで、ナチスの政綱をその儘盗んで行つて、別に新黨を組織する。それもまだ善いとして、國民主義運動の本来は自分達だと吹聴して廻る。唾棄すべきことだが、世間は又馬鹿なもので、さう言はれると、それを又本當に信ずる者のあるものもなきないことだ。既に他黨で掲げて居る旗を己等の旗とし、既に他黨の政綱となつてゐるものを盗んで來て、新黨を組織するが如きは厚顏無恥の甚しいものでないか。それにも係らず新黨の勢力が日に大を加へ自分達の黨勢が振はなくなると、共同戦線だの右派聯盟だの、大同團結だのと云つて、騒ぎ出すのはいつもさまつてこんな連中だ。併し考へてみれば無用な多くの新黨を作り、國民主義戦線の分裂を來したのは彼等であつて、ナチスではない。

五、ユリウス・シュトライヘル

然りながら一九一八年から九年にかけて、所謂國民主義と銘をうつた團體又は政黨が雨後の筍のやうに出現したのは、内外の狀勢が之を然らしめたものでもあつて、新團體新政黨の首領は必ずしも私意を挟んで居たものばかりとは言へない。一九二〇年のことであつた。折角組織したばかりの新黨を解消して、優勢なナチスに合流したものも少からずあつた。

當時ニュルンベルグにドイツ社會黨なる國民主義派の二政黨があつた。首領はユリウス・シュトライ

ヘルと言ふ男であつた。この男は率先してナチスへとび込んで来た。ナチス黨と此のドイツ社會黨とは主義を同じうするけれども、出来たのは別々であつたこと勿論だ。黨首のシュトライヘルはその時ニ
 ユルンベルグの學校の先生をして居つた。彼も始めは自分の造つたドイツ社會黨を護り立てて行くつもりであつたが、ナチス黨が善いと知ると潔く黨を解消し、全員を率ゐてナチスに入黨した。このことなるや一見容易なるが如くにして普通の者には出来ない藝當だ。

それ故に我等から云へば此の時から國民主義戰線の分裂などと云ふものは存在しないのである。國民主義の政黨中にはかくの如くにしてナチスとなつたものが他にも少くないからだ。それにも係らず、今尚ほ自黨を固執して國民戰線の分裂などと騒いで居るのは何れも野心家ばかりである。彼等には本來主義主張のある筈はない。唯だナチスの成功を妬んで張合つて見度いだけなんだ。

彼等は國民主義を云爲して居るが、元來彼等の所謂政綱なるものは、ナチスの政綱をそのまゝ盗んだものである。彼等の所謂イデーはナチスのイデーであり、彼等の所謂政治目標はナチスの政治目標である。既に政綱も、イデーも、政治目標も同じであれば、黨を解消してナチス黨員になればそれで宜しいのだ。ナチスに對抗して別の黨を存続せしめる必要はない筈だ。

彼等はそれに就いていろ／＼と辯解を試みて居るが、つまり己れの虚榮以外に何の理由もないのだ。彼等は世間からやんやと持てはやされたいのだが、頭も腕もなく持つて居るのはあつかましきばかり

であるから、自分達で政綱を編み出すことが出来ず、他人のものを横取して自分のもののやうに装うて居るだけなんだ。政治運動だから善いやうなもの、之れが商賣かなんかであつたら、立派な泥坊行為だ。

彼等は政治泥坊であつて極めて不快な存在だ。斯くて自ら國民戰線を擾亂した彼等が、今になつて連りに右翼戰線の統一を叫んで止まないのは、仲間に入れて置いて、あはよくばナチスを乗取らうといふ野心があるのだ。既にナチスの政綱を盗み、今又更にナチスの黨をも盗まんとする彼等の泥坊根性にはあきれざるを得ぬ。

商賣人は目論んだ商賣がうまくいかないと、商品の値を落して安く賣り、それでも尙うまく切り抜けることが出来ないと、そんな仲間が寄つて企業合同を企てる。ナチス乗取りを策して失敗した彼等は、今では彼等の仲間だけで聯盟を組織して居る。商賣人の企業合同といふ形だ。

右の聯盟に加入して居るのは、何れも獨り立ちの出来ないゐざりのやうなものであつた。ゐざりも八人寄れば一人の劍客に當れると考へたのであらう。

若し幸にしてその中に一人でも足腰の立つ者があるとしても、劍士に立ち向ふなどは思も寄らず、仲間のゐざりを援け起すだけで手一杯であらう。ゐざりは幾人寄つても一人の劍士にかなはない。右翼聯盟は黨人のかけひきだと俺達は始めから睨んで居た。俺達はそんなかけひきに乗る程甘くない。

加之多くの政黨が大同團結をなす場合には、弱體の政黨は依然弱體で、弱體のものが大同團結によつて強くなることはなくて、強い政黨は團結に由りて弱くなる度が多分にある。つまり政黨が聯合するとそのうちの弱い政黨が強くなり、強い政黨は弱くなるのだ。抑も弱いものでも集まれば強くなるといふのは誤つた考である。何となれば形の奈何を問はず、多數主義は畢竟魯鈍と卑怯の代名詞だ。維多利亞の寄合世帯は無氣力な存在に墮せざるを得ぬ。聯盟の幹部を各黨から選べば、幹部會はいつも意見の對立ばかりで、無用の論議に没頭し機敏な働きが出来ない。これも寄合世帯の悲しさである。又同一戦線でも各黨が對立して居れば競争が自由に行はれて、そのうちからも強いもの、優れたものが生れて来るけれども、聯合して一體になつて終へば、競争が止んで、強い者優れたものの頭を出す機會がなくなる。然れば政黨の聯盟などは元來自然の法則に反するものであるとも云へよう。革新運動の邪魔にならうが助けにはならない。

今獨立獨行を宗とする政黨でも、問題に依りては同系統の他の政黨と提携して共同動作に出ることはあり得る。併しそれはどこまでも一時の權道であるから、必要が亡くなつたら直ちに手を切るべくいつまでも提携を續けるといふやうなことがあつてはならぬ。必要がなくなつても繋がつて居るのは腐れ縁といふものである。腐れ縁でつながつて居ては獨立の行動がとれなくなるばかりでなく、今も

●

述べたやうに競争が行はれなくなつて黨の墮落を招來する。之れ亦考へねばならぬことだ。

凡そ古來の大事業なるものは何れも獨立獨行者の力に依らざるはない。合せ物は離れ物だ。寄合世帯はいつか離れざるを得ぬ。合同は始めから分裂の萌芽を藏する。革命は各派の血戦に依つて決する。寄合世帯で革命の出來た例は未だ嘗て耳にしたことがない。

俺達は新しい民族的國家を建設せんとするものだ。之れ國家未曾有の大事業だ。こんな仕事は政黨聯盟などと云ふ寄合世帯で成し遂げられるものでない。民族的國家の實現はどこまでも妥協を排し、單獨で邁進する強いナチスの手を俟たねばならぬ。

第九章 突撃隊の巻

一、國家存立の三要素

舊ドイツには之を支ふる三本の柱があつた爲、ドイツの強味はそこにあつた。三本の柱といふのは君主政體が第一の柱であり、官僚制度が第二の柱であつて、軍が第三の柱であつた。一九一八年の革命は君主政體を廢し、軍を破壊し、官僚制度は政黨政治に依りて腐敗した。而して之れと共に國家の權威は地を掃ふに至つた。

凡そ國家の權威則ち國權の重きをなす所以のものが之れ亦三つある。第一の要素は人民の輿望信頼である。然しながら輿望のみに頼つて居る政府は根柢が薄弱で安定がない。こゝを以て政府は人民の輿望の外に強權を必要とする。強權は輿論と共に政府を重からしむる第二の要素である。強權を頼む政府は輿望のみをたよりとする政府より強固であり、安定性の固いことも勿論であるが、強權はいつでも輿望より強いものとは言はれない。輿望に偏せず、強權のみに依らず、兩者並び存し、一定の年限を経過するとき、そこに自然の落つきが出て来る。之を假りに傳襲の力といふて置く。傳襲は國權を維持する第三の要素である。かくて國家の權威は、輿望と強權と傳襲の三要素の上に立つものである。

右三要素のうち傳襲の力はドイツの潰滅、政體の變化とともに雲散霧消し、國家は先づ傳襲の支へを失つた。

第二の要素である強權、之れ亦革命に依つて無力なるものとなつた。國家の強權の基は則ち軍隊である。而して軍隊は革命の爲めに滅茶滅茶になつた。革命側のものが軍隊の叛亂分子を手先に利用せるが爲である。最初前線の兵士は内地の革命運動に動かされることがなかつたけれども、四年半の戦をやめ内地に歸還するやうになつてからは、いつのまにか出征兵士も亦革命の害毒に感染し、兵の會などを組織して上官の命を無視し、任意服従などと云つてろくに敬禮するものさへなくなつた。

軍隊も規律があつてこそたよりにもなるが、貴き兵士の務を工場の八時間労働と同一視し、眼中上官の威嚴も何にもない軍隊では少しも當てにならない。かくて革命政府は舊政體と強權との支へを失ひ、政府の手に残つたものは國民の輿望だけといふことになつたが、この輿望なるものが恐ろしく心細いものであつた。蓋しドイツ革命の成就是、畢竟戦敗のドサクサ紛れに乗じて、一味のものが火事場泥坊を働いた爲めで、革命者側に實力のあつた爲ではない。

二、國民の三つの層

凡そこの國でも國民は三つの層に分けることが出来る。義勇奉公の志熾んな人間の層が一つ、我利々々盲者のやくざ者の層が一つ、沈香もたかず、何とやらもせぬ、善いこともせぬが、わるいことも出来ないといふ、いはばボンクラ者の層が一つで、此の層が數としては第一位を占める。以上が國內一般庶民の分類である。

國家の隆替は三層の民のうち何れが時を得、何れが時を失ふかに依つて定まる。則ち

第一層の者が勢力を占むる時は國運も亦隆盛となり、太平無事にして現狀維持に専らなる時は第三層のものが幅を利かす時であり、その時は第一と第二の層のものが勢力を争ふといふことになる。而して國家土崩瓦解の時は、第二層の所謂やくざ分子が跋扈跳梁する時である。

今假りに第一層を有爲層とし、第二層を不良層とし、而して第三層を中立層と稱する。中立層は有爲不良兩層の反目争鬭する場合は所謂日和見の態度を持し、有爲層が勝てばそれになびき、不良層が勝てば又不良層になびく。なびかないまでも抵抗を試みることはない。中立層はいかなる場合にも自分で開ふことを敢てせぬ。

ところで四年半に亘る長期の戦争に於て、ドイツでは右三つの層のうち有爲層は殆んど全滅するや

うな破目に陥つた。蓋し戦争中の此の層の犠牲は筆紙にも盡し難い程甚大なものがあつた。その一例を擧げてみる。戦争が進展して兵士が不足するとそれ義勇兵を送れといふ。通信隊に人が不足すると夫れ義勇兵を送れ、電信隊に人が不足すると、それ義勇兵を送れ、架橋部隊に人が不足すると、それ義勇兵を送れ、潜航艇に人が不足すると、それ義勇兵を送れ、航空部隊に人が不足すると、それ義勇兵を送れ、歩兵の突撃部隊に人が不足すると、それ義勇兵を送れ、國民も政府も事ある毎に義勇兵を引っぱり出したものである。而して義勇兵も亦進んで名乗り出たものであつたが、結果はいつも面白くなかつた。義勇兵のうちには未だ髭も生へない若者もあれば、子供の如くある大人もあり、何れも愛國の至誠に燃え、報公の精神に驅られた元氣な者で、募集があれば數萬人、數十萬人といふ多くの人間が現はれたものである。然るに此の種の元氣な人間は次第に少なくなつて往つた。彼等の多くは戦死し然らざるものは瘡疾となつた。何れにせよ、一九一四年には義勇兵はそれだけで一軍が出来程多かつたものであるが、多くは大砲の林になつて消えて行つた。之は議會が軍部の要求に耳を假さず、いつも軍備擴張に反對し、平時から青年の軍事教練をやらせなかつた罪である。かくてフランダールだけでも戦死又負傷した義勇兵の數は四十萬人にも達するが、之は國家から見れば掛けがへのない損失であつた。それは數の損失ばかりでなく、國民中の有爲層にとりて少からざる打撃となつた。その結果三層分立の釣り合に狂ひが出来、その有爲層は輕くなつてはかりが跳ね上がり、反對に不良層は重みが

加つてはかりが下へ下がることとなつた。

九四

國民中の有爲層は此の如くにして戦場で倒れて往つたが、他方に於て不良層はいつも、その勢力を保存して居た。何となれば有爲層の兵士は潔く戦死するが、不良層のものは兵でも戦場で死ぬのは馬鹿々々しい、歸還して内地で働いた方が國の爲めにも善いといふやうなことを言つて、要領よく立ち廻り、どうしてもして死なずに生きながらへる工夫をする。その結果は有爲層のものが一人戦死する毎に、不良層のものが一人宛生きながらへる勘定になる。かくて戦争の終局に於ては、有爲層の人間は殆んど全滅し、第三の中立層も又多大の犠牲を拂ひ、單り不良層のみがものまゝで少しも損害を受けなかつたといふことになつた。而かも不良層をして免かれて恥なからしめたものは、當局のやり方が手ぬるかつた爲である。政府としては軍法をもつと強く適用して、破廉恥漢に對する制裁をもつと嚴にすべきであつた。政府はそれをやらなかつたのだ。

かくてドイツ革命を惹起したのは、戦争中も己れの勢力を失はざることに腐心して居た不良層である。彼等是有爲層の力の衰へに乗じて事をなしたのである。

ドイツ革命が國民一般の支持を得たものでなく、どこかに満たされざるものがあつたのは、此の爲である。ドイツ革命は國民の革命でなくて、脱走兵やごろつきから成る不良層の陰謀であつたのだ。

戦線の兵士は戦争が終り、復び内地の土を踏み、無事な妻子の顔を見るのを欣んだ。歸還兵はそれ

ばかりを欣んだけれども、革命などには無關心であつた。況んや革命の張本人やマルキシストの諸政黨に對しては風馬牛であつた。四年半も戦場にあつて血みどろの闘を事とした彼等は、内地の政争などはすっかり忘れて居た。

それ故に革命と云つても人氣のあつたのはほんの少數者の間のみであつた。而かも此の輩の革命を謳歌したのは革命を欣ぶのでなく、革命のどさくさ紛れに乗じて、火事泥をなし得る機會を得たことを欣んだのだ。

曩にも述べた如く、國家の權威は國民の輿望を一つの支柱となすものである。然るに革命が一部のものに欣ばるのみで、全體の支持を受けることなきものとすれば、ドイツ革命は國民の輿望であつたと稱することが出来ぬ。而かも新たに出來た共和政府は、何を差措いても權威をもつことが必要である。之れなき時は有爲層の生殘分子から忽ち顛覆される虞あるが故だ。

當時革命派首領の最も恐れたことは、反革命派から味方の内紛に乗ぜられることであつた。政府の基礎が固まらず政府の權威の未だ以て國民を服せしむるものがない時は、所謂反動派からやられる恐があるのだ。それ故に共和政府はどうしても國民輿望の外に國家の強權を確保する必要に迫られた。

九五

三、ドイツ革命の内情

九六

一九一八年の十二月から一九一九年の一月二月にかけて情勢の尙不利なるものあるや、政府は武器の力に依りて政府を擁護すべき人々を物色し始めた。ミリタリズム反對の共和政府はミリタリズムの軍隊を持たうといふのだ。ところで新政府の支持者は泥坊にあらざればさんちやく切りであり、脱走兵に非ざれば要領の善い奴ばかりであるから、こんな連中の中から新國家の理想の爲めに身を挺して難に當らうといふが如き兵士を求むることは、本に縁つて魚を求むるものである。到底望がない。彼等の間には進んで革命擁護の兵士たらうといふ者がないのだ。蓋し彼等の目的は最初より共和政體を打ち立てることではなくて、君主政體の倒壊に乗じてうまいまうけをやらうといふにあつたからだ。彼等の標語は、ドイツ共和國の建設ではなくて、共和國を喰物にせよであつた。

それ故に共和政府の閣僚則ち人民委員なるものは聲を囁まして兵員たるべきものを求めても、暴徒は耳を假さなかつたばかりでなく、反つて反抗の氣勢をさへ示した。共和政府の人達はミリタリズム反對であつた。従つて事情は奈何にともあれ、共和國が軍隊の力に依りて權威を固くしようといふのは、從來の主義主張を裏切るものであつた。そののみならず、暴徒は革命の騒ぎに乗じて出獄した泥坊やごろつきであり、その目的とするところは、どさくさ紛れに掠奪をしようといふのであつたから、

軍隊が出来て、政府がそれを取締に使ふことになれば、掠奪が出来なくなる。暴徒が軍隊編成に反對したのは之等の理由にも由つたのである。

かくて人民委員が聲を大にして叫んでも、暴徒のうちには進んで新軍隊の兵士にならうといふ者は一人もなく、人民委員は反て革命の裏切者と罵られるばかりであつた。

此の時に當り、國民中安寧秩序維持の爲め、進んで警備の任に當つたものがある。それは革命派のものでなく、戦場から歸つた若い者共であつた。彼等は復び軍服をつけ、銃を肩にし、鐵兜を戴き、思ひ／＼の團體を造つて治安の維持に力めた。而かも之が蛇蝎の如くに憎んで居た革命政府を保護し、その勢を助長する結果となつたのは一種の悲劇である。

ドイツ革命の元兇は世界を股にかけて居るジューであつた。ジューからすればドイツではロシアに起つたやうな血腥い闘争は起さうとしても起らない。ドイツではインテリと労働者との對立があつても、双方ともドイツ人である。ドイツは教育が普及して居て、下層階級のものでも讀み書きの出來ないものはない。ロシアにはそれがなかつた。ロシアのインテリと稱せらるる者にはロシア人でないものが多かつた。その上本當の『シヤ人』であつても、その数が少いばかりでなく、インテリ階級と下層階級を繋ぐ中産階級なるものが存在しなかつた。而してその下層階級なるものが此の上もない無智蒙昧な大衆であるから、之を煽つてインテリ階級を追つかけさせることは容易である。ボルシェウイキ

九七

の革命がロシアで成功したのは此の爲であるが、ドイツではさうは行かぬ。

九八

ドイツ革命がロシアのそれの如く、血で血を洗ふ惨ましいものにならなかつた理由は之ればかりでない、他にもある。ドイツ革命は軍隊の崩壊に依つて成就したものであるけれども、革命の原動力は戦線の兵士でなく、兵士で革命に参加したものは内地の兵營に居て妄動した輩であり、一部は工場の労働者であつた。それに數萬の脱走兵の加はつて居たのが革命の主體である。當時ドイツ兵の中には脱走して内地へ還るものが少からずあつた。軍の紀綱が弛んで居た爲め脱走しようと思へば大きな危険がなくて脱走出来たのだ。凡そ古往近來、國の東西を問はず卑怯者にとりては死より恐しいものは他にない。ところで一度戦線に立てば殆んど毎日のやうに死は眼前に立つて居るのだ。恐がるまいと思つても恐がらざるを得ない。かくの如く深く死を畏るる懦弱漢を驅つて戦はしめる術は唯だ一つある。それは他でもない、脱走を企てる者があつたら容赦なく銃殺することだ。戦つて居れば死ぬことはあるが死なぬこともある。脱走すれば千に一つも助かることはなくて必ず殺されると知つたら、奈何なる臆病者でも戦線から逃げ歸るやうなことはしないであらう。かくて嚴刑を以て脱走兵に對することは單り個人ばかりでなく、全軍の肅整にもなるのだ。こゝに軍法の意義がある。

戦争は國民死活の闘争である。従つて國を念ふ忠良の徒は、命を俟たずして出て戦ひ、死しても卑怯な振舞は爲ないが、多くの者のうちには然らざる者もある。之等の徒に對しては、尙ほ泥坊を取締

るに刑を以てするが如く、嚴刑を以て臨む必要がある。若し罰すべきものをも罰せず置くやうなことがあれば、盗んだものが憐れで盗まないものが馬鹿だといふことになり、脱走するのが賢明で眞面目に戦ふを爲て居る者は愚だといふことになる。

怯懦なる兵士は嚴刑を以て臨まなければ戦はしめることは出来ない。之れは數百年數千年來の経験の教ふところだ。長期の戦に臨みながら嚴刑主義を忘れて居るやうでは、うまく行かないこと始めより明かである。

欣んで戦場で戦ふ兵は英雄だ。民族興亡の瀬戸際に立ちながら國を思はずして身を思ふ兵士は卑怯なエゴイストだ。軍の嚴刑は英雄には用がないが、エゴイストは之でなければ戦はせることが出来ない。戦争となれば兵士は毎日死と闘ひ、或はぬかるみの塹壕内に起臥し、渴して水も飲まれず、飢えて食も得られない苦しい生活をして居るのだ。その中に卑怯者があつたら容赦なく死刑に處するが當然だ。懲役などと云ふ手ぬるいことでは役に立たぬ。此の徒輩から見れば戦地に居るより懲役に往つて居た方がどれだけ安心か判らぬ。牢屋に居れば不自由でも生命だけは危険がないからだ。それ故に法の名はあつたらうけれども、實際に於て軍が脱走兵に對して死刑を通用しなかつたのは大なる間違であつた。その報はてきめんで、間もなく戦線でも内地でも脱走兵や忌避者が續出し、一九一八年には殊にそれが多くなり、脱走兵や忌避者は他の暴徒に合流して革命の手先となるに至つた。一九一八

九九

年十一月七日の革命には、脱走兵が少からず加はつて居たのだ。

戦線の兵士は前に云つたやうに革命には無關心であつた。彼等の望むところは唯だ戦さが止んで世の中が平和に歸ることであつた。それ故に革命を起して居た暴徒は、軍隊が内地へ歸つて來ると聞いて甚だ不安に感じた。

それまで獵けつを極めて居た革命派が軍隊歸還の報を聞くと共に少くとも表面だけはいくらか穩かになつたのはその爲だ。目に餘る亂暴を働いたら歸還の軍隊に一舉にやつつけられる危険があつたからだ。又事實に於て當時一人でも剛毅果斷な師團長があり、部下を率ゐて革命に彈壓を下し、赤の奴等を壁に押しつけ、それでも尙反抗する者があれば手榴彈をなげつけ、銃剣を擬して脅したら、暴徒はわけもなく屏息したであらうに惜しいことをしたものだ。何となればどの師團でも善い、難を冒して奮起するものが一つでもあつたら、その師團ばかりでなく、四週間も経たないうちに六十の師團は悉くそれに合流して一團となつたであらうこと請合だ。革命の主謀者であるジューはそれを最も深く恐れたのだ。彼等がロシアのボルシェウイズムのやうな過激な方法を避け、専ら穩和な形をとらせやうとしたのはこの爲である。彼等は先づ官僚や軍部を壓迫せずして色めを使ひ、兩者に對し頗る妥協的な態度を以て接近して來た。彼等は次のやうに考へたのだ。將來は將來として、差しあたりは止むを得ない。先づ官僚と軍部に當面の始末をつけさせ、共和國が無事に出來上つて基礎が固まつたら横

から取つて了へば善いと。昨日まで革命と呼んで甚しい騷擾を演じて居た彼等が軍隊歸還と共に俄かに國內の治安を云爲し、軍部官僚に手をさし伸べて來たのはこんな魂膽があつたのだ。而かも軍部や官僚はすつかりその術に陥つて知らなかつた。

同じく社會民主黨と云つても、ドイツ革命を惹起したのは所謂安寧秩序を重んずる穩和派のものでなくて、一部の過激派であつた。此の輩にとりてはドイツ革命のボルシェウイキ化しないのが物足りない。世の中に秩序が出來ては仕事が出来ないからだ。彼等は亂を好む連中だ。

社會民主黨則ちドイツの社民黨は黨勢の盛なるにつれていつのまにか革命的な性格を亡くして居た。それは思想が變つた爲でもなければ、領袖の目的が變つて來た爲でもない。社民黨もその首領も革命的であつたことには戦前戦後の變りはない。ドイツの社民黨は黨員千萬人を算する尤大な政黨となつた。政黨の活潑なのは發展途上にある間だ。己でも持てあます程大きなものになつて了へば革命などといふやうな元氣はなくなつて、事勿れ主義に陥るのは勢免かれないところだ。社民黨はかくていつのまにか日和見黨のやうになつて居たのだ。

社民黨が平穩無事を願つたもう一つの理由がある。社民黨は戦争中から二つに分裂した。社民黨の多數がいや／＼ながらも戦争に協力して居る間に一部のジューの黨員は黨の態度を不満として脱黨した。それが則ち獨立社會黨又は獨立黨と稱するものだ。獨立黨之は社民黨の養え切らないのに比し、

一〇二
恐ろしく活潑な奴等であつてスバルタカスの一團と共に盛んに荒れ廻つた。彼等は同じくマルクス主義でも革命の猛者ばかりなのだ。彼等は母體である社民黨の因循姑息を不甲斐なしとなし一舉にボルシェウイズムのドイツを實現せんとしたのだ。それに對して有産階級の既成政黨は反抗の意氣がないばかりでなく、獨立黨でも始めから既成政黨を見縊つて居た。彼等の最も畏れたのは歸還部隊のみであつた。而して事實に於て又他日獨立黨の暴動を鎮壓したのも亦歸還部隊の兵士であつたが、結果から云へば、社會黨は歸還部隊を利用して厄介な獨立黨を片づけさせたことになつた。

かくて獨立黨は葬り去られたがそれにも又複雑な経緯があつた。獨立黨やスバルタカスが社民黨の爲すなきを憤り、革命を最後のところまで持つて行かうとして騒擾を極むるや、革命の黒幕である一味のジューは心ひそかに之を欣んだ。一時盛んであつた革命もやがて峠を越えて稍々下火になると、革命派の陣營則ち社民黨が二つに分れたことは今も既に述べた通りだ。

則ち無事太平を欲する社民黨とテロに依つて革命を續行せんとする獨立黨とがそれであつた。此の如き兩者の對立に際し怯懦にして意氣地のない既成政黨は勿論一も二もなく、事勿れ主義の社民黨に協力した。獨力にてボルシェウイズムの獨立黨に對抗する勇氣なく、獨立黨からも馬鹿にされて居た既成政黨は不倶戴天の政敵である社民黨と共同戦線を張つて、獨立黨に當ることとなつたのである。

而して之れ亦ジューの思ふ壺にはまつたものであつた。

斯の如くにして、一九一八年の十二月から翌一九一九年の一月にかけてのドイツ國內の情勢は、要約して次の如きものであつた。

最初に革命を惹起したのは國民のなかでも少數の不良層であつた。而して革命の烽火が擧げられると、マルクス主義の諸政黨は全部之れに參加した。ところで革命が過激なものにならず、比較的に穏かな経過をとるやうになると、一部の過激黨則ち獨立黨一派はそれを手緩しとなし、手榴彈や機關銃を持ち出して來て官衙を占領し、ボルシェウイズムのドイツを實現せんとはかつた。此の勢を見た舊政權の殘留分子は不倶戴天の敵ではあるが、ボルシェウイズキ憎さに、心ならずも共和政府の人々に協力するといふことになつたのだ。かくて共和政府と復辟運動の政治家との間に休戦條約が締結されたのだ。獨立黨は理由は異つて居るが、共和國を敵とするものである。復辟運動の政治家も亦同じく共和國を敵とするものである。本來から云へば兩者提携して共和國を打倒すべき立場にあるものである。然るに事實は全然反對で、共和政府を敵視して居る舊勢力が、同じく共和政府を敵とする獨立黨と對立して共和政府の味方となつたのだ。之が爲に舊勢力は共和國を倒すどころか、それをさつかけに共和政府と妙な腐れ縁を結ぶことになつたのはだらしなないことだ。多くの人には氣づかぬことだが、以上の事情は是非とも知つて置いて貰はねばならぬことだ。ドイツ國民の十に九は革命に關係なきも

のである。十に七は革命反對であり、十に六は革命を憎むものであり、革命は要するに十中一のものによつて九の者にうつかぶせられたのだ。いかに不思議なことだが、その不思議なことが不思議でなくなつたのは、右のやうな事情に因るものである。ドイツ革命の成就したのは舊勢力が共和国を助ける破目になつたからでもあるのだ。

過激分子の暴動が始まると、スバルタカス及び獨立黨と、國家を憂ふる元氣な市民との間に激烈な闘が交はされ、敵も味方も血みどろとなつて倒れた。而して共和国は其の間に立つて漁夫の利を占めた。つまり國民中の有爲層と不良層の相剋に乗じて、第三の中立層が頭を持擧げて來たことになるのだ。かくて共和国は次第に基礎を固めて行つた。既成政黨なるものは今でも共和国に不満なるものの如く、總選舉の時などは盛んに復讐などと云つて騒ぎ立てて居るが、口さばかりで肚のなかではもうとくに帝政ドイツなどは忘れて居り、窮屈な昔より、萬事融通が利いて利權なども自由になる今の議會政治が、反つて便利だと考へてゐるものさへ少くないのだ。思へば既成政黨もよくここまで墮落したものだ。

四、既成政黨と防護團

かくて舊の軍隊崩壊の後を受けた共和国は、國權確保の爲に新たな軍隊を持たねばならぬ立場に

陥つた次第は、右に述べた如くである。而かも此の軍隊が革命派の陣營のものに依つてなくて、革命反對の分子に依つて組織されるに至つたことも亦既に述べた通りである。共和国の軍隊は革命を欣ばざる愛國者及び歸還兵から出來上がった。ところでこの軍隊は、形式の上から云へばヴェルサイユ條約の制限を受け、軍隊としては半ばなものであつたばかりでなく、時日の経過と共に將卒まで不知不識の間に共和国の走狗となり了つたのは遺憾である。

此の如くにして嫌はれた共和国が、いつのまにか基礎を固むるに至つた原因は、次の二つに要約される。則ち、

一、兵が義務、服従の精神を履き違へたこと

二、既成政黨の怯懦にして爲すなかりしこと

共和国の發生維持を可能ならしめた二つの原因とは、右に掲げた軍の服従履違と政黨無氣力とであるが、前者に就ては尙少しく説明の必要がある。

服従及び義務に關しドイツ新軍隊が誤つた觀念を持つに至つた根本の原因はドイツの教育が既に國民又は民族を基礎とせず、いつも國家を最高の目標にして居たからである。こゝに目的と手段との顛倒がある。國家が目的でなくて手段であるが如く、義務も服従も亦手段であつて、目的は民族の生存確保にある。國民も軍隊も民族の生存を確保する政府には服従もし、義務も果たすべきだが、民族の

運命を危殆に陥れて顧みざる政權には、國家であつても服従の責務がない。服従は臣民の務だと云つても國家を賣る不逞の輩の政府に對しては、寧ろ服従を拒むのが民族に忠なる所以で、その識別がつかないのは服従でなくて盲従である。今日多數國民の見解に依れば、いゝの矛盾が生じて来る。例へばこゝに一人の師團長がある。その人は銃剣に依つても革命を鎮壓する必要があると思つても、上から命令があれば抜き度い剣も抜かないで居るのが善いとせられる。それが服従だとされるのである。然りながら此の如きは全然形式的の服従であつて眞の服従でもなければ義務の履行でもない。上の命令がいかにあらうとも民族興亡の運命に關するものがあつたら、上の命に背いてもなすべきところを成し遂ぐべきである。民族死活の前には上官の命令などに頓着することはない。ナチスは政府よりも國民を大切だと考へるから、國民に不利だと思へば、上の命令でも拒んで應じないことにして居る。ナチスはそれが民族の利益だと思へば、上のものの命に反しても己れの善しとするところを己れの責任でやり遂げる。之れがナチスの流儀なんだ。

ドイツ國民の服従は生命を失つて居る。それなればこそ革命派にしてやられたのだ。次に既成政黨の無氣力については左のやうな事情があつた。

四ヶ年半の大戦に依つて國を憂ふる有爲で元氣な男子は多く戦場で死んで行つた。之は國家主義の諸政黨には大きな打撃であつた。併しそればかりでない。既成政黨の迫力を缺いて居るのは彼等の運

動が頭にのみ偏し拳を用ゐることを忘れて居たことにも由るのだ。彼等は力を用ゐるのは政府だけに許されて居ることだと考へて居るのだ。此の如きはデカダンの頽廢氣分の現はれで、時代の弊風ともいふべきものであり、仕方のないことだと云へばそれまでだが、既に政敵のマルキシスト諸黨が一切上品なことを捨て去り、暴力を振りまわして居る際に己れ達ばかり上品ぶつて構へて居るのは、寧ろ馬鹿げたことである。氣が知れないとも言ひ度くなる。マルキシストは目的の爲めに手段を選ばず、勝てば官軍負ければ賊で、いかなる惡辣な手段でも避けざるものである。此の如き徒輩に對して上品な言論戦ばかりで立ち向はうとする既成政黨は、どうかして居るのではないかと思はれる。

以上俺の言つたことは想像でなくて事實である。試みに一九一八年十一月の七日から十一日にかけての革命の情勢を見よ。當時マルキシストにはバラメンタリズムもデモクラシーもなかつたではないか。唯だ市民の目にするところは暴徒の跳梁のみであつた。此の時に當り平常お謀りの甘い既成政黨の連中がどうするかと思へば、進んで暴徒と闘はうとするものは一人もなく、何れも袖手傍觀するのみであつた。既成政黨は實に不甲斐ないのだ。

革命が終ると既成政黨は看板を塗り換へて表に出て來た。そして偉い領袖連は隠れて居た暗い地下室や、くもの巢の張つた天井裏から這ひ出して來て大きな口を利き始めたが、だらしない者はどうにも仕やうがなく、革命の騒で少しは伶俐になつたかと思の外、どれもこれも同じく吳下の舊阿蒙で、

あれだけひどい目にあつても、目が醒めなくて舊態依然、政綱は時代遅れのをそのまゝ掲げて居るし、政黨の手段はどこまでも言論戦に由るべしだと主張して居ることも以前同様であつた。革命前と違つたところは、既成政黨も政權にありつくことを唯一の目的とするに至つたことだけだ。革命前もさうであつたが、革命後になつても、街頭の示威運動だといふと、既成政黨はいつもふるへ上つて首を締め、わけもなく兜を脱ぐのであつた。

共和擁護法の提出された時も最初は政府でも議會で多數を得る見込がなかつた。既成政黨は大部分反對であつたのだ。然るに二十萬のマルキシストが示威運動を開始すると、今迄反對であつた既成政黨の代議士連は、議會を出ると群衆になぐられるのが恐ろしさに始めの反對もどこへやら、俄かに賛成に變つたので、法案はわけもなく議會を通過して法律となつた。これが爲になぐられることは免かれたが、既成政黨の意氣地のないのは凡そこんなことでも明かだ。かくて共和の新政府が出来てからも既成政黨は殆んど有れども無きが如き状態にあつたのだ。

唯だ此の際マルキシズム及び赤化せる大衆に對して抵抗する氣力のあつたものは、民間の義勇的防護團であつた。此のうちには在郷兵の義勇隊もあれば自警團もあり、隣保組といったやうなものもあつた。

此の種の團體が所々にありながら、國家主義の政黨も防護團も目立つ程の運動の出来なかつたのは

次のやうな事情に基くのだ。則ち所謂既成政黨は國民主義を標榜して闘ひながら、街頭の力である防護團と連絡がなく、防護團が亦纏まつた政治運動に關係を持たなかつた爲だ。

抑もマルキシズムの今日成功したのは目的を達する爲めに腕力を避けなかつた爲めだ。政治は闘争だ。政綱だけが善くても、之を實現するだけの蠻氣のないものは駄目だ。既成政黨は政綱も古びて居たが、缺點は何よりも蠻力のなかつたことだ。

國民主義陣營の既成政黨はどんな政綱を掲げて居たにしろ、之を實現する爲めに闘ひ抜く氣魄がなかつた。室の中に立ち籠つて居て、街道に出て闘ふ力のない彼等であつた。

防護團は街道に出て働いた。腕節も強かつたが、その力を用ふべき政治目標を缺いて居た。此の間に立ちジューは則ち一方に於て既成政黨の無氣力を助長し、他方に於て防護團の政治化を妨止するに全力を用ゐた。則ちジューの新聞は民間警備團體の政治に干與すべからざるを説くと共に、政治の争には腕力を用ゐるの不可を説き、政治の事はどこまでも言論戦であるべきことを、繰り返し主張した。ジューはそれに依つて防護團の政治的活動を抑壓し、既成政黨を無力ならしめんとしたのだが、多くの者はその魂膽を悟らず、ジューの言ふが儘に防護團が政治に干與したり、政黨が政争に腕力を用ゐたりすることを本當にわるいことのやうに考へた。馬鹿々々しいことだ。

然りながら既成政黨なるものはそれでも無氣力たらざるを得ない理由があつた。凡そ奈何な

る運動にせよ、古いものを壊すだけでは駄目だ。壊はすと共にそれに代るべき新しいものを掲げて民心に方向を與ふべきだ。破壊ばかりで建設的理想のないところには思ひきつた闘はあり得ない。フランス革命成功の秘密は新たな理想を掲げて闘つた爲であり、ロシア革命の達成も、ファシズムの勢力も亦、同じく目ざすべき社會を畫いて國民に向ふところを示せる爲である。ドイツの既成政黨にはそんな働きが缺けて居た。

既成政黨の政治的目的と云へば、昔を今にしようといふ望以外に何にもない。革命のドイツを帝政のドイツに復歸させることだけが彼等の目標であつて、新體制を造り出すといふやうな氣魄は聊かもなかつた。これは單り政黨ばかりでなく防護團も同じことであつた。

防護團ははつきりした政治目標を與へられなかつた爲に、いつの間にか共和國政府の傭兵となつて終つた。誠に愚なことだが、彼等はそれをドイツの爲だと固く信じて居たのだ。

かゝる間にドイツの正規軍である國衛軍が徐々に結成され基礎も出來てくると、共和國は何の遠慮もなく防護團を解散させ、命に従はざるものがあれば効かにどこかへ片づけて終つた。可哀想なことをしたものだ、片づけられた者も自業自得と云ふべきだ。

五、テロにはテロで

ドイツ國民は國民社會主義勞働黨則ちナチスの誕生と共に始めて向ふべき政治的指標を得た。既成政黨の目標は革命前のドイツに歸ることであつた。ナチスはそんなことを以て満足しない。ナチスは現共和國を以て機械的で不都合な國家なりとなし、民族的な生きた國家を建設すべきことを主張し、之を目標として國民の協力を要請するのだ。

ナチスは救國濟民の大理想を有するものである。従つて此の理想を達する爲には奈何なる犠牲を拂つても惜しいとはせぬ。ナチスは弱いことを言つて居らぬ。對手が鎗を持つて來れば、こちらで鐵砲を持ち出して應戦するばかりだ。ナチスは立黨の日からさう肚をきめてかゝつた。

苟くもナチスにして民心を得んとせば、無抵抗などと氣の弱いことを云はず、對手がテロで來ればこちらで腕で之を防止するだけの勇氣を必要とすること當然である。之を古來の歴史に徴しても、一個の信念があつて、そこから現はれて來るテロは警察の力などで壓へされるものでない。信念から來るテロは同じく信念から來るテロでなければ打破ることは出來ぬ。詳言すればマルキシストが一つの信條を有し、それを護るにテロを以てすれば、こちらでもマルキシズムに勝る信條を掲げ、マルキシストに劣らぬテロを以て立ち向ふのだ。之より他にマルキシズムを征服する道はない。遺憾ながら政

府當局にはその邊の機微が判らないのだ。蓋し根柢のない暴力團なら警察の力で取締りが出来るけれども、信念又は信條から来るテロは力だけで外から之を抑へようとしても抑へきれぬものでない。之れは俺の私論でなく、古今の通論である。

ドイツはマルキシズムから最もひどくやられて居る國だ。ドイツは七十年の長い歳月に亘り、禁錮懲役その他あらゆる嚴罰を以て臨んで來たが、暴力だけでは畢竟マルキシズムを打ち破ることが出来なかつた。破れないどころか、とどのつまりはマルキシズムに降伏の外なきに至つた。既成政黨側ではそんなことはないといふ者もあるけれども事實だから仕方がない。

一九一八年十一月九日につぶれたドイツはマルキシズムに降伏したドイツである。降伏したドイツにマルキシズムを明日から克服する力はない。現に既成政黨出身の閣僚は労働者に背を向けて政治は出来ないといふ弱根を吐いて居る。彼等の云ふ労働者といふのはマルキシズムの労働者のことなんだ。彼等には労働者とマルキシストとの區別さへつかないのだ。

ドイツ國家は斯の如くにして今や完全にマルキシズムにやられて居る。ナチスがマルキシズムに對抗して、独自の國民主義を唱道し、同時にマルキシストの暴力に對して自らを護る突撃隊を持つに至つたのは此の爲である。

ナチス突撃隊の發生及び組織については、前にも少しく述べたことはあるが、突撃隊は同じく防護

團と云つても革命後に續出した他の防護團とは根本的に性質が異つて居る。

六、突撃隊と防護團

之も同じく前に述べたことだがドイツの防護團なるものには政治目標の惡るべきものがなかつた。彼等は自警團と稱すべきものであつて警察や軍隊の手傳くらゐは出来るだらうけれども、それ以上のことは出来なかつた。彼等のうちには軍隊的義勇團を以て自ら任じ、共和政府に對して反抗的態度を持して居たものも少くなかつたが、詮じつめたところ政府をわるくいふばかりで、之をどうして善いかといふ方策がなかつた。然りながら國民運動に必要なのは徒らに現状の墮落を罵るだけでは駄目だ。現状打破の後にはいかなる政治體制が打ち立てらるべきかにつき、はつきりした見透しがなければならぬ。多くの防護團にはそんな見透しを持つて居るものは一つもなかつた。

かくて一般防護團は革命の流に漂ひ、ある者は革命政府のかいらいのやうになるものさへあつた。然るにナチスの突撃隊だけは政府や警察の手先に利用されるやうなことなく、又革命と妥協するやうなことなく、始めから革命と闘ひ、新しい民族的國家の建設をめざして邁進した。こゝにナチス突撃隊の特色がある。

今でこそ大きなものになつて居るがナチスの突撃隊と云つても始めはつまらぬものであつた。反對派の奴が邪魔に來たら、それをひつぱり出し、ナチスの辯士に最後迄演説を続けさせる、それが突撃隊の第一の使命であつた。隊の者にはいつまでもこちらから攻勢に出て、敗けて居らぬやうに云ひ聞かせて置いた。而して彼等も亦どしどしやつたものだ。それだから當時國民黨陣營の政黨仲間でもナチスは亂暴だと言つて、批難したものもあるけれども、俺達だつて徒らに腕力を用ゐるものではない。之を古今東西の歴史に徴しても、志士仁人といはれる人間で暴徒の爲になぐり殺されたものが少くない。護るものを持つて居なかつたからだ。ナチスの理想は奈何に立派なものでも、黨首が叩き殺されたのでは目的が達せられぬ。突撃隊が腕力を避けなかつたのは腕力を重しとする爲でなく、反對黨の腕力から黨の人達を救ふ爲であつた。それ故に仕事は一面治安の維持にあつたけれども、警察や政府の手先となるを欲しなかつた。彼等は寧ろ警察を敵として戦ひ、國民を救ふを以て隊の使命なりと信じた。

ミュンヘンのホーフブロイハウスで開いた演説會場の活劇があつてから、當夜の奮闘を記念する意味で今までのナチスの警備隊は始めて突撃隊といふ名稱を有するに至つた。突撃隊はプロバガンダ班新聞班、調査班の如くナチス黨組織の一分科に過ぎないこと勿論である。

突撃隊の如き組織の奈何に必要であつたかは、あの夜のことであつたが、その後ミュンヘンばかりでなく、他の地方にもナチスの進出を見るに至つて、警備隊の有がたさが益々判つて來た。ナチスの勢威が次第に高まつて來ると、不安を感じたマルキシストはナチスの演説會がどこかで開かれるといふことを耳にすると、必ず妨害に來た。それに對抗する爲め我が突撃隊の出馬は止むを得ないことであつたが、心得難きは既成政黨側の態度である。彼等はいつでもマルキシストの妨害を受けて居るのだ。あるところでは妨害が恐くて演説をやめたところさへある。それにも係らずナチス側がやられると手を打つて欣んだものである。又自ら國民黨のものだと名乗る官吏、警官、甚しきに至りては内閣閣僚のうちにさへ、マルキシストとナチスとの衝突の場合には苟かに前者を助けたものがある。之もけしからぬことの一つである。

役所の人間のなかには、新聞でほめられるのが嬉しさに、部下に壓迫を加へてナチスに干渉させたものも少くなかつた。故ベーパー警視總監はそんな男共に窘められた一人である。併し斷じて屈しなかつた。俺は役人だがドイツ人だ、國の爲めにならぬことなら従ふことは出来ぬと云つて上役の命でもベーパーはねつけたものだ。一般の役人は唯だ政府の機嫌をとることに浮身をやつした。かくて此の種の輕佻な一部の官僚は次第に部下を腐敗させ、偶々硬骨漢が居ると文句をつけて首にした。而かも國民黨を標榜して居る官僚の中にこんなのが少くなかつたのだ。

之等共和政府の鼻息を伺ふに専らな役人がナチスを庇護するわけはない。又事實に於てナチスが警

官に護つてもらつたことは殆んどない。ナチスは黨の突撃隊を以て自らを護るの外なかつたのだ。

一一六

七、突撃隊の三つの方針

突撃隊を組織するに就て三つの方針が定められた。その一は隊員たるものは腕節を強くすること、その二はナチスの精神を體すること、第三は規律の嚴肅なことであつて、同時に他の防護團や秘密團體のやうなものになつてはならぬものとした。

突撃隊を他の防護團のやうなものにし度くなかつた理由は次の如くである。

當時の防護團中には自ら軍の一部たることを目的としたものがあつたけれども、實際問題として國家の補助なくして民間の團體が軍隊を組織するといふが如きは不可能なことである。民間の團體で軍隊が出来るのは己の力をはからざるものであつて、うぬ惚れの甚しきものであり、上からの権力がなく、仲間同志のディシプリンで軍隊的價值のある團體をつくり上げるが如きは、企てても及び難きことである。軍隊には上からの命令權のやうなものが背後にあつて、それで部下を御していけるけれども、寄り集りの民間の團體にはそれがない。一九一八年春頃の防護團乃至義勇團といふものの中には軍隊的訓練を経た歸還兵の集りであつたものもあり、その上仕事がそれ程のことではなかつたから暫らくは軍隊のやうな形を維持して居たけれども間もなく駄目になつた。

今日の義勇團又は防護團は内容が既に當時と異つて居るから、仲間同志で規律を勵行するといふやうなことがない。従つて團體が大きくなるに従ひ、規律がなくなり、團員の質も落ち、到底軍隊的の價值ある團體を組織することは出来ぬ。

言ふまでもなく國家の權力に依らず民間で壯丁を徴兵に仕立てようとしても、それは望のないことだ。今までとても兵は軍隊に居る間は黙つて服従するけれども、一度外へ出た者に軍隊に居た時と同じやうに服従しろと言つてもそれに従ふものは殆んど居るまい。況んや始めから民間の力だけで造る軍隊で服従を強制することは不可能だ。

次に國防を目的とする團體を作るには非常に巨額の費用を要するが、義勇團や防護團にはその費用がないから十分の教練を施すことが出来ぬ。而かも十分の教練がなければ團の存在は殆んど意味をなさぬのだ。世界大戰から既に八年を経過した今日、ドイツの壯丁は一度も軍隊に入つて組織的な教練を受けたものがないのだ。然らば既に軍隊に居たものだけを集めたらどうかと云へばそれも駄目なことは始めから判つて居る。一九一八年度の一番若い兵でも今後二十年も経てば兵として役に立たなくならう。而かも二十年の歲月は瞬くうらだ。果して然らば在郷兵だけで組織する防護團は勢役に立たぬ老兵會のやうになつて了ふのは當然のことである。ところで役に立たぬ老兵を集めるのが唯一の目的であればそれでも善いが、苟くも國防團とか義勇團とかいふ以上は、老兵の集團で満足することな

一一七

く、新たに元氣な兵士を養成しなければならぬ。それが出来なければ無意味だ。

一一八

民間の防護團が本當の働きをする爲には、未だ嘗て訓練を受けたことのない之からの壯丁に軍事教育を施す必要があるのだが、それが實際不可能なんだ。今日の防護團だつて訓練をしない譯でもないが、一週に一時間や二時間の教練では兵を作り上げることは出来ぬ。當今は軍隊のことも六ヶ敷くなくつて居るから、普通の兵に仕上げるだけでも、軍隊に入れて二年間は叩き上げる必要がある。それになければ役に立たぬ。軍隊教育を受けて居ない若い義勇兵がどんな目にあつたかは、俺達の親しく目睹したところだ。十五週間乃至二十週間の教練を受けて戦場に出た義勇兵部隊は、大砲の袼になつて、ばた／＼と倒れて行くばかりであつた。之に反して同じく四ヶ月乃至半年の教練でも、古參兵の仲間へ入れられ、それに指導されて居た若い兵は相當な働きをなし、そのうちいつのまにか立派な兵になつていつた。

兵は訓練が第一だ。

かくて民間の軍隊の組織には強權と金が必要である。それがなくて一週一二時間の訓練で精銳の軍隊を作り上げようといふのは寧ろ無謀の舉である。老兵はそれでいくらか若返るかも知れぬが、壯丁を兵に仕立て上げることは出来ぬ。

防護團を軍隊に仕上げようとしても、勞して功のないことは他の方面に於ても之を見ることが出来

る。則ち今こゝに民間の團體があつて數千の人間を集めて懸命に國防思想を鼓吹してみたところで、一方に國家自らが平和愛好の思想を國民に吹き込み、デモクラシー尊重の教育を子弟に推奨し、數百萬の同胞が日に月に懦弱となり、愛國思想がなくなつて行く今日では、團體の努力は畢竟無駄な骨折だ。之も亦考へねばならぬことでないか。

そればかりでない。俺が防護團の組織に反對なのはもう一つ理由がある。今假りに以上の障礙を排して、毎年民間で壯丁を徴して訓練を施し、之に國家思想を鼓吹し、身體を鍛へ、武器操縦を教へ、一人前の兵に仕上げることが出来るとしても、國民皆兵主義を欣ばざるばかりでなく、反つて之を邪魔もの視する政府が上にあつては、努力して兵士を作つても殆んど用をなさぬであらう。民間のものが奈何に心を砕いても、政府が軍隊を問題にせず、軍隊が政府の傭兵のやうでは、民間の防護團編成運動はものになる筈がない。

ところでドイツの今の政府は國防などに心がけないのだ。ドイツの世界戦争で動員した兵は八百五十萬に上つて居る。その軍隊を置き去りにして、お拂ひ箱にした上に、散々に罵倒したのは今の政府ではないか。そんな軍隊嫌ひな政府の下にあつて二、三萬の人間に軍隊教練を施して見たとて役に立たうとはどうしても考へられない。今の政府は名譽あるドイツの軍隊を罵倒し、兵士をして胸間の勳章をとらしめ、肩章をもぎとり、軍旗を足蹴にさせた政府でないか。そんな政府の爲めに軍隊を再建せ

一一九

んと努力するのは惑へるの甚しきものだ。政府は嘗て軍隊を搦亂し破壊した叛亂の張本人を捕へて之處罰せんとしたことが一度でもあるか。あつたかも知れぬが俺達は聴いたことがない。單り處分せざるばかりでなく、軍隊破壊の張本人は今や臺閣の高きに居りてのさばつて居るではないか。民間で防備隊を造るのは唯だ政府の奔狗になるやうなものだ。

革命は叛逆であり、ドイツ歴史の汚點となつたものである。而かも今の共和政府の大官はその元兇である。此の如き政府の下に民間で軍隊を組織しても偶々以て彼等に利用されるばかりだ。國民は彼等の番犬になるべき義務はない。

ところで共和政府の一時防護團を被護したのは、自己の地位を擁護せんが爲であつて、眞に之を以て軍隊の基礎とする考のなかつたことは、當時稍々勢力のあつた防護團に對する態度を見れば明かである。則ち民間の防護團が怯懦にして臆病な革命領袖の用心棒たる役をつとめた間はこれを歡迎したが、その後國民のうちにも、漸く意氣があつて政府の要人を襲はうとするものもなくなり、危險が亡くなると同時に、防護團が漸く共和政府のやり口に嫌らず、その運動が國民主義的傾向を帶ぶるに至り邪魔になつて來ると、政府はあらゆる手段を以て壓迫を加へ、屈伏せざるものには命令を下して、解散させたものである。

③ 古來の歴史を通觀しても、狡兎盡きて走狗煮らるるで、軍はいつも利用されるばかりである。用がな

① くなれば弊屣のやうに捨て去られて顧られないのが利用される者の運命だ。共和政府の人々は國民をひどい目にあはせ、國を賣つた惡漢である。王侯といふものさへ都合の善い時は利用し、都合がわるくなれば捨て去るのが軍隊だ。況んや賣國の兇漢どもが困つた時に己を擁護した防護團をいつまでも大切に置いて置く道理がない。用がすんだらお排箱にするのに不思議はない。それ故に防護團を組織するとすれば、豫め誰の用に供し、奈何なる目的を有し、又奈何なる場合に之を使用すべきやを吟味する必要がある。之を明かにすればナチスの此の問題について執るべき方針も自ら決着がつくわけだ。

② 今假りに防護團が漸次態勢を整へ、力あるものになり、共和政府が之を頼みとするやうなことになるとなれば、それは決して外に對して用ゐやうとするのでない。國民は今こそ知らずに居るが、共和政府は國を賣つたのだ。それ故に他日國民が欺かれ、賣られたことを知つたら、黙つて居らぬ。必ずや起つて革命の首謀者を糾弾するに至ること疑はれぬ。政府にとりてそれが一番恐いのだ。政府が防護團を庇護したのは、そんな場合防護團を利用して國民の不平を抑壓する肚であつたのだ。

④ 我が突撃隊が他の軍事的防護團と同じやうなものにならないのは、此に見るところがあつたからである。突撃隊はどこまでも、ナチスの用心棒であり、ナチスの教育機關であつて、政府の防護團でな

八、秘密結社を排す

我等は又突撃隊を秘密結社とすることにも反対であつた。秘密結社となれば公けの活動は出来ないから、勢ひ自ら大きなものになれないばかりでなく、ドイツ人はおしやべりだから、結社の組織がいくらか大きくなると、すぐと外に洩れて了ふ。秘密結社を造る以上、他へ知らせてはならぬ機密の目的がなければならぬ。之はどこまでも秘密にされて居なくてはならない筈のものが、それが守り通されることは殆んど望みがない。ユダは三十志で師のキリストを賣つた。ドイツの警察當局はいかたしい輩を寄せ集め之を手先に使つて居る。ドイツにもユダはそこらにうよ／＼して居るから、同志の者と雖も心が許せない。假りにユダでなく、同志を賣る心がなくても警察で調べられると、すぐに口を破つて了ふのがドイツ人だ。之れ亦止むを得ないことも知れぬ。

どんなに責められても白狀をしない強情なものではないが、それは至つて数が少ない。ところでナチスの運動は人間が少くは駄目なんだ。ナチスの必要とするところは百や二百の壯士を有することなくて、數十萬の熱狂的闘士がナチスの主義主張に殉じて悔ゆるを知らないことである。俺達はその／＼と蔭で働くのでなく大つびらに行列を造つて運動するのだ。ナチスの前途を開拓するのは短剣でなく、毒殺でなく、ピストルでもなくて街頭の支配である。ナチスは他日天下を執るであ

らう如く、街頭の勢力もいつかはナチスの手に歸するに相違ない。マルキシストはそれを覺悟せねばなるまい。

秘密結社には又次の危険がある。則ち秘密結社に依りて活動する時は、肝腎の運動の使命を忘れ、暗殺に依つて一舉に目的を達せんとするに至ることである。暗殺必ずしもわるくはない。上に立つて國民を苦しめて居る者が一人の奸雄であり、それさへ倒せば、救はれることの明かな場合には、民衆のうちから義に勇む一人の志士が起つて壓制者の胸に劍を擬し、倒して了へば國民は救はれる。テルの戯曲が欣ばれるのもこの爲である。刺客必ずしもわるくない。之を二も二もなく排斥するのは己れの身に危険を感ずる卑怯な連中ばかりだ。

一九一九年から二〇年に亘り、限りなき國家の屈辱を憤り、刺客の傳記に刺戟せられた秘密結社の同志中、國家の奸賊を除かんとして暗殺の舉に出たものが屢々あつた。二三の元兇をさへ片づけて了へば明日からでも國家の立直りが出来ると考へたのだ。然りながらそれは考へ違だ。若しマルキシズムの勢力が頭が善くて肚のある一人の男の働きに由るものなら、その男さへ葬つて了へば目的が達せられるわけだが、マルキシズムの猖獗を極めるのはさうでなくて、マルキシストが強いのでなくて國民が意氣地のない爲なんだ。革命と云へばこの國でも相當の人物を出現させるものだが、ドイツでは革命の主謀者といふ者のうちに、ろくなものは居ない。何れもとるに足らぬ斗筭の輩ばかりであ

二四
る。而かも國民はそんなものの前に屈服したのである。之れ寧ろドイツ國民の恥である。若し革命の
立役者がロベスピエール、ダントン、マラーのやうな怪物であつたら、國民が頭を垂れて嵐の過ぎるの
を待つたとしても無理はない。

シャイデマンやエルツベルグや、フリードリッヒ・エーベルト以下ドイツ革命の主役は齒牙にかけ
る程もないだらぬ奴ばかりでないか。そんなものにひき廻されて言ひなり次第になるとは何事ぞや
だ。實際ドイツの革命を見ても革命の天才でその男がのさばつて居る限り國民は頭が上がりぬといふ
程の氣の利いた人間は一人も居ない。何れもコン泥のやうな奴等ばかりだ。従つてそんなものを二人
二人除いて見たところで何の役にも立たぬ。彼等のなかには仲間の椅子の空くのを待つて居るものが
うよ／＼して居るのだ。仲間が暗殺でもされたらそれを待つて居たとばかりに空いた椅子に乗り込ま
うとして居るのだ。暗殺はそんな連中のお手傳みたやうなものだ。俺はドイツの若者がテルになつて
奸賊をねらふことにはどこまでも反對である。

且つ國を賣つた國賊を一掃するに際しても考へねばならぬことがある。ドイツは世界大戰に於て二
百萬の戦死者と數百萬の負傷兵とを出した。而してドイツの破れたのは、一部賣國奴の陰謀に依るの
である。國民としては先づそれ等徒輩を擧げて葬り去るべきである。然るに國を賣つた奸賊は臺閣に
列して涼しい顔をして居るのである。

①
之を不問に附して置いて、コン泥のやうなものを追ひ廻はしたとて何の役に立たう。役に立たない
ばかりでなく、それが爲めにあたら青年を見殺しにせねばならなくなることも屢々である。何となれ
ば祖國の爲めと思つても人間一人殺せば處刑を免かれぬからである。殺される奴はつまらぬ人間であ
り、刺客となつて殺した青年は貴き愛國者である。賣國奴のはしくれのつまらぬ命と愛國者の貴い命
とをとり換へつことは誠に惜しいことだ。そこで次のやうな問題が起つて来る。

則ちナチス自ら手を下さざるも他の者を使嚇してやつつけさせた方が善いではないかといふのだ。
併しそんな役目をするやうな人間にろくなものはないから、うまくいくかどうか判らぬし、うまくい
つても先へいつて反つてこちらを裏切るやうなことを平氣でやるから、どちらにしてもあてにならない
愛國の正直な青年にやらせれば片附けることは確かだが、その青年を犠牲にしなければならぬこと
になる。それ故に、どちらにしてもとるに足らぬ姦賊の末輩を、劍やピストルでつけねらふのは賢明
でない。

國を賣つた大物の國賊は暫らくのさばらせて置いた方が善い。他日俺達の天下になつたら國民裁判
を設け、十一月革命に従事した數萬人の奴等を一時に檢擧し、罪を糺して一とまとめに死刑にすれば
善い。大きな奴等を處分すれば他のものは問はずして可なりだ。

俺の考は右のやうなものであつたから、他に秘密結社があつてもそれに關係するなど云つて突撃隊

の連中を固く警めて置た。單り他の結社に關係しないばかりでなく、突撃隊自らも秘密結社のやうなものになつてはならぬと誡めた。當時國の姦物をねらつて暗殺を企てた人達は何れも純な愛國の青年であつて、その志は稱するに餘りあるけれども、徒らに身を犠牲に供するだけで、毫も國家の大局に益するところがなかつた。俺は突撃隊をして之等の壯士の眞似をさせ度くなかつたのだ。

九、突撃隊の本質及活動

叔で防護團にもせず、又秘密結社にもしないとすれば、突撃隊の組織は次のやうなものになるより他はないことになる。

一、突撃隊は軍教を目的とせず、ナチス黨の教化を目的とすること
何れ事をなすにしても身體の鍛錬を疎かにすることは出来ぬが、既に軍隊に仕立てるのが目的でないとするれば、突撃隊員の肉體鍛錬も軍教を主とせずして寧ろスポーツに置くべきこと之れ亦當然のことである。生半可な射撃よりも拳闘柔術がどんなに役立つか判らない。今スポーツで身體を鍛へ、祖國愛に燃え、而して攻撃精神の活潑な人間を六百萬人も作れば、それらの者から立派な國民的國家が生れ出るであらうし、それらの者が團結すればそれから二年と経たぬうちに大きな軍隊に造り上げることも困難でない。ところで現在の狀態では、その基本となるべき軍隊は則ち國衛軍を措いて他にな

く、中途半端な民間の防護團では役に立たないのだ。そんなものを造らなくとも平素身體を鍛へ腕に覚えさへあれば戦場へ出ても驚かないし、事なき時はナチスの用心棒にもなれるといふものだ。

二、突撃隊は秘密的なものであつてはならぬこと再三述べた通りである

ところで秘密結社のやうなものにならねば爲めには、一見して誰の目にもすぐ判るやうな服裝をさせて置くことも必要であるが、隊の威容がいつでも公衆の前に明かにされて居ることも缺くべからざる大事な事だ。突撃隊は隠れ家のやうなところで集會せず屋外の下で行進し、行動を公明にし、少しでも秘密結社であるやうな噂を立ててはならぬ。同時に突撃隊員にはナチスの主義理想を深く頭に叩き込むことが最も必要だ。之は突撃隊を邪路に陥れぬ大事な手段である。隊員はナチスの思想に没入すれば黨の目標とする民族的國家の建設に向つて傍目もふらず邁進し、末輩の暗殺などに浮身をやつすやうなことを爲なくなる。

現今の政府を對手とし、當路の要人をねらふが如きは抑も末である。我等の敵はマルキシズムとその陰謀團とである。

三、突撃隊の組織、服裝及び武裝は舊軍隊を範とせず、ナチスの使命を斟酌したものであること

以上は突撃隊の組織について俺の久しく考へて居たところである。而して一九二〇、二一の兩年に亘り、熱心に説いた結果、三つの件は何れも實行され、一九二二年夏には百人一組の突撃隊が既に多

数出来上り、同年秋には隊員が揃の服装をつけるやうになつた。突撃隊はかくて日を遡うて大きくなつたが、それについて忘るべからざる三つの大きな事件があつた。

一二八

一〇、コーブルグの大活劇

(一) 一九二二年の夏も終らんとする頃、ミュンヘンの右翼諸派聯盟は、ケーニヒスブラッに於て共和擁護法反對の大示威運動をやつた。

ミュンヘンの右翼聯盟は共和擁護法に對して各派聯合の反對的示威運動を起さんことを提議し、機を飛ばして同志の蹴起を促がした。而してナチスもそれに參加することとなつた。ナチスの行列は百人組の突撃隊六部隊を先頭に立て、政治部の諸班がそれに續いた。行列には二つの樂隊が混り、十五本の旗が風にひるがへつた。會場の廣場はまだ半分ばかりしか人が集まつて居なかつたけれども、行列が繰りこみ、いつも旗の立つたことない廣場にナチスの旗のひるがへつた時、群集は注目して之を観た。そのうち次第に人が集まり、廣場の群集は六萬人餘りとなり、俺も亦ナチスの代表として演説をやることになつた。

これまで街頭の示威運動と云へばいつも赤に極まつて居たものだ。然るに當日は赤の妨害があつたに係らず、ナチスは之を排して、街頭の示威運動を遂行した。こんなことはミュンヘンでは始めての

ことであり、一同は頗る氣を強くした。而かもそれは全くナチスの用心棒たる突撃隊の働きに由つたものである。突撃隊はテロに依つて行列の妨害を試みた赤の暴力團を袋叩きにして追ひ散らした。而して此の時以來ナチスは赤の諸黨に對抗して堂々街頭の示威運動をなすやうになつたのである。

當日の出来榮に依つて突撃隊の必要なきことが愈々明かになり——又その體制も精神も亦同じく宜しきを得たものであつたことが立證された。

突撃隊は此の日の成績に鑑み、數週間を出でして百人組の組の數が二倍に増加された。

(二) 第二は一九二二年十月のコーブルグ行である。

當時コーブルグの右翼聯盟はドイツ・デーを開催することになり、俺にも列席してくれないかと申込んで來た。その招請狀には何人でも隨員をつれて來て善いと書いてあつた。招請狀を受取つたのは午前の十一時であつたから直ぐに手配をなし、一時間後には既に手配がなつた。俺はその「何人でも」の隨員として八百人の突撃隊員を率ゐて行くこととし、それを十四の組に、特別列車を仕立ててもらつてミュンヘンから出發し、既に結成されて居た沿線各地の黨員にも、途中で落ち合ふやうに指令を發して置いた。

ドイツでこんな特別列車を出したのは此の時が始めてである。途中汽車が停つて黨員が續々乗り込んで來るところでは、人々は目をみはつた。中にはナチスの旗を始めて見たものもあるくらゐだから

一二九

騒ぎは一通りでなかった。

コーブルグの停車場へ着くと、ドイツ・デーの代表者が迎へに來、彼地の労働組合と云つても事實は獨立社會黨及び共產黨と右翼諸派との間に締結された協定だと云つて次のやうな協定を交渉した。それに依るとナチスは町へ入つても旗をかざしたり、樂隊ではやしたてたり（俺は二十四人一組の樂隊を連れて居つた）、或は又列を作つて街頭を行進してはならぬといふのである。

世のなかになんかふざけた協定などあるものでない。俺は即座に之を退け、迎の代表に共產黨などこんな協定を結ぶことからして怪しからぬ。俺達は突撃隊を組に分け隊をなし、旗を立て、樂隊ではやしたて、行列を造つて行進するからさう思つてくれと言ひ渡した。而して又俺達は俺達の云つた通りにやつた。

驛前の廣場に出ると、もう數千の赤い連中が人殺し、泥坊、かたり、匪賊といふやうなあらゆる汚い叫びを俺達の上に浴せかけた。之れが共和國の建設を自慢にする人達だからあきれざるを得ぬ。突撃隊は廣場で隊形を整へ、整然たる態度を保つて、何を云はれても對手にならなかつた。そのうちに警官がやつて來て會場へつれて行つたが、俺達が町の様子を知らないのを善いことにし、連れて行つたところは町の中心に近いホーフブローハウスで、所定の場所とは凡そ方角の違つたところであつた。人を馬鹿にしたものだ。その間も睨いて來た暴徒の罵聲は列の進むに従つて甚しくなり、ホーフブロー

ハウスの前庭へ入ると、耳を聳するばかりの叫喚の嵐をたてて、暴徒もともになかへ入らうと群ゐいた。警官はそれを遮つて入口を閉めたが、騒ぎが甚しくなるばかりでたまらなかつたから、我等の方から外へ出して行進を続けさせてくれと言つて警官に談判し漸くにして許可を得た。

外へ出た俺達は復びもと來た途へ引き返し、俺達の席ときめてあつた本當の場所へ行進して行つたが、とう／＼そこで暴徒と正面衝突を惹起することになつた。暴徒はいくら惡口雜言しても俺達が受けないのをみると、平素社會主義だの平等博愛などと綺麗な口を利いて居る赤の暴徒は石をとつて投げつけ始めた。かうなつてはいかなる突撃隊でも堪忍袋の緒を切らざるを得ない。直ちに應戦して十分間も恐ろしいなぐり合を始め、一時は懐しい光景を演出したが十五分も経つと街上又一人の赤の姿も見えなくなつた。皆逃げ去つたのだ。

晝はそれですんだが夜の騒ぎはもつとひどかつた。外へ出たナチス黨員はあちらこちらで襲はれ、慘酷な目にあつた。之に憤慨した隊員は遠慮會釋もなく、暴徒の間に突進し片づばしからやつつけて終ひ、夜の明ける頃には數年來町を悩まして居たテロの赤も立ち上がる力をなくして居た。

凡そ世の中にマルキシスト、ジューの如く姦諂にして恥を知らざるものはない。突撃隊に散々やつつけられた赤の暴徒は黒を白とし、鷲を鳥とし、事實を歪曲してナチスを入殺しの惡漢と呼び、ナチスはコーブルグの罪なき労働者を殺戮しに來たのだと言つて「インタナショナル・プロレタリアート」

の男女に街頭に出てナチスに應戦せよと叫んだ。赤の示威運動は午後一時半に開始され、地方の労働者をも駆り集め、人数は数萬に達するといふことであつた。そこで俺は赤の奴等を今度こそ徹底的に叩きつける積りで十二時に突撃隊を率ゐてドイツ・デーの會場へ出かけた。此の時突撃隊の人数は千五百人ばかりの部隊となつて居た。俺は殊更に赤の示威運動の行はるる廣場を通り抜けて行くことにした。奴等にとびかゝるだけの勇氣が残つて居るかどうかを試みてみたかつたのだ。廣場についてみると、數萬人といふ掛聲であつたに係らず、並んで居るものは僅かに二、三百人の少數に過ぎなかつた。傍を通つても固くなつて動かず、中には逸早く逃げ腰のものさへあつた。唯だ一、二ヶ所急に驅り集められて來た他所の労働者で、まだナチスの手並を知らない奴等は手出しをしたけれども、それも瞬く間に押し伏せられて了つた。コープブルグの市民はこれまで赤のテロにびびえて聲もたてなかつたものであるが、今やナチスがわけもなく叩きつけたのを見ると急に元氣になり、俺達が通ると萬歳と呼ぶものさへあり、式が終つて引上げる頃にはあちらにもこちらにも、ナチスに向つて歡呼の聲が擧げられた。

驛につくと驛員は列車を出さぬと云ひ出した。そこで俺は運轉を拒む従業員に次の通告を發した。運轉しないなら、それでも善いが、その代り赤の奴等をつかまへて機關車にも客車にも二、三十人宛同乗させ、俺達の手で列車を出すからさう思へ、最も經驗のない者が運轉するのだから、首尾善く行

けば善し、いかなければ轉覆して、俺達は一人殘らずあの世へ行くのだが、さうなれば同乗の赤の連中も途連れだ。それも君達のいふ平等博愛の義になつてわるくなからう。それが承知なら列車を出さぬと頑張るも善からうといふのである。

此の通告にふるへたものか、驛員は列車を出した。而して一行は、翌朝勝ち誇つてミュンヘンへ着いた。

一九一四年以來コープブルグの市民は赤の前に縮み上がつて居たものである。法律は平等といふけれどもコープブルグでは赤が威張つて一般市民が小さくなつて居たのである。ナチスは此の行に依り始めて市民の平等をとり返してやつたとも云へる。

ナチスのコープブルグ行は非常な收穫をもたらした。突撃隊は腕に自信を持つやうになつた、それが一つ。今まで馬鹿にして居た世間が、始めて眞面目にナチスを研究するやうになつた、之れが一つ。將來マルキシズムを撲滅する者はナチスの他にあるまいとの認識を持つものが多くなつた、之れが一つ。コープブルグ行はナチス運動發達史に於て看却されてはならぬ出来事であつた。

市民は今迄赤の者に頭を打たれても黙つて居たものだ。稍氣概のある者でも口先で抗辯するくらゐで多く泣寝入になつたものだ。俺達は黙つて居なかつた。腕でやつて來たからこちらも腕と棍棒で對手をしただけだ。それでも所謂デモクラシーの連中は共和の治世にあるまじき亂暴だと言つて溜息

を吐いた。

一三四

右翼の新聞に至つてはいつもの如くだらしなない態度であつた。コーブルグだけでも赤に鐵槌を下したのはナチスの手柄だと言つてほめたものは僅かに二、三の新聞のみであつた。

コーブルグの労働者は突撃隊の勇放な働きを見て始めてナチスの奈何なるものであるかを知つた。何となれば内に深く信ずるもの、愛するものがなければ、腕に訴へても争ふ程の氣力はないものだ。彼等は始めてナチスの労働者が信念の爲めに闘ふものであることを悟つたのだが、無論之等のナチスに共鳴した労働者は心からのマルキシストでなく、だまされて居たものであつたのだ。

然りながらコーブルグの事件で一番黨の爲めになつたことは、突撃隊が俄かに大きくなつたことである。一九二三年一月廿七日の黨大會に参列した隊員は六千人に達し、始めからの隊員は悉く制服をつけて居るやうになつた。

制服は隊員の協同観念を高めるの利益がある。制服をつけて居なければ隊員同士でも一つに居て互に知らぬことがあり、人違をされたりする虞がある。そんなことのないやうにするにはどうしても制服が必要だ。之もコーブルグの経験で一層痛切に感ぜられたことで、今まで腕章だけで區別されて居た隊員は、必ず正規の上衣と帽子とを着けることになつた。

ドイツの都邑では數年來赤のテロが跋扈して赤に反對の集會が全然出來ないところがあつた。俺達

はその後そんなところを選んで出かけて行き、赤の暴力を封じて一般集會の自由を確保することになつた。之もコーブルグでの收獲の賜である。今でもナチスは赤の威張つて居る地方へ突撃隊を遠征させて居るが、成績頗る良好で、ナチスに心を寄せて來る町が日を逐うて多くなつて來る。突撃隊は防護團のやうなつまらぬものにならず、新ドイツ建設の活潑な闘争機關として有意義な働をなすに至つた。

かくて突撃隊は一九二三年三月までそのまゝで進んで行つた。ところが三月に又新しい一つの事件が起り、隊はこれまでの體制を變更せざるを得なくなつた。

(三)、一九二三年春の佛軍のルール占領は突撃隊にも多大の影響を及ぼした。このことに就て述べたいことは澤山あるが、話をしたり、書いたりすることは今尚ほ國家の利益でないから、こゝでは既に世間で論議された範圍にとどめる。

ルール占領は俺達にとりて豫期しないことではなかつた。それ故に佛兵がルールへ入つたと聞いた時、俺達は今度こそは怯懦な政府でも譲歩一點張の軟弱外交を放棄すべく、防護團にとりても又當さに奮起の秋が到來したものだと思つた。突撃隊は此の時既に若い元氣な者が數千人も集まつて居たから、無論それに参加する考で、一九二三年の春から夏にかけて、内部の組織を變更し、之を軍隊的なものに改造した。一九二三年の突撃隊が一個の軍隊であつたのはかゝる理由によるものである。

一三五

一三六
當時の情勢は他のところで述べるから、詳しいことは言はないが、突撃隊の改造は右の如く佛兵と一戦を交へるつもりでなされたものであつたが、政府が意氣地なく、屁古垂れて、またしても聯合國へ屈伏して丁つたから、折角の改造も役に立たなかつたばかりでなく、ナチスとしてはつまらぬ目に逢つたといふことになつた。

然りながらドイツ政府の屈伏は國家の大局から見ても悲しむべきことであつたけれども、それと共に突撃隊の軍隊的改造も中止となつたことはナチスにとりて寧ろ幸であつた。

一九二五年ナチスは突撃隊の組織をもとに返し、専ら黨の用心棒たる役に復せしめた。突撃隊はどこまでも黨と國民思想との擁護機關たるべく、斷じて防護團にも秘密結社にもなつてはならぬのだ。

第十章 聯邦分權主義の卷

一、南北ドイツの對立

一九一九年の冬から翌一九二〇年の春と夏にかけて一つの主要な國家問題に就て、黨議を決定しなければならなかつた。抑もこの問題たるやドイツとしては戦後になつて騒ぐやうなことなく、既に戦争中にも解決されて居なければならぬ緊切な問題であつたのだ。南ドイツと北ドイツとは昔から對立の傾向があつた。而して英佛は此の對立を利用し、惡辣な宣傳によつてドイツの崩壊を企圖し、漸次その目的を達しつゝあつた始末は簡單ながら前にも既に述べた通りである。聯合國はプロシヤをもつて開戦の唯一の責任者なりとなし、始めてプロシヤ打倒の宣傳ビラをドイツ軍の中へ撒布したのは一九一五年の春で、一九一六年には打倒プロシヤの宣傳は頗る巧妙なものになつて居た。この宣傳は北ドイツ人に對する南ドイツ人の反感を利用したものであるが、その宣傳は幾許もなくして各方面に利き始めた。然ればドイツとしては之を放任すべきでなく、豫め斷乎たる對策を講じて敵に乗ずるの機會を與へぬやうにするのが當然であつた。然るにも係らず之を等閑に附して顧みなかつたのは政府ばかりでなく、軍としても大きな手ぬかりであつた。軍と云つてもこゝでは特にバイエルンの軍部の責

任が大きいのである。かくて政府も軍部も無頓着であるばかりでなく、或る方面では反プロシヤ宣傳の行はるるのを心算かに欣んで居たものさへあるのは遺憾千萬であつた。之等の人々はプロシヤが單り強くなると、ドイツの聯邦制度が覆滅するに至ることを虞れたのである。誠にあさはかな短見である。短見は必ず後に悔を伴ふものである。而かも反プロシヤの短見の如く禍害のてきめんであつた例は、史上殆んど稀だと云つても善からう。本來プロシヤ排擠に熱心であつた人々は、プロシヤが憎いといふよりもプロシヤの勢力増大に依り聯邦制度の崩壊するに至ることを虞れたのであつた。此を以て彼等は百万プロシヤの力を削ぐに力めたのであるが、プロシヤの崩壊は彼等のどこまでも維持せんとした聯邦そのものの崩壊となつたのは皮肉である。

聯邦のうちでプロシヤ排擠に最も力を用ゐたものはバイエルンであつた。而かも革命と共に第一に倒壊したものも亦バイエルンの王室であつた。

二、戰時會社の横暴

かくてアンチプロシヤの氣勢を強めたのは英佛の惡宣傳ばかりではなく、當時國內はプロシヤ排斥熱を煽る他の原因も少からずあつたのである。戦争の進展につれてドイツでは戰時經濟體制が採用され、戰時會社なるものが設けられた。而して戰時會社はベルリンを中心として各聯邦に對して煩鎖な

干渉をなしたものである。戰時會社は殆んど聯邦の經濟をも支配するに至つたのであつて、アンチプロシヤの運動はこんなところからも芽を出したのである。蓋し戰時會社は何れも本店をベルリンに置いて居たから、物のわからぬものは戰時會社と云へばベルリンを聯想し、ベルリンと云へばプロシヤを聯想し、戰時會社とベルリンを又ベルリンとプロシヤとを二つのものでなく、一つのものと考へたものだ。ところが、戰時會社なるものは名はどうあらうと、實は不當利得を旨とする泥坊會社であつて、幹部はベルリン人でもなく、プロシヤ人でもなく、又ドイツ人でもなかつたのだが、それが一般人に判らなかつた。それ故にベルリンの戰時會社が不都合なことをやり、聯邦に對してまで無用な干渉を試み、民衆の不平不満が勃發するに及び一般の憤りは會社に向けられるよりも、ベルリンとプロシヤとに向けられるものが多かつた。之は間違つたことであつて、責任の地位にある者は直ちにその誤解を解くべきであつたに係らず、一部ではベルリンとプロシヤがこんなことで怨嗟的となるのを反つて翫かに欣んだ。

戰時會社の黒幕はジューである。ジューは戰時會社なる美名の下に隠れてドイツ國民を搾取せんとしたのである。既に國民の搾取機關である以上、戰時會社が國民の憤懣を買ふに至るべきは當然であつて毫も疑を容れぬ。それ程のことの判らぬジューではない。唯だ彼等としては搾取するだけ搾取して、民衆の不滿を抑へきれない程度に達すれば、罪を他に轉嫁して自ら免るれば善いと高を括つて居

ただけなんだ。

此の時に當りバイエルンがプロシヤと相搏ち、プロシヤがバイエルンと相搏つのは勿怪の幸だ。ジューは唯だその相搏つことの甚しからざるを恐れるばかりだ。巴、普兩國の争はジューの利である。かくて一般國民は、バイエルンとプロシヤとの反目にのみ目を注いでジューの陰謀を忘れて了つた。此の間バイエルンでも一部の者は、プロシヤと反目を續けることの大きな禍なることを説くものがあった。而かも之等のものが兩國の緊密なる提携を力説して民衆がいくらかでも耳を傾けさうになると、ジューはあわてて、アンチプロシヤの氣勢煽揚に馬力をかけ、兩者の接近を極力妨げるのであつた。

三、クルト・アイスネルの陰謀

ジューの陰謀は單りプロシヤ對バイエルンの對立に止まらなかつた。總ての聯邦をして互に争はしめようとするのがジューの計畫であつた。而してその手段の巧妙なるは驚くの他なかつた。かくしてゐるうちに愈々ドイツの革命が來た。

一般のドイツ人殊に勞働者は、バイエルンとプロシヤとが内に於て争ふことの奈何なる禍害を國家の上にもたらすかを悟らなかつた。殊にバイエルンではそこに氣のつくものが少かつた。併し一般の大衆及び勞働者はそれで善いとして、バイエルンでも國民主義と稱せらるる政治家にして、それを悟

る者のなかつたのは怪しからぬことだ。蓋しインタナショナルで無宿者のクルト・アイスネルがバイエルンで革命を起し、それが成功したのもバイエルンの聯邦割據主義を利用した爲に他ならぬ。アイスネルは新聞記者時代から聯邦分權主義を鼓吹し、殊に己れがバイエルンの味方であることを標榜して巴、普兩國の離間運動を續けたものである。従つて革命成就と共に、彼のとつた最初の政策はバイエルンとプロシヤとの抗争を益々激化せしめ、同時にバイエルンを爾餘のドイツより引離すことであつた。而して彼は之を以て己れがバイエルンの爲めに働くものだと思ひ、安んぞ知らん、バイエルンの存亡興廢の如きは始めから彼の眼中になかつたのは云ふまでもない。

アイスネルがバイエルンを他のドイツ諸州より引き離さんとしたのはバイエルンの爲めではなくてジューの爲めであつた。彼は一味ジューの陰謀の手先として先づバイエルンをドイツに叛かせたのである。然りながら間隙のないところに乗ずる機會がない。アイスネルがバイエルンで成功したのはバイエルン人が昔からプロシヤに對し、善い感じを持つて居なかつた爲であつて、要するに、バイエルンの割據主義がわるかつたといふことに歸着する。アイスネルはバイエルンの割據主義を利用してドイツを破壊し、ドイツを破壊してボルシェウィズムを打ち建てようとしたのである。聯邦割據主義はこんなところで國家に恐ろしい災害を與へるのだ。

そのうちアイスネルは倒れたが彼の用ゐたタクチックは死んでからも繼續された。則ち今まで聯邦

や聯邦の王侯を目の敵にして居た社民黨一部の過激分子は、國內を擾亂する手段として俄かに聯邦の割據主義を支持し始めた。社會獨立黨が則ちそれである。

バイエルンにマルキシズムのソウイエツト政府が樹立され、征討に向つた軍隊が國境に近づいた時獨立黨は之を以てプロシヤがバイエルンを伐ちに來たものだと呼び、戦はプロシヤのミリタリズム對バイエルン勞働大衆の争になつたと云つて、バイエルン市民の割據主義をいやが上にも煽つたものである。此の時ソウイエツト政府の組織されたのはバイエルンばかりでなく、他の聯邦でも赤となつたものが多かつた。而かも之等の國では市民は概ね中央から來る征討軍を歓迎したものであるが、單りバイエルンだけは勞働者ばかりでなく、一般市民まで歓迎するどころか、反つて甚しく憤慨したものだ。而して之れ専ら獨立黨がバイエルン人の割據主義を煽り立てた結果である。

バイエルン・ソウイエツト政府倒壊後に於てもボルシエウイズムの勢力は毫も衰へずして益々大を加ふるのみであつた。則ちクルト・アイスネルの存命中と雖もバイエルン議會の選舉では共產黨の得票は一萬を出なかつたものであるが、ソウイエツト政府倒壊後に於ては之まで三千票にも達しなかつた獨立黨が大躍進をなし、共產、獨立兩黨併せて赤の得票は、一躍十萬を突破するに至つた。之れ亦赤の人々がバイエルン人の聯邦主義を利用せる爲であつて、彼等はバイエルンは本來アンチ・ミリタリズムであり、アンチ・プロシヤ的である、而してバイエルンのソウイエツト政府が倒壊したのは、

①
プロシヤのミリタリズムがバイエルンのアンチ・ミリタリズムを打ち敗つたのだと宣傳したのだ。
赤のやり方はドイツの諸聯邦を互に争はしめんとするのである。惡むべき陰謀である。俺はその頃からもう彼等の陰謀を感じ、このまゝ放任して置いてはならぬと考へた。

四、ナチスのプロシヤ擁護論

當時バイエルンに於ける反プロシヤの氣勢は熾烈を極めた。ソウイエツト政府のあつた頃からであつたが、その頃ミュンヘンでプロシヤ排斥の國民大會が屢々開かれたものである。多くはバイエルンの獨立を主張するもので、そんなところではプロシヤの氣受が頗るわるく、單りプロシヤ人ばかりでなく北部ドイツの人間がうつつかり會場へ來ると殺されさうになつたものである。而して會を閉づるときいつも聽衆の口から期せずしてほとばしり出る罵聲は「プロシヤと手を切れ」「プロシヤを倒せ」「プロシヤと戦へ」であつた。ミュンヘン選出の帝國議會の代議士で有名な某氏の如きはプロシヤとなつて苦しまんより、バイエルンで死んだ方が善いなどと呼んで無智な市民を欣ばせたものだ。

こんな空氣の中でプロシヤ擁護を口するのは殆んど無暴の舉に近い。今思ひ出しても俺は善くもあの時あんなことが思ひ切つてやれたものだと思ふことが一つある。

當時の國民大會を知つて居るものにはすぐ判ることと思ふが、俺はミュンヘンのレーウエン・プロ

一四四
イケラーの民衆大會で始めて公然プロシヤ擁護の演説をなしたものである。味方としては俺と一所に居た僅かばかりの昔の戦友のみであつた。大衆の多くは脱走兵や徴兵忌避のしれもので、嘗ては戦線銃後にかけて盛んに反戦運動をやつた賣國の輩であつた。俺が起つて演説を始めると、わけも判らず騒ぎ立てて居た大衆はうなり聲を擧げて左右に押し寄せて来て、今にも俺は殺されさうになつたが幸に命だけは無事であつた。その時以來俺を護つてくれた仲間には、俺と生死を共にする渝らざる友である。

僕等はその後プロシヤ擁護を止めなかつた。従つて度々喧嘩をした。一九一九年は喧嘩ばかりで通した。それが一九二〇年初頭には益々激しくなつた。その頃我が黨でも同志は次第に多くなつて來たが、民衆大會へ乗り込む同志のものが踏んだり蹴つたりされ、生きてるといふよりも寧ろ屍となつて居るといふ方が善い程ひどくやられて場外へ運び出されたものが、數十人にも上つたことがある。ミュンヘンのゾンネン・シュトラッセ街、ワグナー・ザールで開かれた國民大會の如きは、そのうちでも最も甚しいものであつた。俺は今でもその時のことを覚えて居る。

かくてプロシヤと手を切るべからずとの主張は俺が個人として唱へ始めたものであるが、今では黨の重要な政綱の一つとなつて居る。

バイエルン民衆のプロシヤ排斥は、無智と叛逆との混成物であつた。無智といふのは一般民衆は雷

同附和で物が判らぬ爲である。叛逆といふのは一部の者は物が判らないのでなく、企らむところがあつて反プロシヤ熱を煽つて居るのである。此の人々はフランスから金をもらつてドイツの突さくづしに従事して居たのであつて、ドルテン事件の如きは最も明かに這般の消息を語るものである。反プロシヤ運動はこんな質のわるいものであつたが、更に角その後俺達だけの力で反プロシヤ主義の運動を抑へつけることの出来たのは今に誇りとするところだ。

五、ナチスのアンチ・セミチズム

プロシヤ擁護の闘争に際して俺達の困つたのは反對派が聯邦分権主義擁護を口實にして眞の目的を外に表はさないことであつた。ところでプロシヤ排斥が聯邦制度の維持に何等の關係のないことは言はずして明かだ。苟も聯邦制度擁護を口にするものならば同じく聯邦であるプロシヤの存立にも同情すべきだ。プロシヤを分割したり、或は又之を瓦解せしめんとするのは聯邦主義者として辻褄の合はぬ話でないか。蓋しビスマルクの聯邦制度を善しとする者ならば、ビスマルクの創つたプロシヤ、若し創つたと言つてゐるければビスマルクの完成したプロシヤ聯邦を瓦解させたり、或はプロシヤの一部を分割したりする運動を支持すべき道理がない筈だ。今假りにプロシヤの頑冥な保守黨のうちにフランケン人の居住地をバイエルンから引き離さうとし、之を公然口にし、或は又大びらにその運動を

一四六
なすものがあつたら、ミュンヘン人は何といふであらう。騒ぎ立てて承知しないだらうぢやないか。プロシヤは聯邦制度の臺石である。プロシヤを排斥するは則ち聯邦制度を破壊せんとするものであつて、斷じて聯邦主義の味方であるといふことは出来ない。加之中央集權を目標とするワイマルの憲法を制定せるものは多くは南部ドイツ人とジューとであつて、プロシヤ人は殆んど關係がない。果して然らばビスマルクの聯邦制度を善しとするものならばプロシヤを攻撃せずして攻撃の鋒は寧ろワイマル憲法の制定者に向けらるべきものである。それをやらないばかりでなくジューのことはひとことも口にしないのは不思議なことだが、そこに陰謀のからくりがあるのだ。

戦争中ジューは己達の造つた戰時會社に對する批難、もつと突込んで云へば彼等自身に對する批難を他に轉嫁せんが爲め、國民殊にバイエルンの大衆の不平をプロシヤに向けしめたものである。戰時會社は國民擄取の機關であつた。而して革命後會社の擄取は戦争中より十倍も甚しくなると共に大衆の不滿は益々募つて行くばかりであつた。而してジューは今度も亦その批難を轉嫁するに努め、うまく目的を達した。その方法は國民主義的分子を相互に反目せしむるにあつた。則ちバイエルンの保守的分子とプロシヤの保守的分子とを争はしめるのである。革命に依つて浮び出てドイツを左右する地位にあつたジューは、戰時會社を通じて思ひ切つた亂暴な干渉を、聯邦に對して試みたものである。而かも世の中の批難が甚しくなると、罪を他に轉嫁して己は涼しい顔をして居た。國民はジューを責

めることを忘れて兄弟喧嘩に日を送つた。四百萬のベルリンは勤勉な市民の集まりであり、それを攪き廻して居るのは少數な西歐デモクラシーにかぶれた分子である。ベルリンには罪がない。而かもバイエルン大衆は西歐デモクラシーのベルリンを責めずして、勤勉にして罪なきベルリンを攻撃した。ベルリンはプロシヤの都市で戰時會社の元締だといふのだ。此の如く大衆の注意を他に向けて己れの罪を免かれるのはジューの常たう手段で、今でもジューはそれを繰返して居る。

六、宗派的對立

一九一八年にはまだ纏つたユダヤ人排斥運動なるものはドイツになかつた。俺は今でも覺えて居るが、當時ジューなどと言ふ言葉さへうっかり口に出來なかつたものだ。そんなことを言ふとげんな顔をして俺達を見まもつたものである。なかに喧嘩腰になつて喰つてかゝるものも居た程である。それ故に國民の敵はプロシヤでなくてジューだといふことを知らしめようとしても殆んど耳を藉すものがなかつた。此の間にありてジュー問題をとり上げて國民の注意を喚起したものに「シュツツ・ウン・ト・トルツツ・ブント」の如きものがあり、一九一八年から九年の初頭に掛けて漸く氣運が動きかけて來たが之を押し進めて活潑なジュー排斥運動となしたものはナチスである。從來ジュー排斥則ちア

一四八
ンチ・セミチズムと云へば之を唱ふる者が上層階級か中流の市民間に限られて居たものであるが、ナチスは局限されたアンチ・セミチズムを大衆運動に進展させたのである。ところで國民のジュー排斥が纏まつた形をとり始めると、ジューの方では直ちに對抗の方策を講じた。それはジューのいつもやる術だ。ドイツではカトリック、プロテスタント、兩教徒の反目が甚しい。而してローマ法王廳問題を持ち出すと、いつでも激しい確執となるのだ。ジューはそれを持ち出してカトリック、プロテスタント兩教徒を争はせ、國民の注意を巧みにジュー問題からその方へ置きかへさせて了つたものだ。惟へば古來カトリックとプロテスタントの軋轢ほどドイツ國民に禍したものは無い。かくてジューは首尾善く國民追撃の目をのがれ、兩教徒は夢中になつて争つたが、之を見たアリアン文化と基督教の敵であるジューが、氣味わるき微笑をもらしたことが勿論である。

ジューは聯邦主義對統一主義の論争を提供して久しく國民を二つの陣營に分けて對抗せしめ、兩者の争を利用して國家の獨立を破壊し、ドイツを國際金權の手に收めしめたものである。而して今や國民は復びジューの猪手段に乗せられ、プロテスタント、カトリックの兩教徒はその争が自らの教義を潰がすものであることを忘れて、吳越の反目を繰返すのであつた。遺憾の極みだ。

ドイツ人の血にジューの血を混ざること則ちジューとドイツ人との離婚は國民の體位を下向せしめて居る。恐るべき禍害だ。之を除くには數百年の歲月を要するであらう。數百年を費しても除き去る

ことを得れば善いが、或は永久に除き去ることが出来ないかも知れぬ。今のまゝでジューをして思ふがまゝに害毒を逞うせしめて置いたならばドイツは民族として文化創造の力を失ひ、同時にドイツの大都市は南イタリアの如く、ジューの混血兒が單り幅を利かすやうなことになるかも知れない。ジューとの離婚はその弊甚大なりと云はねばならぬ。ところがジューは組織的にドイツ人との離婚を企圖して居るのだ。則ち黒髮のジューは金髮の世間知らずのドイツ娘を組織的に凌辱して居る。ジューは民族の寄生虫だ。ドイツ娘はアリアン人の粹であつて、かけがへのない大切な寶である。寄生民族のジューにアリアン人の粹であるドイツ婦人を自由にさせることは、かけがへのない寶をだいたしにすることだ。カトリック教徒もプロテスタントも此の害毒を雲烟過眼視して居るのは不可解なことだ。人類の將來はプロテスタントがカトリックに勝つか、カトリックがプロテスタントに勝つかでなく、アリアン民族が存続するか、死滅するかにあるのだ。然るにも係らず兩者はアリアン民族の敵たるジューに向はらずして、同志討を演じて居る。苟しくも國民主義者又は民族主義者を以て任ずる者はプロテスタントたるとカトリックたるとを問はず、所屬宗派内にありて徒らに神の御心を口にするとどめず、神の御心の行はれ、神の御業の汚されないやうに大衆に勸める義務があらう。人の心の異なるは尙ほその面の同じからざるが如しだ。

之れ則ち神の御心なんだ。本來異つたものを同じにしようと言ふのは神の御業を汚さんとするもの

だ。それ故にプロテスタントはカトリックに干渉せず、カトリックはカトリックでプロテスタントに干渉してはならぬ。兩者各その分を守り、宗派の紛争を惹起するやうなことを避けねばならぬ。之が宗教人の第一の義務だ。ドイツのやうに昔から宗派対立の甚しいところでは一方の宗派をなくしてふことは困難だ。それをやらうとすればカトリック對プロテスタントとの反目は激化するばかりだ。此の點ドイツはフランスやイタリー、西班牙と事情が違ふ。三國で例へば打倒カトリックといふやうな政策がとられても國民の分裂を來す虞れはないが、ドイツではさう行かぬ。ドイツで政府が假りにカトリック征伐のやうなことをやれば、プロテスタント教徒がすぐに尻馬に乗つて來て面倒になる。則ち他國では政府がカトリックを壓へようとするればカトリックと政府との争で済むのだが、ドイツでは同時にカトリックとプロテスタントの葛藤となるのだ。政府がカトリック排斥をやればプロテスタント教徒は奇貨措くべしとして必ずカトリックのわるいところを指摘するに相違ない。ところで人間は妙なもので、味方のものの言ふことなら間違つて居ると思つても素直に受入れるけれども、同じことでもそれが仲のわるい反對派のもの口から出ると頭からはねつける。いらぬおせつかいだと感ぜられるのだ。それ故にカトリック部内で、自ら改めようとして居ることがあつても、プロテスタントから言はれると、やらなくなるといふやうになる。プロテスタントといふ宗派の立場からでなく、國民全體の利益からする場合でも、外からおつかふせられるやうなことはカトリックでなくともどの教

派でも反つて反抗的態度を起させるものだ。宗教的感情は政治や國民的感情よりも強くて深い。それ故に兩派の對立に處する道は、畢竟各自の領域を守つて相犯さぬことにするの他はない。そのうちに國家の基礎が固まつて來れば、兩者の對立も緩和されて問題は自ら解決されやうといふものだ。

俺は宗派の對立問題に容喙せんとする國民主義運動の人々をインタナショナルのコンミニュニストより尙ほわるいとは云はない。然りながらナチス黨員にして黨の使命であるコンミニュニスト撲滅をよそにして宗派の争に手を染めんとする者があれば、斷乎として排斥しなければならぬ。今日宗派の争を持ち出して國民運動を分裂させんとする者は、誠らずしてジューの術中に陥るものである。何となれば宗派的感情を利用して國民の統一を妨げようとするのはジューの策戦だからである。プロテスタントとカトリックの對立は偉大な政治家と云はれる人々が、幾百年の歳月を以てしても今に至るまで解決の出來ない問題である。況んや我等に於てをや。今日宗派的對立の問題を一舉にして解決出來ると考へる者があつたら、それは歴史と己れの力とを知らざるものである。

宗派問題に立ち入ることの危険なるは最近の事實が最も明かに立證してゐる。國民主義の人々は一九二四年になつて突如として國民運動の使命はカトリック征伐にありと言ひ出した。而してカトリック排斥運動を始めたものであるが、その結果はカトリックの打倒とならずして、國民主義陣營の分裂となつたに過ぎなかつた。カトリック征伐はビスマルク公でさへ手古摺つた問題である。平凡な他の

人間にやれる道理がない。それ故にナチスの幹部にありては黨員を警めて宗派問題に關係させぬやうにし、若し誤つて宣傳の際に宗派問題に論及する者があつたら、一切其者の宣傳を差しとめるやうにしなければならぬ。而して事實に於て一九二三年秋まではナチス黨内でも此の原則は嚴重に守られ、生粹のプロテスタントと生粹のカトリックとが固く手を握り合つて働いて居り、何等の不都合をも感じなかつた。彼等はアリアン文化の破壊者であるジューを共同の敵となし、之を打倒することに没頭して、宗派の別などを忘れて居た。尤も此の間ナチスはカトリックの中央黨を激しく攻撃したけれども、それは宗派の異同に依るものでなく全然國民運動や經濟問題に基因するものである。

近頃は國民主義運動の陣營内に激しい宗派的軋轢の存するに乘じ、本來無神論者であるマルキシズムの新聞が連りに宗派の論争をとり上げて問題とし、或はプロテスタントを揚げてカトリックを抑へ、或は又カトリックの肩を持つて、プロテスタントを攻撃し、けしかけて雙方を噛み合ひさせて居る。それを知らないで己を忘れ、夢中になつて争つて居る人々の氣がしれない。

ドイツ人は宗派のことと言ふといつても厄起となり、命を投げ出して悔ゆることを知らざる國民である。かくの如き國民に對し少しでも宗派的の感情をかきたてるやうなことをするのは危険極まることだ。ドイツ人は宗派の争となると、肝腎の他の問題を放棄してそれに没頭する。今までとてもドイツ人が宗派の争に懸命となつて居る間に、他の諸國は世界を分割して終つたのだ。今や一部のもの

がカトリック問題などに心を奪はれて居る間にジューは我がドイツの土臺の下を掘りくづして居るのだ。國民運動に宗派の争を持ち込むものは國民主義の賊である。俺はナチス黨員並びに全國民が彼等に惑されざらんことを祈らざるを得ぬ。

七、中央集權は勢である

一九一九、二〇、二一年及びその以後にかけてドイツでは聯邦分權主義か單一國家主義かの論争が激しく闘はされたこと前に述べた通りだ。之も亦ジューの惡戯に由つて人爲的に惹起されたものだ。ナチスは本來さやうな事を愚なりとするものであるけれども、既に世の中の問題となれる以上黙つて居ることは出来ぬ。欲すると欲せざるに係らず、一應我等も亦此の問題を検討せねばならぬこととなつた。抑も聯邦分權主義とは何であるか、又單一國家主義とは何であるか。ドイツが聯邦たるべきか、單一國家たるべきかに就ては先づその言葉の意義を明瞭にせねばならぬ。

然らば聯邦とは何であるか。
獨立の國家が自由意志に由り、主權の一部を中央政府に移讓して共同國家を組織する、之を聯邦といふのである。之が一通りの聯邦論である。

然しながら此の理論の嚴密に當てはまる聯邦は殆んど一つもないと言つて善い。アメリカは聯邦制

一五四
度の國だと云ふけれども、聯邦成員の多くは始めから主權を有して居たものでなく、時の経過のうちに合衆國へ編入されたものである。則ちアメリカの多くの聯邦は行政技術の必要に由つて合衆國へ編入されたものであり、聯邦相互の境界は經緯度によつて劃定されたものであつて、始めから主權を有して居た國家の聯合でない。アメリカは聯邦があつて合衆國が出来たのでなく、合衆國があつて聯邦が出来たのである。聯邦の總てがさうだと言ふのではないが、ステートの大部分は合衆國の基礎が出来てから繰り入れられて聯邦になつたものである。

従つて之等の聯邦の有する主權なるものは、主權といふより寧ろ、地方の自治權に近いものであつて、その權限の比較的廣汎なのは一聯邦だけでも大陸の大きさを有するものがある爲である。それ故に合衆國は完全なる主權を有する聯邦の集合體といふことは出来ぬ。アメリカには嚴密な聯邦の理論はあてはまらないのだ。

ドイツも亦聯邦としては、理論にあはないものが少からずある。ドイツはアメリカと異り、各聯邦は始めから主權を持つた獨立國家の聯合に由つて出来上つたものである。然しながらドイツ帝國なるものは各聯邦の自由意志に由つたものでない。又各聯邦の協力に由つたものでもなく、聯邦の覇者であるプロシヤの力に由つて糾合統一されたものに過ぎない。而かもドイツの聯邦は、アメリカなどと異なり、領土の大きさから言ふと、聯邦相互の間に非常な差違がある。ドイツの聯邦中には大きなものもあるが、小さいものもあり、その相違が甚しい。従つてドイツといふ中央國家に對する各聯邦貢獻の度も一でなく、大小の差があるわけである。有體に云へば聯邦と云つても、ドイツの小聯邦といふものの中には主權の名があつて主權の實がないものが少なくない。之れ則ち過去に於てドイツの小さい聯邦が屢々他に併合せられ、現在に於ても地圖の上から消される聯邦の多い所以である。

我等はこゝに各聯邦の歴史を詮穿せんとするものでないが、現在の聯邦の境界が種性別になつて居るものでないことは明かである。聯邦の境界は寧ろ單なる政治的境界であり、聯邦は政治的關係に由つて生れたものであつて、解り易く云へばドイツが嘗て土崩瓦解の状態にあつた時の產物である。之も亦忘れてはならぬことだ。

斯くてドイツ帝國は始めから平等な聯邦の集りでなくて、聯邦の間既に不平等なものがあつた。戦前のドイツ憲法が、參議院の委員割當に於ても之を一率平等とせず、領土の大小、歴史上の關係等に鑑み、聯邦代表の人数に差等を設けたのも之等の事情に由るものである。

主權移讓のこと亦然りで、聯邦は主權の一部を移讓したといふけれども、そのうち自由意志に由りて爲したものは甚だ少いのである。蓋し彼等が移讓したといふ、ある主權なるものは名ばかりで、實のないものがあつたのである。而して名ばかりでなく、實のあつたものも進んで移讓したのだといふよりも、プロシヤの壓迫に由り餘義なく提供したものが多いいのだ。ドイツの各聯邦が、自由意志に由

一五六
り主権の一部を移譲した、それに依つてドイツが出来たといふのは嘘でないが、割引して聴かねばなるまい。然りながらドイツ帝國を創つたビスマルクの考は聯邦を挫つて帝國を肥やさうといふのではなく、帝國の存立に缺くべからざる権限だけを聯邦からとつたのである。ビスマルクは善く聯邦の傳襲の尊重しなければならぬことを知つて居た。彼は奪つて聯邦を敵とする代りに、寧ろ與へて聯邦の協力を確保するのが國家百年の大計と考へたのだ。ところで此で又考へなければならぬことは、ビスマルクは必ずしもそれで満足して居なかつたことである。彼には他に考へあつたが、時機尙早で企てても實現されないことを知つて居たから、先づ當面の解決を以て一段落とし、残りのことは時の來るを待つこととしたのである。聯邦各自は持てるものを容易に手離すまいとする。それを無理に奪ひとらうとすれば聯邦全體の反抗を覺悟せねばならぬ。それよりも時節を待ち、聯邦分權主義の自ら崩れて來るを待つのが賢明だ。ビスマルクはさう考へたのだが、こゝろが公の政治家たる所以で、果せる哉、分權主義はその後強くならずして弱くなるのみであつた。而して又最後にビスマルクの望んで居たことも意外のことで實現されるやうになつた。

世界大戰に由りドイツが崩壊し、それと共に君主政體が壊れ去るや、欲すると欲せざるとに係らず、ドイツ統一の勢は阻止することの出来ないものとなつた。蓋し各聯邦は種性の別に由つて形成されたものでなく、専ら政治上の成行に由つて出来たものであるから、政治の事情が一變し、君主政體が亡

び王室が倒れるに及んで、聯邦存立の意義が亡くなつて了つたのは固よりその處である。かくて多数の中小聯邦は革命を機として或は自ら解消し、或は大きな聯邦に合併してその一部となつた。戰前のドイツ聯邦は本來此の如く基礎の薄弱なものであつたのだ。
ドイツは斯くて君主政體の崩壊と、王室の没落とに由り、聯邦的性質を著しく損せざるを得なくなつたが、それにも増して、ドイツの統一を促進したものが他にもある。それはウエルサイユ講和條約である。

八、ウエルサイユ條約と中央集權

聯邦は從來財政自主權を有して居た。然るにウエルサイユ條約に依り、中央政府が莫大な償金を負擔することになつてみると、今までのやうな聯邦の分擔金などといふ生やさしいことでは償金の調達が出来ず、聯邦としては今迄持つて居た財政の自主權をも中央政府に移譲せねばならぬことになるのは當然で、又事實に於ても、聯邦の財政自主權は中央へ移譲されて了つた。そればかりでない。同じ理由に由り、郵便も鐵道も中央政府で統一することになり、苟くも償金調達の財源となるものは、悉く中央政府にとり上げられることになつた。かくては聯邦は既に名ばかりな存在だ。

償金支拂はドイツの骨身を削つて實行されたものであり、之れ程馬鹿なことではないが、償金を支拂

ふこととなれば聯邦の財源が中央へ持つて行かれ、聯邦の存立の基礎が危くなるのは止むを得ないことだ。誰を怨むこともない。責任は戦争に勝つやうに努めなかつた政黨や政治家にある。殊にバイエルンでは聯邦分権主義の爲めにバイエルン一國の利害に因はれ、プロシヤと反目を續けてドイツ全體の利益を考へなかつた政治家の罪が最も大きい。而かも報はてきめんだ。聯邦の利害をドイツ全體の利害よりも大切なりとなして居たバイエルンの政治家は、ドイツの崩壊と共に聯邦制度の維持も困難となつた事情を見て懊惱せざるを得ないのだ。自業自得といふものであらう。

講和條約に調印し、巨額の償金を背負込めば聯邦の機構に破綻を來たし、聯邦が次第に財政自主權までも喪失するに至るべきは當然のことである。然れば條約を承認し、どこまでも之を履行すべしと主張する政黨はそれと共に聯邦制度の破壊せらるべきことを始めから承知の筈である。彼等が一方に於てウエルサイエ條約を承認しながら、他方に於て白々しく選舉人を前にして、聯邦擁護などと云つてゐるのは偽善の甚しきものである。ビスマルクのドイツは外に對して自由不羈であり、内にありては聯邦に對して多く求むるところがなかつた。今日のドイツはドーゾ案に依る未曾有の高い償金を支拂つて居るが戦前のドイツはそんな償金を支拂ふこともなく、他にも大きな負債はなかつた。それ故に自主權を干犯してまで聯邦の財政に手をつけるといふが如き必要もなかつた。之れ則ち各聯邦がこれまで中央政府に忠實であつた所以である。然りながら今日ドイツ人が、共和國の利害に對して冷感な

のは聯邦の財政權が中央政府に移された爲ばかりでない。ドイツ人がドイツの新國家に對して熱なのは今の共和國がわるいからだ。政府で奈何にはやし立てても共和政體などはドイツ人にわからぬ。共和擁護法があるから、大びらにわるく言ふ者はないが、心から之を讃へて居る者は一人もあるまい。政府は當今嚴酷な法令を設け、わる口を言ふ市民を囚へて獄屋へほうり込むやうにして居る。それだけでも共和政治の國民に人氣のないことがわかる。

ドイツ國民が中央集權を快しとしないといふのは誤りである。今假りに中央が聯邦に直接干渉せずとも、聯邦の負擔が今日の如く巨大なものである以上、中央政府と聯邦との關係はうまく行く道理はない。中央政府はウエルサイエ條約に依り莫大な賠償金を支拂ふことになつて居るが、これだけ大きな償金を背負ふ以上、聯邦を誅求するの他は全く勢ひ聯邦と中央との摩擦は不可避である。何となれば、聯邦の分擔が過大であれば之を徴收することが困難であるから、支障なく徴收されれば善いが、さうでない場合は中央政府は強制的手段に訴へても之を徴收せざるを得なくなるのは明らかだ。さうなれば否應なしに聯邦の自主權にも立ち入ることになり、そこに軋轢が生じて聯邦の獨立性は欲する与否に係らず、毀損せられざるを得ないことになる。何れもウエルサイエ條約の罪であつて條約を履行せんとする以上、聯邦に對する中央の干渉を免かれることは出来ないのだ。聯邦に對する干渉を欲しないならばウエルサイエ條約を破棄するに如くはない。従て同條約に反對であつたものが聯邦自

主権の侵害を批難するのは當然であるが、條約を承認し、之を履行せんとする一部のものが今に至つて聯邦自主を云爲し、恰かも他人のとがでもあるやうに説き廻るのは恥を知らざる者である。

今日の如き間違つた内治外交を行ひ、大きな背負込ばかりやつて居れば聯邦の財政自主權にまで喰込まねば中央政府はやつて行けないのだが、財政自主權がなければ聯邦は殆んどないのだ。

同じく聯邦制と云つてもドイツでは戦前と戦後とに依り、中央の地方に對する態度が全然異つて來た。此のことは特に注意すべきである。則ち戦前の中央政府は外に向つては強く、内の各聯邦に對しては弱かつたものである。今の中央政府は外に弱くて内に強いので非常な相違だ。戦前のドイツは舉國一致の國民的國家であつた。國民的國家では國民を治むるに嚴刑を以てする必要はないのだ。戦後のドイツ共和國は人氣のないインタナショナルな國家である。國民に人望のない國家は嚴刑主義でなければ政治がやつて行けないのだ。戦前のドイツが内に弱く、戦後のドイツが内に強いのは此の如き事情に由るのだ。ベルリンの共和政府が今日市民の自由を口にし國民をあたてて自由の市民などと言つて居るのは破廉恥極まることだ。現在のドイツは外國の奴隸植民地だ。奴隸の植民地の自由人などあり得ない。當今のドイツには國民の心から仰ぎ見る眞の國旗はない。共和政府の國旗なるものは共和政府の商標であつて國民には關係がない。之れも今日のドイツが獨立國でなく、外國の屬國を以て自ら甘んじて居る爲だ。今の國旗は傳襲を無視し、祖國の歴史を無視したものであるから、國民がい

つまでも之れに親しみを持つわけはない。國民はいつかは之を弊履の如く捨て去つて顧みない時が來るであらう。

斯くて現在の共和政府は自己の政權を維持する爲めに聯邦の獨立を犠牲としつゝあるのだ。一は聯邦を擯取する財政上の理由に由り、一は他の政治的理由に由つてだ。何となれば外に對して巨きな償金を拂はんとすれば、内なる聯邦を擯取せざる能はず、聯邦を擯取せんとすれば、やがて政治的叛亂となるべき虞あるが故に、中央政府としては事の未だ面倒とならざるうちに、聯邦の權限を出来るだけ削減せんとして居るのだ。

共和政府のやりかたは外軟内硬だ。ナチスの企圖する治國の根本方針は外硬内軟だ。ナチスの國家は外に對して、國家の利害を擁護してどこまでも強硬に、而して内に對しては、單り個人ばかりでなく、各聯邦に對しても出来るだけ自由を與へるにある。ナチス政府は聯邦に干渉することもあらうけれども、それに由りて中央に對する聯邦の惡感と惹起させるやうな干渉は斷じて爲さないつもりだ。

共和政府は外國の手先となつて干渉するのだ。ナチスの干渉はドイツ國民全體の利益のためだ。惟ふに當今何れの國家と雖も、多少とも中央集權の傾向を有せざるはない。ドイツ亦然りで、ドイツだけが此の點で例外たり得ない。ドイツの聯邦中には聯邦と云つても殆んど獨立の實力なきものが少くない。之等の國が今尙ほ聯邦の主權などを固持せんとするのは愚の骨頂である。今や交通發達の

一六二
點よりするも行政技術の點よりするも聯邦割據は日を逐うて無意義となりつゝある。近代の交通と技術は、距離と空間とを縮小し、今の國といふものは昔の州ほどのものになり、昔は大陸であつたものが、今では一つの國くらゐに狭くなつて居る。行政技術の點からのみ云へば今のドイツ全體を治めるのは、百二十年前のブランデンブルグ一州を治める程にも骨が折れない。今日ミュンヘンからベルリンへ行くのは百年前にミュンヘンからシタルンベルグへ行つたよりも難作はない。交通の便宜になつた點から云ふと、今日のドイツ全體がナポレオン戦争當時にあつた中くらの小さな聯邦一つ程もなうと云つて善からう。之等の情勢の變化に盲目なるものは時代にとり殘された連中だ。遺憾ながらこんな連中はいつの世にも跡を絶たない。氣の毒なことだが、何と思つても歴史の車を逆轉させることは出来なからう。

我等ナチス黨員は時勢の變化に盲目であつてはならぬ。従つて自稱國民主義を標榜する者の駄法螺に惑はされてはならぬ。俺は敢て駄法螺といふ。偽黨の言ふところは駄法螺に相違ない。何となれば彼等は口に聯邦の獨立を稱へても、心には獨立の可能を信じては居ないのだ。之れが一つ。聯邦の獨立を叫んで居るが、獨立を危殆に陥れた素地を造つた者は、他人でない、彼等自身である。之れが二つ。殊にバイエルンに於ける中央集權反對は殆んど政黨の黨利黨略にのみ由るものであつて、信念があつてのことでない。彼等はバイエルン聯邦が中央政府の干渉を受ける毎に騒ぎ立てて居るくせに、

①
最後まで之を争ふものがなく、いつでも泣寝入となつて了ふではないか。己が泣寝入りとなるばかりでなく、聯邦自主の立場から起つて反抗するものがあると、今日の國情に叛くものとなして之を牢獄に投じ、然らざれば法規を濫用して辯論の自由を奪ひ、訴ふるに所なきに至らしめて居る。彼等は似而非聯邦主義者である。彼等の言ふところは駄法螺である。ナチス黨員が似而非聯邦主義者の駄法螺に惑はされてはならぬといふのは之が爲である。プロテスタントとカトリックとの對立を問題とすることが既に然りし如く、中央對聯邦の確執を助成するもの、卑しむべき既成政黨の黨利黨略に出づるものも多いのである。

斯の如くにして單一國家への進展或は又中央集權強化の要は時勢の變遷に由るものであり、殊に近代交通機關の發達よりすれば、中央集權の強化は必至の勢とも云ふべきであるが、現在の共和國政府の手に依りて行はるゝ中央政權には、我がナチスは斷乎として反對せざるを得ぬ。共和國政府は全國の鐵道を統一した。郵便を統一した。聯邦の財政自主權にも手を觸れた。政府は着々中央集權の政策を擴充して居る。然りながらベルリン政府の中央集權は、國民の利害を考へて行つて居るのでなくて、専ら聯合國へ支拂ふ賠償金の財源捻出の爲めである。同じく鐵道、郵便の統一と云つても、右のやうな動機から出たものには、どこまでも反對せざるを得ざるが如く、同じく中央集權と云つても外國へ數十億の債金を支拂ふ爲めの聯邦切崩しには、明かに反對を表明せざるを得ぬ。之れが共和國政府の中

中央集權に反對する理由の一つである。

共和政府の中央集權に反對する第二の理由は、現在の共和國政府に強權を持たせることは、國民の大なる禍害なるが故である。今やジューの幅を利かして居るデモクラシーの共和政府ではドイツを擧げて、似而非デモクラシーの國家たらしむべく全力を傾注し、之れに従はざる聯邦があると、何等かの口實を設けて一般聯邦の權限を縮小せんとして居る。共和政府の中央集權は則ち此の如き動機をも包藏して居るのだ。此の如き狀勢下にありては、我がナチス黨と雖も勢ひ聯邦を支持せざるを得ぬ。之れ必ずしも聯邦分權主義の味方たるが爲でなく、共和國政府の不純な中央集權を排斥せざるを得ないのだ。バイエルン國民黨は中央政府に對抗しバイエルンの特權を擁護して下らない。之はドイツの利益を考へたものでなく、寧ろ偏狹な地方的感情に基いたものであつて、固より稱讃すべきことでないが、その動機の奈何を問はず、共和政府の不法な干渉に對し、聯邦自主を固執して譲らないのはベルリン政府が國內に於て暴威を振ひつゝある現在に於ては多とすべきだ。之れが反對理由の二つ。第三の理由は今日の中央集權なるものは、聯邦より奪ふ權利を革命派の手に收めんとするにある。凡そドイツの歴史に於て今日の共和政府ほど私利を營むこと多き政府は未だ嘗て見ざるところである。今の共和國の政治家は口にデモクラシーを唱へ、萬人にひとしく立身の途を拓くと稱しながら、その人材登用の方法を見れば、黨のものは不肖でも之を重要な地にとり立て、黨の出身に非ざるものは才ある

ものと雖も登用せず、偏頗極まる措置を平氣で行つて居る。革命以來既に經濟關係の諸機關は中央に統一せられた。

行政方面でも聯邦の機關で中央に移讓されたものが少くない。而かもそれに由つて出來上がった經濟機關でも、行政機關でも役員官吏は悉く革命諸黨の黨人のみであつて、黨員以外のものは殆んど之れに與ふことを許されない。殊にジューの跋扈は目にあまるものがあり、今や産業行政何れの部面に於てもジューの羽振は驚くべきものがある。

以上中央集權に反對する理由として三つの弊害を指摘したが、就中最後に擧げた第三の理由は我等をして最も深く政府の態度に疑を抱かしむるものであつて、我等が中央集權強化に反對せざるを得ざる主なる理由はこゝにある。但し此に注意すべきは我等の反對は決して聯邦割據主義を可とするのでなく、現下の政治情勢が暫らく我等をして中央集權に反對せしめるのである。

我等ナチスは本來中央集權に反對するものでない。今日中央集權の必要なるは殆んど議論の餘地がない。此の點は思ひ違ひのないやうにしなければならぬ。我等の反對するのは今の偽政府の中央集權を非とするのであつて、中央集權そのものは我等の力を極めて支持するところである。蓋し國家は形式であつて軽く、國民は内容であつて重い。それ故に國民の利害が必要とするなら、國民は個々の聯邦などに執着して居るべきでないこと之れ亦自明の道理である。

一六六
殊に二、三の聯邦が國民を代表する全體的國家のうちにありて、我意を張らうと云ふが如きは許されないことである。それ故に個々の聯邦が外國に公使を駐在せしめ、或は又聯邦相互間に公使を交換するが如きは廢せられねばならぬ。ドイツが今に至るまでこんなことを續けて居るからこそ、外國から舉國一致が疑はれ、又いろ／＼外部からの離間策が施されるのだ。惟ふに聯邦の公使駐在は百害あつて一益なきものだ。中央政府の任命する大公使はドイツ全體の力を背景とするものであり、聯邦の公使は殆んど國といふことの出來ない程微力な弱邦の代表である。中央を代表する在外使臣に出來ない保護が、聯邦使臣の手に由りて與へられるわけがない。聯邦の在外公使は無用の長物である。尙ほ之は聯邦ばかりのことでないが、ドイツでは家門の譽の爲にと言ふだけで公使にしてみらつて居る無能な貴族出の外交官がある。之れ亦不可解なことであつて、戦前のドイツ外交が不振であつたのも原因の一つはこゝにある。國民は貴族出の外交官の無能なものにはうんざりしてゐる。

一六七
惟ふに聯邦が今後も存続しなければならぬとすれば政治よりも文化方面に意義を持たすべきであらう。それが時勢の變化である。今日に至る迄バイエルンの大をなした君王は統一ドイツに反對の王でなく、寧ろ大ドイツを念とすると共に藝術の獎勵者であつたルドウィヒ一世であつた。王はバイエルンの政治的勢力を増強することよりも寧ろバイエルンの文化的地位を強め、それによつて他國を凌駕するに努めた。而してそれが亦バイエルンとして賢明な策であつた。若し政治的に勢力を強めること

一六八
にのみ意を用ゐて居たら、恐らくは今日の如き文化的バイエルンの誕生はなかつたであらう。ミュンヘンは嘗ては取るに足らぬ地方的都市であつた。それをドイツでも有數な藝術の都に造り上げ同じくドイツ人と云つても種性の異なるフランケン人をもバイエルンに引きつけて來たのは専ら王の功績によるのであつて、フランケン人はミュンヘンの藝術に引きつけられたのだ。若しバイエルンが専ら政治的に割據することのみを考へ、文化文面に力を用ゐなかつたならば、バイエルンはサクセンと同じく、同一の國に居ながら、バイエルンに同化せざる都邑が、あちらこちらに出來て困つたであらうと思はれる。ライプツヒヒはサクセンの町でありながら、サクセンのなかで孤島のやうな地位を占めて居る。フランケン人の多いニュルンベルグはバイエルンのライプツヒヒである。それ故に政治的割據主義のみに力を用ゐて居たら、ニュルンベルグはバイエルンの都市でなくて、フランケン人の都邑となつて居たであらう。かくてバイエルンの大をなしたものはアンチ・プロシヤの割據主義者でなく、ミュンヘンを藝術の寶庫に造り上げ、それによつてドイツ國民を引きつけたルドウィヒ一世王であつたことは、何人も篤と考へてみなければならぬことだ。聯邦は今後政治的の性質を離れ、地方種性の區別を基礎とすべきである。同時に文化の地方色を主とすべきだと思ふ。但しそれとても一時のことであつて、近代の如く交通が錯綜して來れば文化の地方的獨立などは自ら消滅し、やがては渾然たる一體のドイツ國民が出來上がらねばならぬ。

かくて聯邦の對立はどうしても廢除されねばならぬ。殊に軍隊に於ては聯邦の對立は最も忌むべきことである。ドイツの軍隊では悲しむべきことではあるが聯邦對立の弊があり、同じ聯邦のものは互に親しむが、隣りの聯邦のものだともう親しみを持たないといふやうな傾向がある。

他日ナチスの天下になつたら、我等は先づ此の如きの弊害を打破し、軍隊にまで割據主義を持ち込まず、軍隊は聯邦の區別を撤し、國民が相互に理解し、ひとしく一つのドイツ人となるべき場所としなければならぬ。ドイツ國內にはドイツ人を相互に離れさせるやうなものが少からずある。軍隊は離れんとするものを引き寄せて一つにするところである。軍隊はドイツの壯丁をして狭い地方の天地から、ドイツの廣い國家に与け込ませるところである。ドイツの若人は聯邦の境を忘れて祖國ドイツの國境を見つめなければならぬ。ドイツ人の護るべきところは、聯邦相互の境でなくて、祖國ドイツの國境である。それ故に壯丁を地方にとどめて、外へ出さぬといふやり方はわるい。寧ろ兵役を利用してドイツ全體がわかるやうにさせねばならぬ。今までの如くバイエルンの壯丁は成るべくミュンヘンに、フランク人は成るべくニュルンベルグに、バーデン人は成るべくカールスルーエに、ウエルテンベルグ人は成るべくシットトガルトで兵役を果たすやうなやり方を廢し、バイエルンの壯丁はラインや北海を觀、ハンブルグの壯丁はアルプス地方に、又東プロシヤ人はミッテルゲビルグ地方の兵營に入るやうにすることが必要である。昔のやうに諸州を遍歴して、自ら眼界を廣くすることの出來な

①

②

い今日の若いドイツ人には特に之が必要である。同じ地方の者が一つに集まり、その爲めに軍隊にも地方的色彩のあるのは當然のことであるが、兵營にまで地方的性質を持たせるのは、策の得たものではない。何事も統一一點張りで行かうとするのは善くないが、軍隊だけは是非とも統一主義たるべく地方分権的であつてはならぬ。今日の國衛軍の如く、兵員が少くなつては聯邦別の軍隊といふやうなものでは造らうとしても出來ない。之れ亦現在の國衛軍が聯邦の區別を去り、廣く國民のうちから兵員を募ることになつた所以でもあるが、その動機原因は奈何やうにもあれ、軍隊内で聯邦の區別の認められなくなつたのは欣ぶべきことであり、之れだけはナチスドイツに於ても是非とも踏襲されねばならぬことだ。

加之ナチスの如き新運動は狭い地域に踞してはならぬ。聯邦の境界などに拘泥して居ては活潑な働きは望んでも得られぬ。ナチスは從來の聯邦的割據の弊を打破して廣く全國民に呼びかけんとするものである。宗教に政治的國境がない。ナチス運動には狭い聯邦の國境がない。

ナチスは聯邦割據主義の走り奴に非ずして舉國一致の導師である。ナチスの企圖するところは割據主義者の立て籠る聯邦の狭い國境を撤去し、全國民を打つて一丸となし、國民的基礎の上に新體制を築き上げるにある。

斯くてナチスの運動が成功し、ドイツの國礎が固くなれば、外に對して勢力を加ふると共に國內に

於ても亦各自處を得ることならう。

150

第十一章 黨部と宣傳班の卷

一、闘士と理論家

一九二二年は俺にとりてもナチス黨にとりても特別に意義深い年であつた。俺はナチスの前身であるドイツ労働黨に入黨すると間もなく宣傳部を受持つこととなつた。當時黨内に問題はいろいろあつたけれども、當面の第一の急務は宣傳であると俺は思つた。黨勢の擴張をはるかにしても、大衆にナチスの主義主張を知らせることが必要でないかと思はれたのだ。先づ主義の宣傳があつて後に黨勢の擴張があるのだ。加之黨の大をなすことにのみ焦慮するのは善くない。俺は人爲的に黨を大きくすることには反對だ。急いで大きくしようとするれば、黨は或は大きくなるかも知れぬが、うどの大木で形ばかり大きく生命のないものになる。そんなものに生きた働きが望めない。黨の大小は内部からの自然の發達に待つべきものであつて、外から細工して大きくすべきものでない。先づ黨の主義が明らかになり、同志が集まればそこに自ら黨の成長があるのだ。人間には他人の能を妬み、之を抑えんとするわるい病がある。黨勢の擴張に夢中になればいろいろの無理が出来て来る。その結果は不肖にしてその任にあらざる者でも之を引き上げて幹部どころに据えたりするやうなことになるが、不肖な者が

一七一

上に立つと、才のある者が来れば己れが退いて跡を譲るべきであるのに、それを悟らずして、反つて能あり才ある後進を抑へて進ませないやうなことをする。誠に遺憾なことだ。之等も亦徒らに大を欲し、黨を速成的に大きくしようとするからなんだ。

然れば黨の健全な發達を謀る上からしても、一定期間は宣傳に全力を用ゐ、共鳴して集つて来る者のうちより人の上に立つべき才幹のあるものを自由に簡拔し、要所に据ゑるやうにすれば少い人間の中から力のない者を無理に取り立てて後で困るやうなこともないと言ふものだ。加之人物を見て置いて多くの中から自由にとることになると、思ひがけない拾ひものをすることも屢々である。見たところつまらぬ人間のやうに見えて、その實人を率ゐるやうに生れついて居るものも世の中には少くない。この種の人物は普通の人事では一生見出されなくて終るものも多いのだ。俺が天降りの黨の人事に反對し、人物の採用は自然淘汰的な競争に由るべしと主張するのも、之等の人材を逸したくないからだ。

人材の拔擢に當りて戒しむべきは、理論に長じ、頭の善いものを取りてさうでないものを退けてとらないことである。之はとんでもない誤りだ。頭の善い者必ずしも上に立つべき力柄ある者でない。事實は寧ろその反對で、之も亦考へて置くべきことなんだ。

手腕ある者必ずしも頭の勝れたものでなきが如く、頭の勝れた者必ずしも手腕あるものでない。頭

が善くて理論に長ぜるものにおいて、物の道理を尋ね出せばそれで善いのである。仕事は抽象的である。實際的の人間はさうでない。何を措いても世間の表裏に通じ、生きた人間を知つて居なければならぬ。

之が六ヶ敷いのだ。頭の人間は個人を見るけれども、大衆を見ない傾きがある。本當に人間を識る者は個人を過重しないと共に、大衆の力を馬鹿にせぬ。人間は弱いところもあるが、獸のやうに強いところもある。強と弱とを加減乗除し、人間を天使とせず、又惡魔とせず、惡魔でもなければ天使でもない人間の姿を看抜くが如きは、世間を知る者でなければ出来ぬことだ。

大體から云へば頭の良いものは人を率ゐる力に缺けて居る。此の點から云ふと人の心をかき立てるエジプタの方が黨としては大切だ。かく言ふと頭の善い連中は不快な顔をするけれども、それは不思議でなく寧ろ當然のことである。蓋し大衆の心を掴み得る程のエジプタならば、お坊ちゃんでない。その人必ず世の中の酸も甘いも噛みわけた苦勞人であるに相違ない。事情に迂い學者には、人を率ゐることは出来ないが、エジプタには人を引張つて行く力があるといふのも之があるが爲だ。大衆を動かす才能は人を率ゐる才能でもある。大衆を動かす爲めには、必ずしも學問の才を必要としな

一七四
ればならぬ。黨としては兩者とも必要缺くべからざるものだ。理想ばかりが善くても、實現が出来ぬば用をなさざる如く、闘士ばかりで學者が居なくとも同じくやうにうまく行かない。兩者兼ね備へた者が一番善いのだが、學問があつてその上に人を率ゐる力ある者は少く、學者で闘士でエジテータを兼ね備ふるものに至つては、容易になくして稀にあるものだ。世の偉人と稱する者は三者を一身に兼ね備せるものである。

二 黨員と共鳴者

右に述べた如く、ドイツ労働黨に加入して始めに受持つた黨の仕事は黨のプロパガンダであつた。俺は此の仕事を受持つと、先づ他日黨の中堅となるべき人物を大衆の中から獲得する目的を以て、少數でも善いからそれらの者に、ナチスの主義を叩き込むことに宣傳の目標を置き、黨を大きくすることは差當り多く考へないことにした。

ナチスの運動は古き世界を破壊して、新しき世界を打ち建てんとするのである。尋常の努力ではない。幹部も愚圖々々して居られぬが、次のことだけは幹部の者に是非とも知つて居てもらはなければならぬことであつた。それは他でもない。黨の大を欲すれば、無差別に人間を引張ることをやめ、同じく寄つて來る人間の中でも單に主義に共鳴する者と、同志として共に闘ふ者との間に區別を設け、

黨員たるものに嚴重な條件をつけることである。

そこでプロパガンダの使命は共鳴者を多くすることであつて、そのうちより黨員を選択するのは黨部の仕事である。

ここに共鳴者といふのは黨の主義に賛成する者の謂であつて、黨員とは黨の爲めに闘ふ者の謂である。

プロパガンダは共鳴者を造り、黨部は黨員を簡拔し、かくて仲間にとり上げられた新黨員が更に新しい共鳴者を造ることに努力する。之れが黨勢を擴張して行く順序なのである。

斯くて共鳴者なるものは單に黨の主義を受入れるといふだけのものであり、その態度は消極的である。之に反して黨員たるものは受入れるばかりでなく、進んで主義の爲めに、闘はんとするものである。その態度は積極的であらねばならぬ。消極的なことは安易であり、積極的に活動するのは氣力を要する。世の中は安易を欣ぶものは多く、氣力あるものは少いから、共鳴者を得るは易く、闘士を得るは難いといふことになる。十人の共鳴者は出來ても、そのうちから一人の黨員を得るのは容易でな

5。
かくてプロパガンダは一人でも多く共鳴者を作るにあるが、黨部は細心の注意を以て、黨に不肖の輩の紛れ込むことを防ぎ、最も優秀な分子だけを選抜するやうにしなければならぬ。プロパガンダは

一七六
對手を選ばず、何人でも善いのであつて、共鳴者の頭や才能や品性などは措いて問ふ必要はないが、
黨部は嚴選主義を以て臨み、黨員として採用する者はナチス運動の勝利を約束するの男の中の男たる
ものを選び一人でもろくでなしを入れてはならぬ。

三、黨勢擴張と宣傳

プロバガンダの使命はナチスの主義を廣く宣布するにあり、對象は國民全部にある。黨部の使命は
プロバガンダに由つて得た共鳴者の内より、積極的にナチス運動に参加する者を簡拔するにある。對
象は限局的である。

プロバガンダは國民全部に、ナチスの主義を叩き込み、運動の地盤を開拓するにあり、黨部は闘志
あり、又その能力ある者を發見し、之を集結して強力な闘争團體を作り上げるにある。

プロバガンダの範圍は淺くとも廣きを要し、黨員の選擇範圍は狭くとも固きを要す。従つて共鳴
者の數は多々益々増すべく、黨は大に過ぎんよりは寧ろ小に過ぎざるを可とせん。

それ故に宣傳は愈々廣くして、黨は愈々小さい。此の點に於て宣傳の廣さと黨の大きさは逆比例
になるものとも言ひ得る。プロバガンダが廣く行き渡り共鳴者が多くなれば、黨員の數は少くても
善く、反對に宣傳を誤れば、黨部が徒らに大きくなり、又大きくならなければならぬといふことにな
る。

つて拙い。

プロバガンダの第一の使命は一人でも多くの共鳴者を獲得するにあり、黨部の第一の使命は共鳴者
のうちより、黨員を集むるにある。プロバガンダの第二の使命は現狀を打破して、ナチスの新體制を
造り上げる必要を知らしむるにあり、黨部の第二の使命は政權を獲得してナチス主義を實現するにあ
る。

ナチス運動を成功せしむる爲には、ナチスの主義を出来るだけ多くの人に宣傳し、必要があり、又
その力があれば、教へ込むといふやうなことでなく、進んで強制的に之を受け入れさせるところまで
行かねばならぬ。同時に黨部は黨員を集むるだけでなく、出来るだけ早く政權を獲得して國家要
樞の地位を黨の手に收めるやうに努力し、兩者相俟つて始めて意義ある運動となるのだ。

以上述べたところを、更に詳しく云へば次のやうなことになる。則ち

ナチスのやうな革命的大運動にありては、先づプロバガンダに依り黨の政綱を國民に宣傳すること
が必要である。宣傳の眼目はナチスの主義を對手に呑み込ませるにある。然らざれば對手の誤謬を指
摘して反省を促がすにある。ところでプロバガンダに力を持たせる爲めに、黨の背景がなくてはなら
ぬ。黨はプロバガンダに由つて引きづられる共鳴者のうちから優秀な黨員を得て、黨の力を育て上げ
て行くのであるが、善き黨員を得るには共鳴者の多く存在することが必要である。共鳴者の數が少く

一七八
ては思ふやうに優秀な黨員を自由に選抜することが出来ぬ。それ故に善き黨員を多く得る爲めには其鳴者の多く存することを必要とし、多くの共鳴者を造るにはプロバガンダが善くなくてはならぬといふことになるが、プロバガンダは又黨の勢力が盛んでなければうまく行かない。プロバガンダと黨部とは車の兩輪である。一を缺いても役に立たぬ。

黨部の心すべきことは、内訌に由つて黨の運動の阻害せられざることである。これが一つ。黨としての攻撃精神を衰へしめず、絶えず之を旺盛ならしむるやうに努めることである。之れが二つで、黨は自ら大きくなる。精力があつて勇敢な人間は多くなくて僅かにあるものだ。それ故に人ばかり多く集めることに腐心すれば、勢ひ氣力のない者をも強て集めることになり、黨は大きくならうが、黨の生命はなくなる。黨は小さいより大きい方が善いけれども、黨員の数が多過ぎると、黨の闘争的精神がいつのまにか消磨し、プロバガンダに對して積極的に支持を與へなくなるを常とする。

ナチスの主張は革命的である。それ故に之に従事する黨員たるものは第一に闘志の旺んるを要する。而して黨員は闘士あるものに限るとすれば怯懦なる者は躊躇して入つて來ない。氣の弱い者は心に善しと思つて居ても公然人の前に立ち黨員たることを示す氣力がない。そんな者を避けて強い者ばかり集めることになれば、ナチスは誰でも勇氣ある者ばかりとなり、黨の力はそれによつて強さ加へるのである。此の如き方法に由り黨員を作るは一種の自然淘汰に由るのであるが、黨の闘争的精神

を維持し、ナチス運動の成功を期する爲めには此より他に途がない。

ナチスとして最大の危険は黨の景氣が善くなると俄かに黨員の殖えることだ。我等のは荆棘の途を拓いて進むものである。それ故に怯懦の輩は聞いただけでも尻込するけれども少しでも人氣が出て來て將來が囑望されると、臆病な癖に慾の皮の突つ張つた連中で黨員にならうとする者が少からず出て來るのだ。之を警戒せねばならぬ。

世の中には始めどんなに善く成功するかと思はれた運動が、今一息といふところになつてどことなく弱つて來て最初の勢がなくなり、やがて倒れるやうになるのがある。之も黨が盛んになると有象無象が紛れ込むに由るものであつて、人氣が出て來るとつまらぬ人間、殊に虫の善い人間が蟻の甘さにつくが如く寄つて來、やがてそれ等の者が少數の優秀分子を壓倒し、黨を左右する勢力を占めるに至つて、黨は立黨の精神を忘れ、専ら私の利益を逐ふ卑しむべき朋黨となるのだ。かうなれば黨の本來の主張は放棄され、闘志もなくなり、活潑であつた運動も水の混つた葡萄酒のやうに不純にして味のないものになつて終ふのだ。

それ故にナチスの元氣を維持する必要から云つても、黨の景氣が善くなつたら、益々黨員の詮衡を嚴重にし、従前よりも一層人物の選抜に注意を加へねばならぬ。之が黨の健全な發達を確保する唯一の途である。かくして黨の中堅の勢力が他の者の手に移らず、いつも中堅分子の手に置かれるやうに

し、プロバガンダ班にありても黨部にありても、指導権はどこまでも中堅分子が占めて異分子に擾亂させてはならぬ。

少くともナチスドイツが出現するまでは、黨の主要なる地位はもとより、黨全體の統制權も、結黨の最初から黨の爲めに働いて來た同志が之を獨占すべきであつて、新國家が出來、それと共に新憲法も制定されたら、その時を俟つて黨で占めて居た各種權力を徐々に國家の手へ移せば善いのだ。之れ單り我がナチス運動に於て然るに非ず、總ての革命の原則である。

凡そ政治にせよ宗教にせよ、偉大な革命運動の成功はいつでも此の原則に準據せざるはない。此の原則を無視して革命運動の成功したといふ話は未だ嘗て耳にしたことがない。

四、黨の組織の改造

俺は黨の宣傳部長としてナチス主義の宣傳に従事すると共に、一方に於ては怪しからぬ奴等の黨に入つて來るのを防ぐ爲め、宣傳の際には故意にナチス運動は辛いものだと言つて氣の弱い奴等を脅かしてやつた。變な奴が黨員になるのを防ぐ爲であつたのだ。黨員になり度いと言ふ者があると、俺はナチスは命がけの仕事で、黨員になればどんな危険に遭遇するか判らぬと言つて脅かしてやつたのだ。さうすると大抵の者は尻込して逃げて行くのであつた。それ故に當時寄つて來た人間のなかには

ナチスの主義には全然賛成だが、表面きに黨員にはなれまいといつて尻込する者が少からずあつた。命がけでなければ駄目だと云はれては、氣の弱い中産階級やインテリが二の足を踏むのは當然のことであり、これが亦彼等の爲めにも善く黨の爲めにも善かつた。

彼等は本當にナチスの精神が判らぬ連中だ。こんな連中や己れの利益ばかり考へて居る我利々亡者を欲するが儘に入黨させて置いたら、黨は大きくなつたかも知れぬが、若々しい闘争精神の熾んな今日のナチスは無かつたであらう。

當時の俺のプロバガンダは手厳しいものであつた。それ故に多少の例外はあつたが、それも承知で入黨して來るものは何れも元氣のある者ばかりであり、その爲めに黨の活氣はいやが上になつた。黨の外部でも肚のなかでは賛成だが表に立てないといふものが次第に少くなり、からだを投げ出してとまでは行かぬが、どうしてもナチスに勝たせたいと祈る者が數萬の多きを加へて行つた。

一九二一年の半頃まで、俺はかくして専らプロバガンダに力を注ぎ、黨に對しても相當の貢獻をなして來たところが、同年夏に一つの事件が持ち上がり、それを契機として俺の仕事にも變動が來た。

當時黨内一部の空想家は黨の實權を己等の手に握らうと試み、黨首も亦陰に陽に之を支持した。之れ明かに陰謀である。それ故に俺達はその陰謀を破棄すると共に、黨の總會は満場一致を以て俺を黨首に推選したのである。此の時から俺は黨を統轄することになつたが、それと同時に黨則に新しい一

一八二
つの定款が挿入され、黨の事は黨首が一切の責任を負ひ、從來の委員會の決議を廢し、分業制で行くといふことになつたのである。而してそれが又直ち實行されて、今日に及んで居るが、成績は頗る善い。

俺は一九二一年八月一日から黨の改造に着手した。その時に俺を輔佐して呉れた人々の好意は今も尙ほ覚えて忘れない。

右の定款に由る我黨組織の改造は、既成政黨では思ひもよらぬ過激な新制度であつた。

一九一九年から二〇年まで我が黨の組織は、上に幹部會なる機關があり、黨の部會で選舉するのだが、部會に出席する者も亦選舉されて出て來るのだ。幹部會には會計部長、文書部長、議長各正副二名宛あつて、外に宣傳部長その他幾人もの輔佐員があつた。

議會制度は我等の極力排撃するところである。然るに此の幹部會はバラメンタリズムの選舉主義に由るものである。之が抑も滑稽千萬といふべきでないか。市町村の自治體から聯邦議會に至るまで、聯邦議會から中央議會に至るまで悉く選舉で行くのが所謂バラメンタリズムだ。而してドイツは國を擧げて選舉第一のバラメンタリズムに悩まされて居るのだ。而して我等の攻撃するところはバラメンタリズムにあるのだ。議會制度を攻撃しながら我等自らが黨内の組織に選舉合議制を採用してゐるのは矛盾の甚しきものである。

一八三
ナチスにして黨の基礎を固くし、國家再建の使命を果さんとせば、此の如き黨内の矛盾に向つて先づ斧鉞を下し、黨の組織を改造する必要のあるのは勿論のことだ。

幹部會は總てが多數決である。組織から云へば幹部會は小さい議會と異なるところがなかつた。幹部會の中で、誰も自分で責任をとるものがないのだ。理窟の多いことも議會のそれに異なるところがない。幹部會に出席する者は文書部長、會計部長、宣傳部長、黨務部長その他幾多な人間で、合議制である。之れが俺には始から判らなかつたのだ。則ち幹部會が開かれて相談が始まると、判らない癖に各部のものが、畑達の他人の管轄にまで要らぬ口を利くのだ。文書部のものが會計のことに口を出し、會計部の者が黨務のことに口を出し、黨務のものが宣傳部のことに容喙するのだ。容喙するといふと語弊はあるが、合議制と云ふ以上一應皆に計らなければならぬのも止むを得ざることと言へよう。然しながら抑も黨内に部局が設けられ仕事に由つていくつにも分れて居り、夫れ夫れ部長を置くは、一つになつて居ては本當の仕事が出来ない爲めである。果して然りとすれば、始めから各部長に責任を持たせて、他の部のものに喙を入れさせないやうにするのが當然である。それを爲さないで、一つの問題に對し、互に所管の違つた者が集まつて多數決で定めて行かうといふのは、馬鹿々々しさの限りである。

それ故に俺は始めから幹部會などに出席せず、任かされた宣傳のことに懸命になつて働いた。俺は

判りもせぬ他人の仕事に口を利くのは厭だつたが、他人が俺の仕事に喙を入れるのも一層我慢が出来なかつた。俺は何人であらうとも宣傳のことで俺の仕事に干渉がましいことをすれば、頭からはねつけて手をつけさせなかつた。

そこで黨の新定款も出来、黨首の位置に据り、自由になると、俺はまづ幹部會の合議制度を廢し、所管事項については各部長に全責任を持たせて、他のものが干渉せぬことに改めた。

今その大要を述べると黨首は黨の全體を統轄指導し、幹部又は平黨員の受持を定め、各自の受持に對して全責任をもたせることにした。責任を持たせるといふのは黨首に對してであつて、部下や同僚に對してではない。斯くて黨首は各部を統率し協力させる。今若し從前の合議制を多數決主義と云ひ得べくんば、ナチスの新制度は責任主義とも云ふのであらう。ナチスの組織は責任主義になつた。

責任主義はフュラー主義である指導者主義だ。指導者主義は今では黨内で殆んど自明のこととせられ、何人も疑を抱く者が無いほどになつた。唯地方では因襲の力が強くてどこでも行はれるといふ譯には行かず、ナチス支部でも今尙合議制又は多數決でやつて居るものもある。多數決主義は責任が輕くて關係者はらくだ。自分で決めて自分でやつて行くと、責任が重くて骨が折れる。小人は安易を選んで骨の折れることを逃げたがる。地方支部に今尙責任主義の徹底しない所以であるが、俺は假令時間がかゝつても、責任主義はどうしても黨全體に普及させねばならぬ大切な原理だと思つて居る。

それでなければ上に立つて働く本當の氣持も出て來ない。

五、新聞經營部の獨立

ナチスは議會政治を非とするものである。議會政治を非とする我が黨の組織が議會主義に准ずるなどは、他人の非をとがめて自らその非に倣ふものと云ふべきだ。

當今は何でもかでも多數決主義だ。多數政治はどこにも責任をとるものがないだらしない制度だ。俺達の運動では責任を持つて矢面に立つものが上に立ち、下の者が之について行くのだ。責任主義といひ、或は指導主義といふのは之れだ。責任主義の運動は必ずやだらしない多數決主義の運動に執つて代る時が來よう。

責任主義の採用と共に黨内では黨で經營する事務と一般の黨務との區別が明かにされ、兩者混淆されなくなつた。

それが爲めに黨附屬の營業は、政治運動から解放されて立派な成績を擧げるやうになつた。ナチスの前身であつたドイツ労働黨では、俺が入黨した當時黨員は僅かに六名といふ少數で、黨は之を六人黨と呼んだものだ、その頃は事務所もなければ事務員も居らず、黨の印さへなく、印刷されたものなどは無論なかつた。幹部會の間かれるところは始めはヘレンガッセの安宿であつたが、ガスタ

一八六
イビのカフェへ移つたが、之もなさないものであつた。そこで入黨して間もない俺は、ミュンヘンの町中のレストランやカフェを探し廻つて、汚くても善い自分達で使へる室を得たいと思つた。そのうちに見つかつたのがタールのシテルンエツカプロイの一室であつた。シテルンエツカプロイは昔は羽振の善い料亭であつたが、俺の見つけた室は九天井で嘗てはバイエルン選出の帝國參議員が寄つて飯を喰つたところである。かびの生えたやうな參議員達にはふさはしいものであつたらうが、はちされさうに活潑で元氣なナチスの事務所としては誠に陰氣で暗く、ふさはしからぬ場所であつた。道路に面したところに窓が一つあるばかり。それも小さい窓だから、日の照つて居る眞夏の晝間でも室の中は陰氣で暗かつた。間代は月二十五マルクで僅かなものであるが、當時の俺達にとりでは大金であつた。室は暗くても安いのだから仕方がないとして文句は言はなかつたが、壁の飾をとり、室内を片づけられたときは、事務室といふより寧ろ洞窟に近いものとなつたのは流石の俺達もがっかりせざるを得なかつた。

かくて新に移つたところも室はわるかつたが、それでも自分達だけで使へる室の出来たのは非常な向上であつた。それから電燈もつけ、電話も引き、損料借りだが椅子も卓子も一揃は出来た。戸棚も買ひ込み、それと家主のものである二つのクリーデンツに宣傳ビラや、ブラッカードを仕まひ込むやうになり、室はどうやら整つて行つた。

⑤
幹部會は一週一回宛開いて居たが、幹事だけでは不自由なことが多く、誰か一人世話をしてくれるものがどうしても必要となつて來た。

叔て人を儲はふとして之を見つけるのは、易しいことのやうで一方ならぬ難事であつた。黨員と云つても幾人も居ないのだから、そのうちから、自分のことを棄てて置いて、黨の仕事に没頭してくれ

るやうな人間は探がしても見つかるわけがない。

俺の戦地での友人にシュストラといふ男が居る。俺はどうとう此の男に目をつけ、頼んで黨の事務を見てもらふことにした。彼は最初は六時から八時までの間に來て事務を見たが、やがて五時から八時となり、更に延ばして午後は半日事務所に居てくれることになつたが、そのうち午後ばかりでなく、午前からも出勤し、朝から夜遅くまで終日事務所働くこととなつた。シュストラはまめで正直な善い男であり、黨大事に働いてくれた。彼は小さなアドラー印のタイプライタを一臺事務所へ持込んだ。それでも借り物でなく、彼の持物なんだ。俺達はそれを盛んに利用した。之が恐らくは黨の使つたタイプライタの最初のものであらう。後で月賦でシュストラに金を拂ひ、黨で買ひ取つたのも、此のタイプライタだ。そのうち金庫も必要となつた。併し黨の財布が重くなつて、入れどころに困つたからといふやうな景氣の善い話でなく、黨員名簿や重要書類を藏つて置く爲めだ。黨は依然貧乏で折々は乏しい俺の申着からたまへをしなければならぬ状態であつた。

それから一年半も経つと、手狭になつたので事務所はホルネリウス街の新居へ移された。同じくカフェであつたが、室は一つでなく、三つもあつて、他に自由に使える大きな室もあつた。その時俺達は黨も大きくなつたものだと思つた。而して一九二三年十一月まで俺達はその中で會つて居たのだ。

ナチスがフェルキツシャー・ベオバハタ紙を手に入れたのは一九二〇年の十二月であつた。同紙はその名の示す如く、右翼の新聞であつた。ナチスはそれを買収して黨の機關紙としたのである。最初は一週二回発行の小新聞であつたが、一九二三年の初に日刊新聞となり、同年秋から形も大きい現在のフェルキツシャー・ベオバハタとなつた。

俺は新聞のことは全然素人であつたから、經營には相當に手を焼き、高價な月謝を拂はなければならなかつた。

當時ドイツの新聞と云へば多くはユダヤ系の新聞で、國民黨の新聞で新聞らしいものは殆んどなかつた。此の間にありて、右翼の新聞をうまく經營して行かうといふのだから並大抵の骨折でないことは誰にもわかるであらう。右系の新聞の振はないのは第一に經營が拙であり、第二に新聞で主義の押賣はやるが主義の爲めに關ふ者がなかつたからだ。つまり彼等は坐つて居て新聞で國民黨の宣傳が出来ると思つて居たのだ。

フェルキツシャー・ベオバハタ紙も亦國民黨系の新聞の短所を持つて居た。主義は國家本位で善

いけれども、經營が拙くて商賣にならず、缺損ばかり續けて居たのだ。苟くも新聞と名を打つて世に出る以上、經營の方でも他の新聞と競争して獨り立ちが出来るやうにならなければ駄だ。他の援助や献金で僅かに發行を續けるやうでは意味がない。買収當時のフェルキツシャー・ベオバハタ紙も亦、缺損はいつも他から貰つて來て穴埋めをして居た。恥づべきことだが、それがあたりまへだと思はれて居たのだ。

他の寄附や献金で漸くに存立を續けて行くなどは卑屈千萬なことだ。それ故にフェルキツシャー・ベオバハタ紙を引受けると同時に、俺は先づ經營方針を改め、新聞として財政的にも獨立が出来るやうにしたいと思つた。幸之れに打つてつけの人物があつて漸く助かつた。それは、マクス・アーマンなんだ。アーマンは新聞の經營を引受けるばかりでなく、黨の事務をも一手に引き受けてやつてくれた。俺が彼を知つたのは一九一四年で、兩人とも戦地に居た時であつた。俺は部下で彼は俺の上に居たのだ。それから四年の間戦地で共に働いて居るうちに俺は彼の腕と實直さにすっかり惚れ込んだものであつた。

一九二一年の夏も暑いさなかであつた。當時黨内にぐたぐたがあり、事務員のなかにも不都合なのが澤山居て毎日を居た。俺は一日街頭で偶然にも聯隊に居た時の友達のマクス・アーマンにバッタリ出遇つたのだ。事情を打ち明けて頼んでみると、その頃善いところに勤めて居た彼は、容易

にウンと言はなかつたが、暫らく考へた後、俺が獨りでやつて行くなら助けもしようが、幹部會などと云ふぐうたらな人間が要らぬ口を利くやうだと勤まらないから御免を蒙るといふのだ。俺は彼の言ふ通りにするからと云つて引張つて來た。アーマンをつれて來たいさつがざつと此の如しだ。かくして俺の事務も新聞社の經營も從前の弊を一掃して鮮かに整理のついたのは専らアーマンの功績であつた。然りながら出る杭はうたれる。才あるものは衆人の妬みを免れることが出来ぬ。アーマンの場合にもそれが避けられなかつたのは遺憾だ。

一九二二年にもなると、黨は事務の方でも黨務部の方も大體の基礎が出来上つた。黨員の纏まつた名簿も出来れば、黨の會計も整理が出来、經常の支出は經常の收入で支辨され、臨時の收入は臨時の支出に當てて居たので、不景氣時代でも借金なしに切抜けて行くことが出来たばかりでなく、新聞などは反つて賣れ行きが善くなつた。これにもいろ／＼苦心があつたので、我が社で社員を採用するに一般の會社で人物を採用するのと少しも違はなかつた。事務員はナチスであるから探るとか、ナチスでないからとらぬといふやうなことはしなかつた。當人の才能本位で腕のあるものは黨外人でもどし／＼採用したが、口でナチスを誇つて居ても働かないものは駄目だ。ナチスでなくても己れに任された仕事を忠實にやつてのけるものはナチスなんだ。アーマンはフエルキツシャー・ペオバハタの經營に於ても、又黨の事務に於ても、情實で人間をとるといふやうなことは斷じてなさなかつた。既成

政黨は政權をとると、黨員で役所の椅子を占領することばかり考へる。俺達は政黨の獵官を力を極めて攻撃して居るのだ。他を攻撃する以上、己達の黨でも黨員と黨の營業との間に明かな區別を置き、他の黨員に營業や事務にまで立ち入つて、口を利かせたり、事務員の押しつけなどをさせてはならぬ。それがアーマンの強い主張であつた。或る時フエルキツシャー・ペオバハタの營業部で社員を採用したが、採用した人間はバイエルン國民黨に近い人物で、ナチスとしては面白くないのだが、力倆手腕から云つて惜しい人間だと言ふので、アーマンは反對を押し切つて採用した。此の公平無私な拔擢が又他の社員の勵みにもなり、之れが契機となつて今迄ナチスでなかつた従業員の中に、向から進んでナチスに轉向し、忠實に黨の爲めに働く者が多くなつた。こゝに黨外の人間と黨員とが居て、兩者手腕が同じなら、黨外の人間よりも黨の人間を探るのは言を俟たないが、何人とも雖も黨員だといふ理由だけで、採用されることは斷じて許されなかつた。アーマンが事務本位、經營本位の方針で黨部の干渉を排斥したのは頗る善かつた。無數の會社商店が潰れ、新聞社でも閉鎖するものが、數千の多きに上つた彼の恐るべきインフレ時代に於ても、ナチス黨が黨の財政にも困らず、フエルキツシャー・ペオバハタなどは、閉めるどころか益々大きくなつて行つた。之もアーマンの手腕に由るのだ。

ペオバハタ紙はその頃既に一流の大新聞に數へられた。

一九二二年はそれから尙黨の改革が続けられた。曩に云つたやうに黨には幹部會があつて幹事な

るものはいろ／＼のことに喙を入れたものである。俺は黨首になつてから、幹部會が所管外のことに口出しするのを禁じた。自信のある者は他から喙をさしはさまれることを極度に厭がる。それ故に有能な人材を得ようとせば、他からおせつかいの出ないやうにして置かねばならぬ。俺が幹部の人達のおせつかいを封じたのはその爲であつた。俺がやかましく言ふやうになつてから之等の先生は次第に口出しをしなくなつたのは善いことであつた。彼等は一體おせつかいであつて、わかりもしない癖にその道の者のやつて居ることにむやみと干渉がして見度いのだ。之等のてあひが眞面目に働いて居る者を前に置いて、勝手な熱を吹くのは見て居てもしやくだ。俺は彼等を抑へて若い者に手腕を發揮させた。

おせつかいな幹部連の口を封ずる最も善い方法は、喋らせてばかり置かず、喋る通りに仕事をやらせてみることだ。口を出したら幹部などといふやうなものは、限りなく案を出すけれども、何れも己はやらずに他人にやらせようと言ふので、自分達でやれといふと尻込をなし、案はいつのまにか立ち消えになるのが落だ。單り政黨の幹部會ばかりでない。帝國議會の議事だつて大抵同じものだ。議員や委員會は勝手な案を出し、政府に對して註文をつけるが、彼等にやらせたら一つも出來さうなものがない。議會などは凡そ他愛のないものだ。

民間でも官廳でも店が繁昌したり、治績の舉がつたりするのは要するに上に立つ者の手腕奈何に由

るのだ。而かも才能のある者をして十分に力を發揮せようとすれば傍から口を出して常人を掣肘するやうなことをしてはならぬ。上に對しては絶対に責任を持たせると共に、下に對しては思ふまゝに振舞ひ得るやうに、支持してやる必要がある。それが常人の才幹を生かすとともに事業も之に由つて成功するのだ。それ故に前にも言つたやうにその途で苦勞をした者が懸命で働いて居るのに、他のものが口を出すやうなことを俺は絶対にさせないことにした。之が又非常にうまく行き、第一營業方面の成績が善くなり、俺の入黨した四年前は一つの印章さへなかつた貧乏な黨も、一九二三年十一月九日の解散と共に沒收された黨の財産は、新聞社などをも引くるめて十七萬マルクになつて居た。黨部と營業部との分離、人材の拔擢等がその主なる原因であつた。

第十二章 労働組合の巻

一、労働組合は缺くべからざるもの乎

ナチス運動の發展につれて、一九二二年黨は、労働組合問題を決定しなければならなくなつた。ナチスも政黨である以上黨勢を擴張せねばならず、黨勢を擴張するとなれば先づ労働大衆に目をつけねばならぬが、労働大衆の獲得になると、黨内ではいつも次のやうな悲觀論が行はれた。労働者は反對黨である社民黨の陣営内にあつて、労働組合を組織し、團結が固いから、これをナチスの味方に引入れることは不可能だといふのである。

この論は根據のないものでない。相當の理由がある。今日労働組合を離れて工場で働き得る労働者は一人も無いと云つて善からう。労働者と云へば十中八九は何れかの組合に加入して居る。而して組合は個々の労働者に代り、企業主と交渉して賃銀の値上げをさせたり、或は又値下りを防いだりしてくれるのであるから、労働者としても、義理にも組合を出ることが出来ない。之は否定の出来ない事實だ。

労働組合のことは普通の企業家に話しても判らない。労働組合は企業者の横暴に對抗する労働者の

團結であつて、止むを得ざる必要に由つて生れたものだが、我利一點張の資本家には、それが判らない。資本家は始めから労働者が團結して資本家に對抗するのは怪しからぬと言つて敵視する。此のやうなてあひは結局言つても判らない没分曉漢だ。

労働組合の性質、目的並に組合の發生する所以に就ては前編に於て既に一部を述べて置いた。蓋し國家が代つて利益を保護してくれるか、或は又資本家乃至企業家が、今日の態度を改めて労働者の搾取を止めない限り、労働組合の存立は止むを得ない。今日のやうに國家が放任して顧みず、企業家なる者亦聊かも國家觀念の持合せがなく、労働者を人間と思はない者が多い世の中では、團結して資本家に對抗するより他労働者に殘された途はない。労働組合は労働者の自衛的機關だといふのが、他の組合論であつた。

右の考は一九二二年になつても毫も變るところがなかつた。唯だ、理論として之を認めるだけでなく、實際問題として労働組合に對してどう處理して行くかが問題となつたのだ。

労働組合が必要なりとして、ナチスでも組合を組織するとすれば、先づ左の四點を攻究しなければならぬ。

一、労働組合は必要缺くべからざるものであるか。

二、ナチス自ら労働組合を組織すべきか、或は又獨自の組合を組織せずして既存の組合にもぐり込

ませるか、どうか。

三、ナチス自ら労働組合を組織するとすれば、その形態を奈何にすべきか、又組合の目標をどこに置くべきか。

四、ナチスも労働組合を組織するとして、その方法を奈何にするか、則ちどうして組合を組織するか。

以上四つの問題中 (一)は既に論議の盡されたものであつて、更めて研究の必要はない。俺の観るところに由れば労働組合は決して無用なものでなくて、國民經濟機構の重要な部分を占むるものであり、社會政策の上からばかりでなく、民族的政策の點から見ても缺くべからざる重要な存在である。本當の労働組合は労働者の生活を確保し、而して労働者は組合に由つて協同的精神を養ふのである。果して然りとすれば組合の存在は決して禍でなくて國家は之に由つて反つて存立の基礎を固くする。俺達は今日の國家組織を以て満足する者でない。他日ナチス・ドイツが出現し、職業別議會又は經濟議會といふやうなものが出来れば、第一にその基礎となるべきものは労働組合でなければならぬ。労働組合はこんな點から見ても解消せずして存続するべきものである。

二、ナチスの理想とする労働組合

第二の問題も解答は明瞭だ。既に労働組合なるものが必要なものであれば、ナチス自身も独自の組合を組織するのが當然である。唯だそれをどんなものにするかといふのが問題になるのだ。

惟ふに我黨はナチス・ドイツの建設を目的とするものである。従つて黨としては豫めその準備がなければならぬ。詳言すればナチスの機構は之を約すれば黨の組織であり、擴充すれば國の組織となるやうなものに仕組まれて、又それに必要な人的資源といふやうなものも用意して置くべきだ。人間の用意もなく、黨の機構も出来て居ないにせよ、政權さへとればそれで新體制が作り上げられるものと考えざる者があつたら、それこそ大間違だ。凡そ世の中のこととは何事でも然らざるはないが、新體制の創始に於ても眼目は機構の形態でなく、魂だ。體制は機械的に作り上げられても、魂は今日言つて明日からといふやうに手取早く得られない。ナチスはフューラー、プリンチプ即ち指導者主義を主張する。上からすれば統率主義で、下から云へば服従主義のことだ。ナチスが天下を取つたら、上から號令を下して政治形態の各部に指導者主義を採用させることは容易である。併しそれでは出来たものは形はあつても魂がない。ナチスがフューラー主義の國家を打出するを以て運動の目標とするものなりとすれば、新國家を建設するに先ち黨自らが、既に小さなナチスの國家であり、黨員も亦それに慣熟せねばならぬ。この準備がなくて専ら紙上の計劃を基礎に、號令に由りて國家の新體制を創めんとするが如きは智者の事でない。強いてやれば紙上の計劃でもやれないことはなからうが、それでは出来上

るものに生命がない。ワイマル憲法が生きた實例だ。ワイマルの憲法は机上の空論に由つてこね上げられたものであるから、國民の實際の生活に縁がなく、形ばかりで生命の認むべきものがない。

ナチス・ドイツはワイマル・ドイツの覆轍を踏んではならぬ。ナチス・ドイツを作り上げるには豫めその基礎となるべき組織を準備して置かねばならぬといふのも之が爲だ。

前にも述べた通り、ナチス・ドイツに職能議會といふやうなものが出来れば、職業別に各部門から代表者が出るのだから、労働組合などは最も重要な役目を演ずることになるのだ。従つて職能議會に代表者を出すべき労働組合がナチス主義のものでなければならぬことも、亦當然だ。既に此の理由からだけでもナチスとしては、今から独自の労働組合を持つて居るに越したことはない。何となれば、ナチス・ドイツは、畢竟ナチスの黨の組織を擴充するものに過ぎないからだ。

ナチス・ドイツにありては資本家も労働者もひとしく國民として、國家に奉公することを要求される。此の事は極めて大切なことであつて、是非とも勞資双方に知つて置いてもらはねばならぬ。ところで人間は口で言つて居ただけでは、決してその通りになるものでない。ナチスの主義を叩き込み、双方を國家本位で働かせるやうにするには、兩者をして實際問題について、行きつくところまで争はしめた方が善い。さうして居るうちに自ら妥協點が発見され、協調も生れて来るのだ。外に立つて理想を言つて居るだけでは、兩者を協調させることは望まれない。この意味からしても、ナチスが自ら

労働組合を造るべきだとの結論になつて来る。

労働組合組織に関する第三問、則ち組合の目標奈何は右に述べたところによつて明かである。

三、ナチス・ドイツの勞資協調

ナチスの労働組合は階級闘争の機關でなくて、職能代表としての機關である。ナチス・ドイツには階級はない。權利に於ても義務に於ても國民は一切平等であつて、國家のうちに於て、區別のあるのは國民と准國民との差だけだ。

同じ國の内にありながら労働者は集つて一つの階級を組織し、同じく階級を代表する資本家の集團と對立して闘争を續けて居るのが今日の狀態である。ナチスの労働組合は此の種の階級的闘争團體でない。本來労働組合なるものは階級闘争を目的として生れたものでない。階級闘争の機關となつたのは組合がマルキシズムの影響を受けてからのことで、端的に言へば、マルキシズムが労働組合を階級闘争の道具に利用したのだ。マルキシズムの元締であるジューは國境を撤回し、世界を擧げてジューの天下たらしむるを目的とするものである。ところで個々の國家を倒壊せしむるにはその國の内部に勞資の軋轢を生ぜしめて、商工業を破壊するより善きはない。之れが則ちマルキシストが先づ無害な労働組合に階級闘争的性質を賦與した所以である。

勞資の階級的對立は國家の大を害し、國民經濟の發達を妨げ、惹いては關係者自らの損失となるのだ。ナチスが労働組合を作る趣旨は之に異なり、一切の紛争原因を排除して、勞資の協調を謀り、それに依つて國家を強固にし、國民經濟の獨立を確保せんとするにある。

ナチスの労働組合は總罷業もやる。併しそれはマルキシストの如く國民經濟を破壊し、惹いて國民の生活を脅かす手段でなくて、生産を阻止し、國民の生活を危殆ならしめる資本家側の横暴を制し、國家の經濟力を高める手段である。蓋し労働者をして十分に能率を發揮せしめんとすれば、労働者の法律的、並に社會的地位の向上を必要とし、同時に國民全體としての生産増進を必要とするからである。

ナチス労働者の考ふべきは、國民經濟の繁榮は則ち労働者自身の繁榮であるといふことだ。又ナチス資本家の考ふべきは、労働者の幸福と満足なくして資本家自身の經濟的繁榮がないといふことだ。

ナチスの労働者と資本家共に、國民から生産を委託されたものと考へらるべきである。こゝに注意すべきは假令國民の委託に由るとは云へ、兩者に對しては十分に個人活動の自由が認めらるべきことである。何となれば上からの強制に由るときは各自に自由のある時に比し、能率が擧らず、且つ優勝劣敗の自然淘汰が行はれなくなる虞あるが故である。

従てナチスの労働組合が總罷業の擧に出るのはナチス・ドイツの新國家が出現するまでのことであつて、ナチス・ドイツが出来上つて了へば總罷業などは跡を絶つべきものである。今日では資本家と労働者とが二大陣營に分れ、閉め出しと總罷業とで對抗し、國民經濟に大なる損害を與へて居るが、新國家出現の暁は國家が代つて双方の調停に任ずることとなるのである。現在では資本家と労働者が對立して直接に争ひ、それによつて双方共傷つて居るのだが、將來は資本家労働者が直接に折衝することがなくなり、職能代表部會と中央經濟議會が、賃銀問題の爭議を解決することとなるのである。職能代表部會や中央經濟議會では、個人の利益よりも國民經濟の大局から適當な解決が下されるのだ。營利を主とせずして祖國の利害が第一に置かれるのだ。

要するにナチスの労働組合は右の如きナチス・ドイツの一部たるべきものであつて、ナチス・ドイツの新體制は、國民全體が各自の天分に應じて協力し、國家國民の存立を確保するにある。

四、ナチス労働組合の可否

第四の問題則ちナチスの理想とする労働組合は右の如しとして、扱て奈何にしてそのやうな労働組合を造るべきかである。之は當時最も面倒な問題であつた。

凡そ何事たるを問はず一般的に論ずれば競争の多いところで仕事を始めるよりも、競争のないところ

ろで仕事を始める方がらくだ。未だ誰もやつて居ない町へ行つて新しい商賣を始めるのは楽だが、一軒でも既に同業者があると油断が出来ない。殊に二軒だけで足りて、他の店が必要でないといふところでは、以前からある店の隣へ行つて新店を開くといふやうなことは非常な冒険である。何となれば新店をうまくやつて行くには、以前からある店を押し除けて没落させなければならぬからだ。

ナチスの労働組合とマルキシストの労働組合とは之と同じことであつて、二つの組合は兩立しないのだ。ナチスの労働組合が目的を達する爲めには、既存のマルキシストの組合を打倒しなければならぬ。ナチス労働組合としては既に一定の主義を有する以上、反對の組合の存立を默認して居るわけにはゆかぬ。ナチスは姑息な妥協や苟合を排斥する。いつでも喰ふか喰はれるか、こちらが勝つて對手が倒れるが、對手が勝つてこちらが負けるか、どちらか一つなのだ。ナチスの労働組合が出来れば必然的にマルキシストの組合との間に激しい闘争が行はねばならぬ。而して此の闘争に處して勝利を占むべき方法が二つある。

一、ナチスの労働組合を結成し、そこに立ち籠つてマルキシストの労働組合と闘ふこと、

二、マルキシストの労働組合に紛れ込み中から之をナチス化すること、つとより早く云へばナチスがマルキシストの労働組合を乗りとること

方法は此の二つである。ところで第一の方法を採用せんとすれば次のやうな故障がある。それは第

一黨に全然資金がなかつたことである。當時はインフレで世間一般が儲んで居たばかりでなく、數年來この労働組合も金がなく、労働者は組合に加入しても殆んど何らのおかげもなかつた。従つて組合員でも組合の資金を拂込むものがないといふ状況であつた。之は一般の組合ばかりでなく、平素資金の潤澤を誇るマルキシストの労働組合さへ此の例に洩れず、四苦八苦の状態で一時は殆んど崩壊の危機に瀕したものであつた。唯だマルキシストの労働組合にはその後クノー宰相から幾百萬といふ資金が融通されたので、どうにか之を切り抜けて行くことが出来た。それでなければとくに倒れて居たのだ。それ故にマルキシストの労働組合を救つたものは、當時國民から國家の救主のやうに云はれたクノーであつたとも云ひ得る。

ナチスにはこんな資金を融通して呉れるものが一人もない。従つて金のないナチスの労働組合が出来たとしても組合員になるやうな者がいないのは判り切つたことだ。假令加入しようと云ふ者があつたとてろくな者は來ない。

第二に資金があつたとしてもそれだけでマルキシストの労働組合を潰すことは殆んど不可能なことであつた。當時はマルキシスト労働組合は勢力が強く、どんな偉い人間が出たとして齒が立たない状態であつた。マルキシストの労働組合は階級闘争主義に由り國家に禍して居たものであり、一日も存在せしむべきものでないのだが、之を崩すことが容易でない。マルキシストの労働組合を突き崩し、そ

の跡にナチスの労働組合を築き上げて行くものがあつたとしたら、それは歴史に特筆さるべき非凡の偉人でなければならぬ。

ところがそんな人間は見渡したところ一人も居ない。

人或許は曰ふであらう。マルキシストの労働組合はほんくらばかりで、人間が居ないでないか。そんなに畏れる必要がどこにあるかと。之は殆んど意味をなさぬ言分だ。マルキシストの労働組合も始め微々たるものであつたが、今日では隅々までも秩序の行き届いて居る老大な組織となつて居る。ナチスは之を向に廻はして闘はねばならぬのだが、攻める者はいつでも、守る者より優れた力を備へねばならぬ。それでなければ勝つ見込みは立たぬ。マルキシスト労働組合の堡壘を守備して居る者は、ほんくらでも、之を陥る者は、通常人の善くするところでない。一大英雄が起つて非凡の努力を傾けても容易に抜ける見込みはない。而かもそんな英雄が居ないとすれば、徒らにマルキシストの労働組合に戦を挑むは愚だと云ふことになる。

智者は運命に逆はずといふ。マルキシストの労働組合と闘つても勝てないのは天である。天に逆ふのは智者と言ふことは出来ぬ。之を知らず、足らざるの兵力を以て不落の城塞を攻めんとするは、徒らに怪我人を出すばかりで益がない。

望みがあればやつても善いが、望がなかつたら生半可なことを仕でかすよりも、始めから手出しを

せず、暫く形勢を見た方が賢明だ。事を始める者はいつでも這般の呼吸を忘れてはならぬ。

最後にかく言つたら或は俺のデマだと言ふ者があるかも知れぬが、そんなことはどうでも善いとして俺にはナチス労働組合を作らない理由がもう一つあつたのだ。それは他でもない。凡そナチスのやうな一個の政治的理想を以て乗り出したものが、早くから世のなかの經濟問題に置き置きは、いつのまにか傍道へ外れる虞がある。殊にドイツではその弊が多い、政治運動に乗り出した者が經濟問題に熱中すれば、本来の政治運動が疎かになり易い。個人にして生活の條件が善く懐具合が善くなつて、小さい家でも建てられるやうな望が出ると、貯金をして家を建てることばかり没頭し、他を顧みなくなるのが人情だ。政治を改善しなければ貯めた金も取上げられるやうになるのだが、それに氣のつくものは少いのだ。人間は弱いものだから、暮しが樂になればもう政治的理想の爲めに闘ふことを忘れて、安易な目前の生活で満足しようとするのだ。

ナチスの政治運動は今始まつたばかりのものである。ナチスとしては何を差措いても、理想の實現に邁進すべきであつて、全力をこゝに集中せざれば運動の勝利はないのだ。

政治よりも經濟問題に重きを置くと、政治的闘争を忘れ勝ちになる實例は他に求むるまでもなく、我等の眼前に横はつて居る。

一九一八年十一月の革命は眞の労働組合に由りてなされたものでなくて、眞の労働組合が革命を抑

へられたのだ。ドイツ國民は此の事實を看却すべきでなかつた。當時總ての人の關心が専ら經濟的復興の一點にかけられて居た爲め、ドイツの將來の爲に起つて政治的闘争を始めるものがなかつた。此の如き過誤はひと事でない。經濟問題ばかり取り上げて居たら、ナチスだつて同じ過誤に陥るのだ。我等の力を注ぐべき當面の緊急問題は政治闘争だ。

政治闘争に勝ちさへすれば經濟ばかりでなく、他の問題だつて自ら解決されるのだ。始めから労働組合や住宅問題などに力を入れて居たら畢竟蛇蝎とらずになる。何となれば經濟問題も大切に相違ないが、他日ナチスが天下をとれば自ら解決されるのであつて、ナチスの政治運動が成功しなければ、經濟問題だつて、我等の思うやうに解決は出来ないのだ。經濟問題にのみ心を奪はれて居ると、ナチスが労働問題を解決するのではなく、労働問題がナチスを左右するといふことにもなりかねないのだ。

ナチスの労働組合はナチス主義で固まり、マルキシストなどに攪き亂される虞のないものでなければならぬ。又組合が出来ても、マルキシストの組合を叩き潰すことが出来ず、對立して競争して居るやうでも意義をなさぬ。そんなものなら有るよりも無い方が善い。一度ナチスの労働組合が出来たら階級闘争を目的とするマルキシストの労働組合の存立を不可能ならしめ、労働組合は總て労働者の利益保護を目的とするものに改造しなければならぬ。而して之も亦ナチス主義の徹底に由らねば出来ないことだ。

以上挙げ來つた諸點に鑑み、俺はナチスが独自の労働組合を組織せざることにした。ナチスの労働組合でマルキシストの労働組合を叩き潰すことが出来ないといふれば、生なかナチスの労働組合など造らぬ方が善いのだ。

六、マルキシスト労働組合の擾亂

ナチス独自の労働組合結成が不可なりとすれば、殘された方法はナチス黨員にしてマルキシストの労働組合に在るものをして直ちに組合を脱退させるか、然らざれば留まつて居て中から、組合をつき崩させるかである。どちらもあるくないが、俺は後者を可なりとしてそれを實行した。

一九二二年から三年にかけて、此の方法が又最も機宜に適した作戦でもあつた。何となれば當時ナチスは黨員が少かつたから、組合を作つても黨員の拂込む金だけでは問題にならなかつたし、黨員がマルキシストの組合内に居て、之を擾亂することは敵にとりては非常な痛手となるからだ。労働組合を作れば資金を徴收せねばならぬが、確かな先の見込みもないのに乏しい労働者の収入から組合の資金を収めさせることは罪だ。それも考へねばならぬことだ。

政黨なら、出来ても倒れてもたいした損はない。黨員はあきらめさへすれば善いのだ。ところが労働組合のやうに經濟的利益を興へるといふ約束の下に資金を徴收して居るところでは、組合員の資金

だけ取つて置いて約束を果さないで解散などになると立派な詐欺になる。

かくて一九二三年の黨議ではナチスの労働組合を作らぬことに決しそれを實行した。當時一部では俺達の態度を問題にならぬとして自ら労働組合を組織したものもあつたが、何れも永續がせず、どれもこれも潰れて了ひ、始めから組合を作らなかつた俺達と同じやうな結果になつた。御苦勞であつたと言ふ他はない。おかげで俺達は自らを欺かず、又他をも偽らずにすんだのは幸であつた。完

附言。原書「後篇」は十五章より成るが、本譯書に於ては、第十三、第十四、第十五の三章は左の如く「マイン・カムプの外交篇」に收めてある。

第十三章「ドイツ、ビュンドニスポリテック、ナハ、デム、クリーグ」(外交篇「第二章「新三國同盟論」)

第十四章「オーストリア・エンティールンク、オーダー、オーストポリテック」(外交篇「第三章「ドイツの對露政策」)

第十五章「ノットヴェニア、アルス、レヒト」(外交篇「第四章「獨逸と佛蘭西」)

跋

此の「マイン・カムプ」の翻譯は、奥野七郎氏の筆に成つたものである。奥野氏は富山縣高岡の産、東京外語に獨逸語を研鑽の後、一時教壇に立つて居られたが、總て本野家經營時代の讀賣新聞に入社し、外報部長として令名あつた。前世界大戦後、外務省に情報部設置せらるるや、招きに應じ、爾來二十年間「國際事情」上に歐洲政局に關して健筆を揮ひ、外交知識普及に多大の力を致された。

二、三年前健康上の理由を以て情報部を辭したが、其の後も自宅に在つて「國際事情」に寄稿を續けた。「マイン・カムプ」の翻譯は一昨年より約二年に亘つての丹精の結果である。

近く情報部が發展的解消を遂げて内閣情報局に合流する際「マイン・カムプ」の翻譯完成は、奥野氏二十年の情報部勤務を表彰する記念碑と成つたのである。

奥野氏は老來意氣益々壯んに、今後も筆硯を新たにして、内閣情報局から國民に見えることであらう。

昭和十五年十月二十九日

情報部第二課長室に於て

高 津 富 雄

